

山元町文化財調査報告書第 14 集

# 北経塚遺跡

第 5 次発掘調査

—店舗建設事業に係る発掘調査報告書—



北経塚遺跡 G 区 (5 次調査) で出土した中世の遺物

平成 29 年 1 月

宮城県亘理郡山元町教育委員会

株式会社伊藤チェーン



## 序 文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の北経塚遺跡の調査は、店舗建設事業に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成27年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、中世を中心とする人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成29年1月

山元町教育委員会  
教育長 菊池 卓郎



## 例 言

1. 本書は、宮城県亙理郡山元町小平字北地内に所在する北経塚遺跡（5次調査）の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、店舗建設工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、調査原因となった事業主体者である株式会社伊藤チェーンから平成27・28年度に業務委託を受けた山元町が実施した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。北経塚遺跡（5次調査）の現地発掘調査・報告書作成業務を行った平成27・28年度の職員の体制は下記のとおりである。

教 育 長 森 憲一（～H28.9） / 菊池 卓郎（H28.10～）

課 長 齋藤 三郎

班 長 阿部 正憲

副 参 事 小淵 忠司（任期付職員 / H28年度）

主 事 山田 隆博★

主 事 丹野 修太（任期付職員 / H27年度） / 清水勇樹（任期付職員 / H28年度）

副 参 事 木下 晴一（香川県 派遣 / H27.4～H28.3）

技術副参事 星野 惠美（福岡県福岡市派遣 / H28.4～9）

技術 主幹 板倉 有太（福岡県福岡市派遣 / H28.10～H29.3）

技術 主査 城門 義廣（福岡県 派遣 / H27.4～H28.9）

技術 主査 川口 陽子（福岡県筑紫野市 派遣 / H27年度）★ ※★印：現地調査担当職員

調査補助員 佐伯 奈弓、千尋 美紀（H27年度～H28.9）★

発掘作業員 飯川 幸男、石井 進、梅村 眞智子、小野 和喜子、菅野 淳、橋元 和子、三坂 順子、  
三坂 春雄、森 忠男、矢吹 共子、遊佐 豊美、横山 幸、渡邊 洋子

整理作業員 梅村 眞智子、斉藤 則彦、高橋 みゆき、玉田 眞智子、萩本 厚子、橋元 和子、  
矢吹 共子、渡邊 洋子

4. 発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。  
佐藤 洋（仙台市教育委員会）、日下 和寿（白石市教育委員会）、藤田 祐（青森県埋蔵文化財調査センター）  
宮城県教育庁文化財保護課、株式会社伊藤チェーン、株式会社コメリ、小平区（敬称略）
5. 石器の石材については、実測者が肉眼観察を行った。
6. 陶磁器の産地については、仙台市教育委員会の佐藤洋氏にご教示いただいた。
7. 現地発掘調査について、指揮・監督・写真撮影を山田・川口・千尋が担当し、現地作業を発掘作業員、土層断面図の作成は千尋・三坂・矢吹・横山・渡邊が行った。
8. 本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については山田が担当した。  
遺物の実測図作成・写真撮影は山田、土器実測図のトレースは佐伯、石器実測図のトレースは山田が行った。  
遺構整理については、全般を山田・川口が担当し、断面図トレース、データ入力・校正を佐伯、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊が行った。
9. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災後の値を基本としている（基準点の位置については第9図参照）。

KT-1: X=223791.432 Y=3070.688 Z=7.372m（標高値） KT-2: X=223808.502 Y=3051.755 Z=7.177m

KT-3: X=223784.160 Y=3073.328 Z=8.200m KT-4: X=223794.282 Y=3056.514 Z=8.224m

KT-5: X=223805.618 Y=3038.560 Z=9.320m KT-6: X=223814.398 Y=3022.678 Z=9.942m

10. 本書の第2図は、土地分類基本調査における1/50,000地形分類図「角田」をもとに作成したものである。
11. 本書の第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000の地形図を複製して作成したものである。
12. 本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帖2010年版」(小山・竹原1973)を参照した。
13. 本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」(文化庁文化財部記念物課2010)を参考にし、以下の通りとした。  
SB: 掘立柱建物跡、SE: 井戸跡、SK: 土坑、SD: 溝跡、P: 柱穴・小穴
14. 出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。  
C: 土師器・かわらけ、E: 須恵器、I: 中世陶器、J: 磁器、L: 漆器、K: 石器
15. 遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。  
調査区全体図: 1/200・1/300・1/400、調査区部分図: 1/100、掘立柱建物跡: 1/100・1/200、  
溝跡: 1/80、井戸跡: 1/40、土坑: 1/40、断面図: 1/40・1/50、遺物実測図: 土器類1/3、石器1/2
16. 遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。
17. 本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、ロクロを使用していないものを非ロクロ成形と呼ぶこととした。
18. 基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。
19. 標高は、水準点を基にした海拔高度で示した。
20. 遺構内の傾斜の部分は「TT」、後世の擾乱は「攪」と表記し、その傾斜部は「≡」で示した。
21. その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章第1節にまとめた。
22. 本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、第Ⅰ章・Ⅱ章・第Ⅲ章第2節は山田・川口、それ以外を山田が執筆した。図版の版組は山田・佐伯・渡邊、編集は山田・佐伯が行った。
23. 本書の調査成果については、宮城県遺跡調査成果発表会(平成27年12月12日開催/会場:東北歴史博物館/主催:宮城県考古学会)において、その内容の一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。
24. 発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

## 調 査 要 項

遺 跡 名: 北経塚(きたきょうづか)遺跡 (宮城県遺跡地名表登録番号14010 遺跡記号KK)  
 所 在 地: 宮城県亘理郡山元町小平字北  
 調 査 原 因: 株式会社伊藤チェーン店舗建設事業に係る本調査  
 調 査 期 間: 確認調査 平成27(2015)年4月23・24・27日  
           事前調査 平成27(2015)年8月3日～10月5日  
 調査対象面積: 約8,000㎡  
 調 査 面 積: 確認調査 約580㎡、本調査 約1,925㎡  
 調 査 主 体: 山元町教育委員会  
 調 査 担 当: 山元町教育委員会生涯学習課  
           山田 隆博 【山元町教育委員会 生涯学習課 主事】  
           川口 陽子 【山元町教育委員会 生涯学習課 技術主査(福岡県筑紫野市 派遣)】  
           千尋 美紀 【山元町教育委員会 生涯学習課 調査補助員】  
 調 査 協 力: 株式会社伊藤チェーン

# 目 次

## 序文

## 例言・調査要項・目次・挿図目次・表目次

<b>第Ⅰ章 遺跡の概要</b> .....	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境 .....	1
第2節 周辺の遺跡 .....	1
第3節 北経塚遺跡のこれまでの発掘調査 .....	9
<b>第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過</b> .....	11
第1節 発掘調査に至る経緯 .....	11
(1) 事前協議 .....	11
(2) 確認調査 .....	11
第2節 北経塚遺跡(5次調査)発掘調査の経過 .....	12
(1) 本発掘調査の経過 .....	12
(2) 整理・報告書作成作業の経過 .....	14
<b>第Ⅲ章 発掘調査</b> .....	15
第1節 発掘調査の方法 .....	15
1. 現地調査 .....	15
2. 室内整理 .....	16
3. 東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の自治法派遣・短期出張による支援 .....	17
第2節 基本層序 .....	19
第3節 発見された遺構と遺物の概要 .....	20
1. 掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット .....	31
(1) 柱穴・ピットの調査方法と掘立柱建物跡の認定方法 .....	31
(2) 掘立柱建物跡 .....	32
①検出した掘立柱建物跡の概要 .....	34
②検出した掘立柱建物跡の詳細 .....	41
(3)その他の柱穴・ピット .....	52
2. 溝跡・井戸跡・土坑 .....	58
(1) 溝跡 .....	60
(2) 井戸跡 .....	63
(3) 土坑 .....	64
3. 風倒木痕跡 .....	83
4. 遺構外出土遺物 .....	83

<b>第IV章 自然科学分析</b> .....	85
第1節 はじめに .....	85
1. 自然科学分析の項目と分析目的 .....	85
2. 試料の採取地点と採取方法 .....	85
第2節 北経塚遺跡における放射性炭素年代(AMS測定) .....	86
<b>第V章 総括</b> .....	89
第1節 出土遺物の特徴と時期 .....	89
1. 縄文土器 .....	90
2. 土師器・須恵器 .....	90
(1) 土師器 .....	90
(2) 須恵器 .....	90
3. かむらけ・中世陶器・磁器・木製品 .....	91
(1) かむらけ .....	91
(2) 中世陶器 .....	91
(3) 磁器 .....	92
(4) 木製品 .....	92
4. 石器 .....	92
第2節 検出遺構の特徴と時期 .....	93
1. 今回の調査区(G区)で検出した各遺構の時期 .....	93
(1) 掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット .....	93
(2) 溝跡 .....	93
(3) 井戸跡 .....	93
(4) 土坑 .....	93
(5) まとめ .....	94
2. 各時代の遺構の特徴と変遷 .....	95
(1) 縄文時代～平安時代の遺構 .....	95
(2) 中世の遺構 .....	99
1) 掘立柱建物跡 .....	99
2) 建物群に関連する遺構－溝跡・井戸跡・土坑－ .....	100
3) 出土遺物と遺構の所属時期 .....	100
4) 北経塚遺跡G区における中世集落の様相 .....	101
(3) 北経塚遺跡の中世集落の位置付けと周辺の中世遺跡 .....	102
第3節 まとめ .....	108

引用・参考文献

報告書抄録



# 挿 図 目 次

第 1 図	山元町と北経塚遺跡の位置	1	第 32 図	SK151～156 土坑	67
第 2 図	北経塚遺跡及び山元町内の地形分類図	2	第 33 図	SK157～159 土坑	68
第 3 図	北経塚遺跡の位置と山元町内の遺跡分布	4	第 34 図	SK160～162 土坑	69
第 4 図	北経塚遺跡 5 次調査(G 区)調査箇所	13	第 35 図	SK163～165 土坑	70
第 5 図	北経塚遺跡 G 区 基本層序	19	第 36 図	SK166 土坑	71
第 6 図	北経塚遺跡 G 区 遺構配置図	20	第 37 図	SK167～169 土坑	72
第 7 図	北経塚遺跡 G 区 調査区全景(1)	21	第 38 図	SK170～172 土坑	73
第 8 図	北経塚遺跡 G 区 調査区全景(2)	22	第 39 図	SK173・174 土坑(1)	74
第 9 図	北経塚遺跡 G 区 主要遺構平面図 —SB・SD・SE・SK—	23・24	第 40 図	SK173・174 土坑(2)	75
第 10-1 図	北経塚遺跡 G 区 遺構配置図(詳細図 1)	25	第 41 図	SK175・176 土坑	76
第 10-2 図	北経塚遺跡 G 区 遺構配置図(詳細図 2)	26	第 42 図	SK177～179 土坑	77
第 10-3 図	北経塚遺跡 G 区 遺構配置図(詳細図 3)	27	第 43 図	SK180～182 土坑	78
第 10-4 図	北経塚遺跡 G 区 遺構配置図(詳細図 4)	28	第 44 図	SK183・184 土坑	79
第 10-5 図	北経塚遺跡 G 区 遺構配置図(詳細図 5)	29	第 45 図	主要 SK(土坑)写真図版(1) —SK144・145・148・151・153・162～164—	80
第 10-6 図	北経塚遺跡 G 区 遺構配置図(詳細図 6)	30	第 46 図	主要 SK(土坑)写真図版(2) —SK165・166・170・173～176・183—	81
第 11 図	北経塚遺跡 G 区 SB(竪立建物跡)遺構配置図	33	第 47 図	SK159・162・164・166・170・173・174 出土遺物 —写真図版—	82
第 12 図	北経塚遺跡 G 区 竪立建物跡 分布状況(写真図版)	35	第 48 図	北経塚遺跡 G 区 遺構外出土遺物	83
第 13 図	北経塚遺跡 G 区 SB(竪立建物跡)掲載区分図	36	第 49 図	分析試料採取箇所位置図	85
第 14-1 図	北経塚遺跡 G 区 竪立建物跡 平面図(1) —SB185～195—	37・38	第 50 図	北経塚遺跡 G 区出土土師器・須置器集成図	90
第 14-2 図	北経塚遺跡 G 区 竪立建物跡 平面図(2) —SB196～198—	39	第 51 図	北経塚遺跡 G 区出土 かわらけ・中世陶器・磁器・木製品集成図	91
第 14-3 図	北経塚遺跡 G 区 竪立建物跡 平面図(3) —SB199～200—	40	第 52 図	北経塚遺跡 G 区主要遺構の重複関係と所属時期	95
第 15 図	SB185 竪立建物跡・SB186 竪立建物跡(1)	42	第 53 図	北経塚遺跡 G 区縄文時代～平安時代の遺構	96
第 16 図	SB186 竪立建物跡(2)	43	第 54 図	北経塚遺跡 A～G 区で発見された 縄文時代～平安時代の遺構	97・98
第 17 図	SB187 竪立建物跡	44	第 55 図	北経塚遺跡 G 区 中世の遺構配置図	101
第 18 図	SB188 竪立建物跡	45	第 56 図	北経塚遺跡南半部(A～G 区)における 中世の遺構配置図	103・104
第 19 図	SB189・190 竪立建物跡	46	第 57 図	北経塚遺跡 C～F 区・G 区中世の主要建物模式図	105
第 20 図	SB191・192 竪立建物跡	47	第 58 図	北経塚遺跡の調査箇所と小平船跡の位置関係	107
第 21 図	SB193・194 竪立建物跡	48			
第 22 図	SB195～197 竪立建物跡	49			
第 23 図	SB198～200 竪立建物跡	50			
第 24 図	北経塚遺跡 G 区 竪立建物跡 主要柱穴層断面(写真図版)	51			
第 25 図	ビット(P904・1044)・ 竪立建物跡(SB186・190・195)出土遺物	53			
第 26 図	北経塚遺跡 G 区 SD(溝跡)・SE(井戸跡)・SK(土坑) 遺構配置図	59			
第 27 図	SD138・139 溝跡	60			
第 28 図	SD140・141 溝跡	61			
第 29 図	SD142 溝跡	62			
第 30 図	SE143 井戸跡	63			
第 31 図	SK144～150 土坑	65			

## 表 目 次

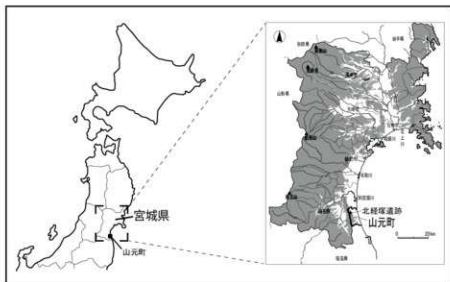
第 1 表	山元町遺跡一覧	5
第 2 表	北経塚遺跡発掘調査 箇所一覧	10
第 3 表	北経塚遺跡で使用した遺構番号	15
第 4 表	山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況(直接派遣)	18
第 5 表	山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況(宮城県経由・出張扱い)	18
第 6 表	北経塚遺跡 G 区 掘立柱建物跡(SB185～200)一覧表	32
第 7 表	その他の柱穴・ピット出土遺物一覧	52
第 8-1 表	北経塚遺跡 G 区 ピット(柱穴・小穴)属性表(1) ㊦SB を構成するもの以外 P746～837	54
第 8-2 表	北経塚遺跡 G 区 ピット(柱穴・小穴)属性表(2) ㊦SB を構成するもの以外 P838～929	55
第 8-3 表	北経塚遺跡 G 区 ピット(柱穴・小穴)属性表(3) ㊦SB を構成するもの以外 P930～1022	56
第 8-4 表	北経塚遺跡 G 区 ピット(柱穴・小穴)属性表(4) ㊦SB を構成するもの以外 P1023～1122	57
第 9 表	北経塚遺跡 G 区 溝跡一覧(SD138～142)	58
第 10 表	北経塚遺跡 G 区 井戸跡一覧(SE143)	58
第 11 表	北経塚遺跡 G 区 土坑一覧(SK144～184)	58
第 12 表	北経塚遺跡 遺構外出土遺物一覧	83
第 13 表	北経塚遺跡 G 区(5 次調査) 遺構別出土遺物一覧	89
第 14 表	北経塚遺跡 G 区(5 次調査) 出土炭化物の放射性炭素年代	94
第 15 表	北経塚遺跡 G 区(5 次調査) 遺構の所属時期	94
第 16 表	北経塚遺跡 G 区(5 次調査) 掘立柱建物跡一覧	99
第 17 表	北経塚遺跡南半の調査で確認された中世集落の概要	102

## 第1章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亶理郡山元町は、仙台市から南南東に約40km離れた南南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第1図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの間には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高200~300mの山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した4列の浜堤(第II浜堤列・第IIIa~c浜堤列)が認められる(伊藤2006、藤本・松本2012)。

北経塚遺跡は、亶理郡山元町小平字北に所在し、山元町役場の北北西約2.5kmに位置する(第2・3図)。遺跡は、阿武隈山地から東に細長く延びる標高6~10mの低位段丘下段に立地する(第2図)。この丘陵は中央に東西方向の谷状地形があることで、南北2つの小丘陵に分断されている。遺跡はこの2つの小丘陵から構成されており、東西175m、南北113mほどの広がりをもつ。現況は、北側が工場用地、道路、宅地、南側が商業用地、畑地、荒地である。



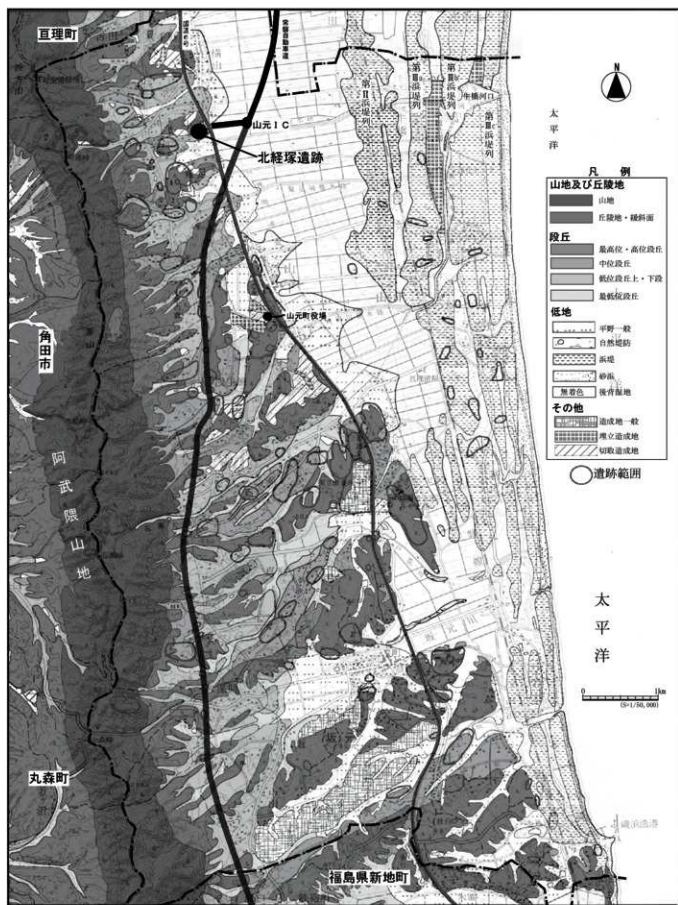
第1図 山元町と北経塚遺跡の位置

### 第2節 周辺の遺跡

山元町には、現在まで100余りの遺跡が登録されている(第3図、第1表)。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく3つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見された遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が分布している。

近年、山元町内では、常磐自動車道山元IC開通に伴う周辺地区の開発や、常磐自動車道(県境-山元間)建設工事、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の復興事業などに伴う大規模な発掘調査が継続的に進められており、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しずつ明らかになってきている。

以下、これまで調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。



第2図 北経塚遺跡及び山元町内の地形分類図

### 【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡(10)、上宮前北遺跡(109)、前期～中期の西石山原遺跡(84)、中期後半の南山神B遺跡(89)、中期末～後期前葉の谷原遺跡(67)、中期～晩期の中島貝塚(4)、後・晩期の涌沢遺跡(107)、晩期の中筋遺跡(80)などがある。

北経塚遺跡では、平成15・21・23年度に調査が行われ、前期初頭の堅穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出され、前期初頭の上川名Ⅱ式の古い段階の土器群や石器が出土した(関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013)。

上宮前北遺跡では、平成24年度の調査で、早期末～前期初頭の遺物包含層・堅穴状遺構・集石遺構が検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式の土器群が中心に出土した(初鹿野ほか2015)。

西石山原遺跡では、平成22・23年度に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の堅穴住居跡などが検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式、後期後葉～末葉の大木10式の土器群が出土している(初鹿野ほか2012)。

南山神B遺跡では、平成23・24年度の調査で、中期後半の遺物包含層・柱穴・土坑が検出され、中期後半の大木9式後半の土器群が出土した(初鹿野ほか2015)。

谷原遺跡では、平成22・24年度の調査で、中期末～後期前葉の掘立柱建物跡のみで構成される南北40m・東西35mの環状集落、その周囲で同時期の土坑・土器埋設遺構、遺物包含層などが検出され、後期末の大木10式、後期初頭～前葉の綱取Ⅰ・Ⅱ式の土器群が出土した(山田・藤田2016)。

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、後期～晩期の縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獣骨が数多く出土した(山元町誌編纂委員会編1986)。

涌沢遺跡では、平成24年度の調査で、後・晩期の遺物包含層が検出され、後期後半の瘤付土器・晩期前葉の大洞B～BC式の土器群が出土した(初鹿野ほか2015)。

中筋遺跡では、平成24年度の調査で、晩期の遺物包含層が検出され、晩期前葉～末の大洞BC式・大洞C2式・大洞A～A'式の土器群が出土したほか、後期前葉～後葉の土器もわずかに出土している(山田・藤田・佐伯2015)。



谷原遺跡 縄文時代の環状集落(縄文時代中期末～後期前葉)

### 【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡(80)、狐塚遺跡(56)、館の内遺跡(9)、北経塚遺跡(10)、谷原遺跡(67)、日向遺跡(68)などがある。

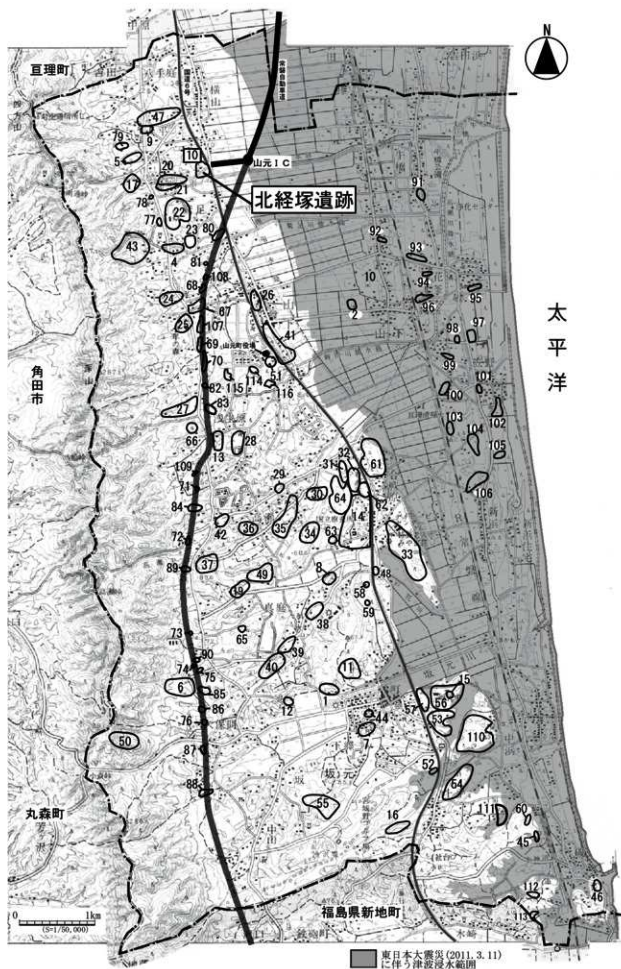
中筋遺跡では、平成24年度の調査で、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期前葉の鱸沼式～中期中葉の橋形円式を中心とする土器群や石包丁、板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認されている(山田・藤田・佐伯2015、山田2015a)。

狐塚遺跡では、平成5年度の調査で、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している(窪田1995)。

北経塚遺跡・館の内遺跡・谷原遺跡・日向遺跡では、弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物が出土している。北経塚遺跡では、平成21・23年度の調査で、



中筋遺跡 弥生時代の中筋水田(弥生時代中期中葉)



第3図 北経塚遺跡の位置と山元町内の遺跡分布

第1表 山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸穴横穴墓群	横穴墓	古墳後	60	東作経塚	経塚	中世
2	新田遺跡	散布地	古墳後・古代	61	合戦原B遺跡	製鉄	古代
3	欠番	—	—	62	合戦原C遺跡	古墳	古墳中
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩	63	北名生東B跡跡	窯跡	古代
5	味曾野横穴墓群	横穴墓	古墳後	64	大久保B遺跡	散布地	古代
6	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩	65	北権現遺跡	製鉄	古代
7	藪首城跡	城館	中世・近世	66	山王遺跡	製鉄	古代?
8	上台遺跡	散布地	弥生・平安	67	谷原遺跡	集落	縄文後・弥生～中世
9	薮の内遺跡	集落	古代	68	日向遺跡	集落	古墳後～中世
10	北権現遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前・古墳前・中世	69	石垣遺跡	集落	縄文・古墳前 平安・近世
11	堂名山壇跡	城館	中世	70	的場遺跡	集落	縄文前・古墳前 平安・近世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後	71	上宮前遺跡	散布地	平安・中世
13	浅生原遺跡	散布地	縄文・中世	72	北山神遺跡	散布地	縄文
14	合戦原遺跡	集落・横穴墓 須恵器窯跡・製鉄	古墳中・後・古代	73	新田B遺跡	散布地	古代
15	狐塚古墳群	古墳	古墳後	74	影倉B遺跡	散布地	縄文
16	一の沢遺跡	散布地	弥生	75	影倉C遺跡	散布地	古代
17	清水遺跡	散布地	弥生	76	荷駄場遺跡	散布地	縄文
18	欠番	—	—	77	北遺跡	散布地	古代
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳	78	北ノ入遺跡	散布地	古代
20	小平館跡	城館・散布地	古墳前・古代・中世	79	味曾野遺跡	散布地	古代
21	館横穴墓群	横穴墓	古墳後	80	中筋遺跡	水田、包含層 墓域?	縄文後・弥生中 古墳前
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後	81	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
23	中道遺跡	散布地	縄文・古墳後	82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文・近世
24	石堂遺跡	散布地	古代	83	内平遺跡	製鉄・生産	平安
25	山寺館跡	城館	中世	84	西石山原遺跡	集落	縄文前・中・平安
26	作田山壇跡	城館	中世	85	影倉D遺跡	製鉄	古代
27	入山遺跡	散布地	縄文・古代	86	荷駄場B遺跡	散布地	古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前	87	上小山遺跡	散布地	古代・中世
29	宮後遺跡	散布地	古代	88	法親遺跡	散布地	縄文
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	89	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代
31	壁下家跡	須恵器窯	古代	90	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世
32	中島館跡	城館	中世	91	北足沼遺跡	散布地	古代
33	戸花山遺跡	古墳・須恵器窯・ 製鉄・散布地	縄文・古墳・古代	92	肥沼遺跡	散布地	古代
34	北名生東家跡	須恵器窯	古代	93	畑合遺跡	散布地	古代
35	壹原遺跡	散布地	古代	94	北原無遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後	95	浜遺跡	散布地	古代
37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前	96	篠無遺跡	散布地	古代
38	原遺跡	散布地	古墳	97	花笠遺跡	散布地	古代
39	浅生原遺跡	散布地	古代	98	西北谷地A遺跡	散布地	古代
40	南権現遺跡	散布地	縄文早・前・古墳	99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
41	山下館跡	城館	中世	100	西須賀遺跡	散布地	古代
42	石山原遺跡	散布地	縄文	101	笠野A遺跡	散布地	古代
43	箕足館跡	城館	中世	102	笠野B遺跡	散布地	古代
44	館下遺跡	散布地	弥生	103	北中須賀遺跡	散布地	古代
45	大塚小塚十三塚	塚	近世	104	狐須賀遺跡	散布地	古代
46	唐船着所跡	着所	近世	105	笠浜遺跡	散布地	古代
47	大平館跡	集落・城館	平安・中世	106	北原遺跡	散布地	古代
48	貝吹城跡	城館	中世	107	満沢遺跡	集落	縄文・古代～近世
49	真庭館跡	城館	中世	108	日向北遺跡	集落	古墳後・中世～近世
50	新城山古館跡	城館	中世	109	上宮前北遺跡	集落	古代
51	日向家跡	窯跡	古代	110	大塚遺跡	製鉄	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後	111	新中水産遺跡	集落・須恵器窯 製鉄	古代
53	熊の作遺跡	集落	古墳後・古代	112	雲神遺跡	集落・生産	古代
54	駒場原遺跡	散布地	古代	113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
55	川内遺跡	製鉄	古代	114	作田山遺跡	製鉄	古代
56	狐塚遺跡	集落・生産	古墳中～古代	115	内平B遺跡	製鉄・須恵器窯	古代
57	向山遺跡	集落・生産	古墳・古代	116	作田山B遺跡	生産	古代
58	卯月地塚	塚	中世・近世				

中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。館の内遺跡では、平成 13 年度の調査で、中期後半の十三塚式の土器が出土した（引地 2002）。谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、中期前半～中期中葉の土器が出土した（山田・藤田 2016）。日向遺跡では平成 23 年度の調査で、中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した（山田・藤田 2015）。

### 【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(80)・石垣遺跡(69)・的場遺跡(70)・大塚遺跡(110)、前期～中期の北経塚遺跡(10)、中期～終末期の合戦原遺跡(14)、後期～終末期の狐塚遺跡(56)・日向北遺跡(108)・日向遺跡(68)・谷原遺跡(67)・熊の作遺跡(53)・井戸沢横穴墓群(1) などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度の調査で、前期の土坑墓群が検出された（山田・藤田・佐伯 2015）。

石垣遺跡では、平成 23 年度の調査で、前期の堅穴住居跡が検出された（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23 年度の調査で、前期の堅穴住居跡・土坑・溝跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

大塚遺跡では、平成 27 年度の調査で、前期の方形周溝を伴う墳丘が確認されている（宮城県考古学会 2015）。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年度の調査で、前期の堅穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

合戦原遺跡では、平成 2 年度に調査が行われ、南小泉式期の大型の堅穴住居跡が検出された（岩見ほか 1991）ほか、平成 8・9 年の測量調査で前方後円墳を含む古墳群が確認されている（青山ほか 2000）。また、平成 26～28 年度の調査では、終末期の横穴墓群や堅穴住居跡が確認されており、特に横穴墓群の調査では、玄室奥壁に線刻画が描かれた横穴墓が発見されたほか、副葬品として土師器・須恵器・玉類、直刀・鉄鏃・馬具などの多くの鉄製品が出土しており、大きな成果が得られている（山田 2015b・宮城県考古学会 2015）。



合戦原遺跡の横穴墓群（平成 26～28 年度調査）

日向北遺跡では、平成 24 年度の調査で、終末期前後の堅穴住居跡が検出された（山田・丹野 2014）。

日向遺跡では、平成 23 年度の調査で、後期の堅穴住居跡、終末期の遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015）。

谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、終末期頃の堅穴住居跡が検出された（山田・藤田 2016）。

狐塚遺跡では、平成 4・5 年度の調査で、後期の堅穴住居跡・堅穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された（千葉 1993、窪田 1995）。

熊の作遺跡では、平成 25・26 年度の調査で、後期～終末期の堅穴住居跡・掘立柱建物跡が検出された（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015a～c）。

井戸沢横穴墓群は、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、その関連性が指摘されている（佐々・志岡・氏家 1971）。

### 【奈良・平安時代の遺跡】

館の内遺跡(9)、合戦原遺跡(14)、狐塚遺跡(56)、涌沢遺跡(107)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、内手遺跡(83)、上宮前北遺跡(109)、向山遺跡(57)、熊の作遺跡(53)、北名生東窯跡(34)、大塚遺跡(110)、新中永産遺跡(111)、雷神遺跡(112)、内手B遺跡(115)、作田山遺跡(114) などがある。



館の内遺跡では、平成13年度の調査で、規格的に配置された掘立柱建物跡や堅穴住居跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している（引地2002）。

合戦原遺跡では、平成2年度の調査で奈良時代～平安時代の須恵器窯跡（岩見ほか1991）、平成26・27年度の調査で製鉄炉跡・木炭窯跡・焼成土坑が確認されている（山田2015b・宮城県考古学会2015）。

涌沢遺跡では、平成24年度の調査で、8世紀末～10世紀後半の堅穴住居跡・堅穴状遺構・土器廃棄土坑や8世紀末～9世紀初頭の鍛冶関連遺構などが検出され、「田人」・「十万」・「千万」の墨書土器や10世紀後半の八稜鏡などが出土した（宮城県考古学会2012、初鹿野2013a、初鹿野ほか2015）。

日向遺跡では、平成23年度の調査で、8世紀末～9世紀初頭・9世紀後半の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・遺物包含層が検出された（山田・藤田2015）。

谷原遺跡では、平成22・24年度の調査で、7世紀末～8世紀前葉、8世紀後半～9世紀前葉、9世紀後半の堅穴住居跡などが検出され、風字硯・円面硯、墨書土器などが出土した（山田・藤田2016）。

石垣遺跡では、平成23年度の調査で、9世紀後半の堅穴住居跡・堅穴状遺構、土器廃棄土坑が検出され、土器廃棄土坑からは墨書土器（「田」・「人」）が出土した（山田・藤田2014）。

的場遺跡では、平成23・25年度の調査で、9世紀後半の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構が検出された（山田・藤田・佐伯2014）。

内手遺跡では、平成23年度の調査で、9世紀代の地下式木炭窯跡7基・横口付木炭窯跡1基が検出されている（初鹿野2013b・初鹿野ほか2015）。

上宮前北遺跡では、平成24年度の調査で、9世紀の製鉄炉跡4基が検出されている（初鹿野2013b・初鹿野ほか2015）。

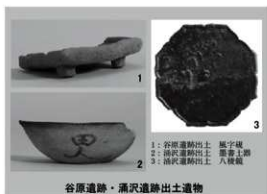
向山遺跡では、平成25年度の調査で、奈良～平安時代の堅穴住居跡や鍛冶工房が検出されている（宮城県考古学会2013、初鹿野2015a・b）。

熊の作遺跡では、平成25・26年度の調査で、奈良時代～平安時代の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、四脚門跡が検出され、「坂本願」・「大領」・「子弟」などの墨書土器や風字硯、石帯、木簡、木製品などが出土するなど大きな成果が得られており、陸奥国亶理郡に関連する役所跡と推定されている（宮城県考古学会2013、初鹿野2014・2015a～c、吉野2015）。

北名生東窯跡では、昭和37・38・52年度に須恵器窯跡の調査が行われ、8世紀後半～9世紀初頭の須恵器が出土した（鍛冶1971）。

大塚遺跡では、平成25～27年度の調査で、奈良時代前半を中心とする堅穴住居跡・木炭窯跡・横口式木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された（初鹿野2015a・b、宮城県考古学会2015）。

新中水窪遺跡では、平成26年度の調査で、奈良～平安時代初期の堅穴住居跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木



谷原遺跡・涌沢遺跡出土遺物



内手遺跡 SR4 横口付木炭窯（平安時代）



上宮前遺跡 SW2 製鉄炉跡（平安時代）

炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された(宮城県考古学会2014、初鹿野2015a・b)。

雷神遺跡では、平成25・26年度の調査で、奈良時代の竪穴住居跡が検出された。

内手B遺跡では、平成26年度の試掘調査で、奈良時代の須恵器窯跡などが検出された。

作田山遺跡では、平成25年度の試掘調査で、古代の製鉄関連遺構が検出された。

### 【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、小平館跡(20)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、山下館跡(41)、鷺足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成21・23年度の調査で、13世紀後半～14世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認され、中世の集落の存在が明らかになった(山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013)。

小平館跡は、室町時代の天文年間(1532～1555年)に互理要害14世互理宗隆が居館したとされている館跡で(紫桃1974)、平成24・25・27年度に調査が行われ、掘立柱建物跡・溝跡が検出された(山田2015c)。

日向遺跡では、平成23年度の調査で、13世紀後半～16世紀の掘立柱建物跡・井戸跡が確認された(山田・藤田2015)。

谷原遺跡では、平成22・24年度の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された(山田・藤田2016)。

山下館跡では、平成26年度に調査が行われ、平場・土塁・堀切が良好な状態で確認され、平場では掘立柱建物跡や柱穴列が検出された(宮城県考古学会2014)。

鷺足館跡では、平成24～26年度に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。



山下館跡の平場・土塁・堀切(平成26年度調査)

### 【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王B遺跡(82)、養首城跡(7)などがある。

石垣遺跡では、平成23年度の調査で、近世の掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された(山田・藤田2014)。

的場遺跡では、平成23・25年度の調査で、17～19世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された(山田・藤田・佐伯2014)。

山王B遺跡では、平成22年度の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された(初鹿野ほか2012)。

養首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和2(1616)年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成25年度に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが検出された(宮城県考古学会2013)。



養首城跡 二ノ丸跡の遺構(平成25年度調査)

### 第3節 北経塚遺跡のこれまでの発掘調査

北経塚遺跡は過去の開墾に伴い、花崗岩を積み重ねてその下に玉石を敷いた石室様のものが発見されており、その中から室町時代の鏡が出土した。このことから、当該地周辺に経塚の存在が想定され（志間 1956）、遺跡名の由来となっている。

本遺跡では、これまでに開発行為に伴う本格的な発掘調査が3度（平成15年度・平成21年度・平成23年度）、個人住宅の倉庫建設に関わる確認調査が1度（平成26年度）実施されている（第4図）。

#### 【平成15年度の調査（1次調査・本調査）】

1次調査は、県道半田山下線の道路改良工事に伴うもので、約1,800㎡にわたる調査が実施された。調査箇所は南側小丘陵の標高4~9mの北斜面部分に当たる（第4図A区・B区）。A区では、古墳時代以降と縄文時代前期初頭の遺物包含層が、B区では土坑7基、溝跡1条、縄文時代前期初頭の遺物を多く含む遺物包含層が検出された。遺物包含層からは、縄文時代晩期、古墳時代前・後期、古代の遺物も少量出土したが、これらに伴う遺構は検出されていない。

遺物包含層から出土した  
縄文時代前期初頭の土器（1次調査）



#### 【平成21年度の調査（2次調査・本調査）】

2次調査は店舗開発工事（コンビニエンスストア）に伴うもので、約2,600㎡にわたる調査が実施された。調査箇所は南側小丘陵の標高7~10mの丘陵中央部とその東・南斜面にあたる（第4図C・D区）。調査の結果、縄文時代前期初頭の竪穴住居跡2軒・焼け面2ヶ所・土坑・ピット・遺物包含層、古墳時代前期の方形周溝跡3条、古墳時代中期の直径25m前後の古墳周溝跡（円墳）1条、中世の掘立柱建物跡24棟・井戸跡2基などが検出された（山田・村上・山口 2010）。



縄文時代前期初頭期の竪穴住居跡と縄文土器（2次調査）

#### 【平成23年度の調査（3次調査・本調査）】

3次調査は東日本大震災（平成23年3月11日）により被災した企業の店舗移設工事（ホームセンター）に伴うもので、約1,770㎡にわたる調査が実施された。本事業は、東日本大震災に伴う復興事業の認定を受けたことから、「復興の基準」により調査を行った（切土範囲は全面発掘、盛土部分は遺構検出を行い、必要箇所のみを精査）。調査箇所は南側小丘陵の標高6~10mの丘陵尾根と西から南にかけての斜面に位置し、2次調査地点の西隣接地にあたる（第4図E・F区）。調査



古墳時代前期の方形周溝跡（2次調査）

区北東部標高が最も高く、西から南にかけて緩やかに傾斜し、南西斜面は急斜面となる。調査の結果、縄文時代早期末葉から前期初頭の竪穴住居跡 2 軒・土坑 2 基・ピット、古墳時代前の竪穴住居跡 2 軒、古墳時代中期の古墳周溝跡（円墳）1 条、古代（9 世紀以降）の土坑 1 基、中世の掘立柱建物跡 44 棟・土坑 1 基・井戸跡 1 基・ピットを検出した。古墳周溝は全周し、墳丘本体は削平により残存しないものの、直径 16m 前後と想定される。3 次調査では、この他に、弥生時代中期・古墳時代後期の遺物も少量出土しており、周辺にこれらの時期の遺構の存在が想定されている（山田・藤田・佐伯 2013）。

#### 【平成 26 年度の調査（4 次調査・確認調査）】

4 次調査は個人住宅の倉庫建設（復興事業該当）に伴うもので、開発面積約 70 m<sup>2</sup> に対して、約 30 m<sup>2</sup> の確認調査を実施した。調査箇所は北側丘陵の標高 19m の丘陵南斜面部にあたる（第 4 図）。調査の結果、4 次調査範囲内には、遺構・遺物ともに分布していないことが確認されている。



古墳時代前期の竪穴住居跡（3 次調査）



古墳時代中期の古墳周溝と中世の掘立柱建物跡群（3 次調査）

第 2 表 北経塚道路発掘調査 箇所一覧（H28.12 現在）

調査年度	調査原因	調査内容 (調査期間)	調査主体	調査面積	主な調査成果
1 次調査 平成 15 年度	県道 半田山下線 改築事業	本調査 (2003. 8. 1 ～11. 5)	町教委	約 1,800 m <sup>2</sup>	[縄文時代前期初頭] 土坑 3 基、遺物包含層 [時期不明] 土坑 4 基、溝跡 1 条 ※文献：山元町文化財調査報告書第 3 集
2 次調査 平成 21 年度	店舗開業 (コンビニエンスストア)	本調査 (2009. 9. 14 ～12. 8)	町教委	約 2,600 m <sup>2</sup>	[縄文時代早期末葉～前期初頭] 竪穴住居跡 2 軒/焼面 2 箇所/土坑 2 基/ピット 遺物包含層 [古墳時代前期] 方形周溝跡 3 条 [古墳時代中期] 古墳周溝 1 条 [中世] 掘立柱建物跡 24 棟、井戸跡 2 基 ※文献：山元町文化財調査報告書第 4 集
3 次調査 平成 23 年度	店舗開業 (ホームセンター) [復興事業]	本調査 (2012. 2. 1 ～3. 30)	町教委	約 1,770 m <sup>2</sup>	[縄文時代早期末葉～前期初頭] 竪穴住居跡 2 軒/土坑 2 基/ピット/遺物包含層 [古墳時代前期] 竪穴住居跡 2 軒 [古墳時代中期] 古墳周溝 1 条 [古代] 土坑 1 基 [中世] 掘立柱建物跡 44 棟、土坑 1 基、井戸跡 1 基 ※文献：山元町文化財調査報告書第 5 集
4 次調査 平成 26 年度	個人住宅 倉庫建設 [復興事業]	確認調査 (2014. 12. 26)	町教委	約 30 m <sup>2</sup>	遺構・遺物ともになし。 ※復興事業関連調査報告書で後日報告予定
5 次調査 平成 27 年度	店舗開業 (スーパー)	本調査 (2015. 7. 28 ～10. 2)	町教委	約 1,925 m <sup>2</sup>	[古墳時代前期] 土坑 [古代] 土坑 [中世] 掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡 ※本書

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

#### (1) 事前協議

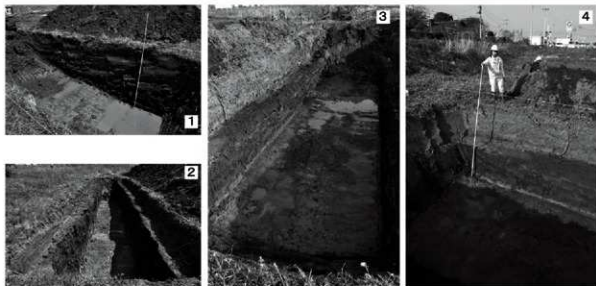
平成26年度の下半期に入り、宮城県亙理郡山元町小平地区の店舗建設事業箇所と埋蔵文化財のかかわりについて、株式会社伊藤チェーン（以下、事業主）から山元町教育委員会（以下、町教委）に照会があった。町教委では、事業予定箇所の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である「北経塚遺跡」に該当し、これまでの調査成果から、事業計画地内に遺構が存在する可能性が極めて高いと判断されたため、事業主へ対し、事前の協議を行う旨の回答を行った。

平成27年2月3日、「株式会社伊藤チェーン新店舗開発事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が事業主から町教委に提出され、同日、町教委では意見書を付し、宮城県教育庁文化財保護課（以下、県教委）に協議書を進達した。これを受け、事業の実施により遺跡へ与える影響が高いと判断されたことから、平成27年2月13日付文第2828号・県教委通知により、建設事業箇所の遺構の分布状況を把握することを目的とした「確認調査」を実施する対応に決定した。その後、平成27年2月23日付で文化財保護法第93条に基づく発掘届出が提出（事業主→町教委→県教委）され（回答：平成27年3月4日文第3042号・県教委通知）、平成27年4月から確認調査を実施することとなった。

#### (2) 確認調査

確認調査は、平成27年4月23日・24日・27日の3日間実施した。調査主体は町教委である。調査は、事業計画範囲内にトレンチを13箇所（T-1～13）設定して行い、遺構の有無を確認した。その結果、トレンチ1～6・9において遺構が検出され、事業計画範囲のうち、駐車場となる水路北側の約2,000㎡の範囲に遺構が残存していることが判明した（第4図）。なお、遺構確認面は、現地表面から約0.7～2.0m下で確認された粘土質シルト土の地山上面である。

この結果を受け、宮城県発掘調査基準（平成12年4月1日）に基づき、事業主・県教委・町教委の三者で再度協議した結果、遺構が確認された事業計画範囲内の駐車場部分について、本格的な調査（事前調査）を行うこととなった。



確認調査風景 [1:T-6 調査風景（西から） 2:T-11 遺構検出状況（北から） 3:T-9 遺構検出状況（北から） 4:T-9 土層断面（西から）]

## 第2節 北経塚遺跡（5次調査）発掘調査の経過

### （1）本発掘調査の経過

北経塚遺跡（5次調査）の本発掘調査は、町教委が主体となり実施した。

本発掘調査は、平成27年7月29日に調査に入る準備を開始し、平成27年8月3日～平成27年10月5日の34日間実施した。北経塚遺跡の発掘調査体制は、調査員2名、調査補助員1名、作業員13名である。

調査面積は事業計画面積の約8,000㎡のうち、遺構が確認された約1,925㎡（G区）である。調査にあたっては、事業主と平成27年6月19日付で現地調査業務に係る委託契約を締結した。

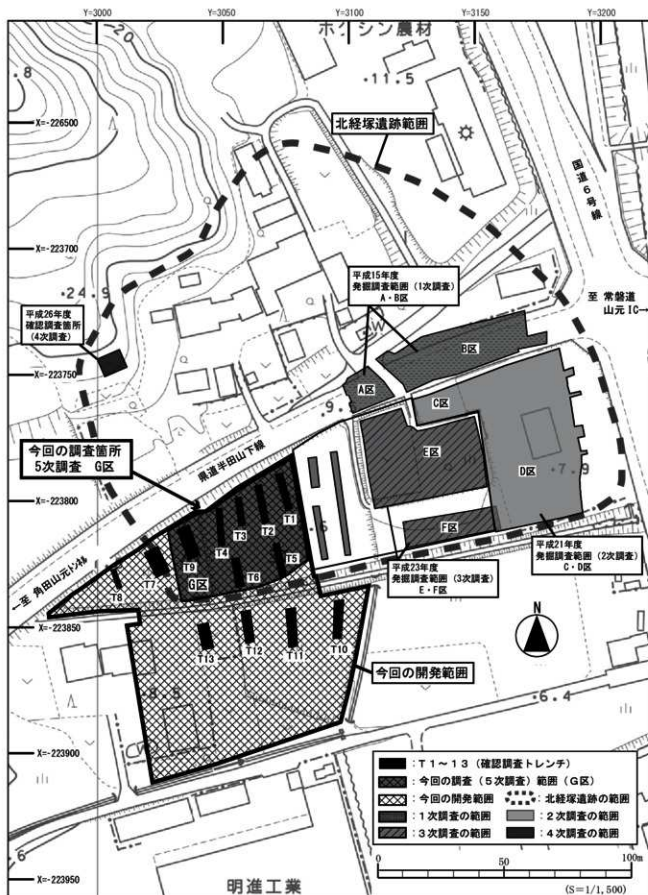
調査は、平成27年8月3日から表土除去を開始し、8月6日から遺構の検出・精査に着手した。天候不順により、降雨の中で作業を実施するなど調査は難航したが、9月29日に遺構精査を完了した。9月30日から空中写真撮影にむけての掃除を開始し、10月2日に調査区全体の空中写真撮影を実施した。掘立柱建物跡の再検討を行い、10月5日には撤収作業を含めたすべての現地調査を完了した。その後、10月17日に現場事務所等の資材撤収を行い、現地を事業主に引き渡した。なお、調査区の埋戻しについては、事前の協議により、事業主が実施することとなっていたことから、現地は埋戻しをせず引き渡した。

発掘調査完了後、平成27年10月5日に遺失物法に基づく「埋蔵物発見届」を互理警察署に提出、同日、出土遺物の文化財認定に係る書類を県教委に提出した。また、今回の調査により、北経塚遺跡の範囲が従来の範囲よりもさらに南西側に広がるということが判明したことから、遺跡の範囲拡大の手続きも併せて行った。

その後、年度末になり、事業主より本事業中止の旨の連絡があり、今回調査を行った範囲は事業主により現状復旧された。これを受け、平成28年4月25日、発掘調査報告書の取り扱いについて、町教委と事業主の二者で協議を行った。その結果、事業主から、報告書作成に係る費用負担についての快諾を得ることができ、平成28年5月2日付で報告書作成業務に係る委託契約を締結し、本格的な整理作業・報告書作成業務を開始した。事業中止となったにも関わらず、文化財保護法の趣旨を理解した上で、報告書作成費用負担を快諾いただいた事業主に対し、感謝の意を表したい。

#### 【発掘調査に係る主な事務・調査経過 まとめ】

平成27年	4月23日	確認調査実施・調査面積580㎡（～4月24・27日）
	5月7日	事業主に確認調査結果の報告（併せて本発掘調査が必要である旨を説明）
	6月上旬	町議会に発掘調査経費の補正予算計上・可決
	6月19日	現地調査業務契約締結
	8月1日	福岡県筑紫野市派遣 川口陽子 調査員 山元町教育委員会に着任 →北経塚遺跡の調査担当に
	8月3日	作業用プレハブ設置、調査区表土除去開始
	8月6日	遺構検出開始
	8月13・14・17日	雨のため現場中止
	8月21日	遺構精査開始
	8月24・26日	雨のため現場中止
	9月1日	表土除去完了
	9月7～11日	雨のため現場中止（11日：大雨特別警報発令）
	9月14日	調査再開。大雨による壁面崩落の復旧作業
	9月16日	掘立柱建物跡の俯瞰写真撮影



第4図 北経塚遺跡 5次調査 (G区) 調査箇所

	9月25日	空中写真撮影業者決定：日本特殊撮影株式会社
	9月29日	遺構精査完了。空中写真撮影のための清掃開始 図面・写真類の基礎整理作業開始
	10月 2日	発掘現場空中写真撮影実施
	10月 5日	遺失物法に基づく「埋蔵物発見届」（町⇒亶理警察署） 文化財認定に係る書類提出（町⇒県） ※10月26日付文第2031号の通知より出土遺物が文化財に認定
	10月 9日	福岡県筑紫野市派遣 川口陽子 調査員 派遣期間満了につき帰庁
	10月13日	現場引渡に関する現地打ち合わせ
	10月17日	作業用プレハブ撤去、仮設橋用敷鉄板、トイレ撤去⇒現地引き渡し
	10月19日	放射性炭素年代測定業務発注；(株)加速器分析研究所
平成28年	3月31日	現地調査業務精算手続き完了
	4月25日	報告書作成業務に係る協議
	5月 2日	整理・報告書作成に係る委託契約締結 以後、本格的な整理作業開始
平成29年	1月31日	報告書刊行

## （2）整理・報告書作成作業の経過

北経塚遺跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。

整理作業については、東日本大震災に伴う復興事業等に関連する町内の発掘調査現場対応が継続的に続いていたこともあり、現地調査を実施した平成27年度は、調査データの照合作業・写真記録類の整理といった基礎作業のみを行った（福岡県筑紫野市派遣・川口調査員が派遣期間中に実施）。本格的な整理作業は、平成28年5月から開始し、報告書の作成・執筆は平成28年度に実施した。具体的な作業内容は以下のとおりである。

### 【平成27年度の作業内容】

- ・図面類の照合作業
- ・遺構基礎データの作成
- ・記録写真のネーミング、報告書用写真の抽出

### 【平成28年度の作業内容】

- ・出土遺物の整理作業（洗浄・保存処理・接合・注記・復元）
- ・出土遺物の実測図・拓本の作成、実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
- ・平面図、断面図のトレース、平面図・写真類の版組み
- ・報告書執筆
- ・出土遺物、記録類の収納



## 第三章 発掘調査

### 第1節 発掘調査の方法

今回の調査は店舗開発工事に伴う発掘調査であり、その現地調査・整理作業は下記の方法により実施した。

#### 1. 現地調査

##### 【調査区の設定】

北経塚遺跡の発掘調査は、これまで3度の本発掘調査、1度の確認調査が実施されている（第1章第3節参照）。その際、1次調査でA・B区、2次調査でC・D区、3次調査でE・F区の調査区を設定していたことから、今回の調査範囲（5次調査）では、G区の調査区を設定した。なお、4次調査の調査箇所については、確認調査の結果、遺構・遺物ともに発見されなかったことから、調査区の設定は行わないものとした。

##### 【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホウ（0.45 m<sup>3</sup>）・キャリアダンプ（10t 級）、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、基本層Ⅶ層上面で行った。

##### 【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、001 から通し番号（G-001～）を振り、各種記録類（平面図・断面図・写真）を作成した（仮番号方式）。その後、整理作業の段階で、再度振り直した。遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりで、振り直した遺構番号については、1～3次調査との混同を避けるため、3次調査で使用した最終番号の次の番号から使用した。なお、これまでに付した遺構番号については第3表のとおりで、北経塚遺跡の遺構番号として通し番号で付したのは2次調査以降の調査からである。したがって、1次調査の番号と重複している場合がある（第3表）。

##### 【遺構測量】

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション（SRX5X）及び電子平板システム（遺構くん cubic 2015 11.01）、遺構断面図は手実測により縮尺 1/20 で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

##### 【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構のうち、溝跡、土坑、井戸跡については、原則として、すべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。掘立柱建物跡を構成する柱穴やその他のビットのうち、中世以降と判断される柱穴・ビット類は、調査を円滑に進めるため、遺構平面の下場計測や断面図等の記録作成の一部を省略した。具体的には、建物を構成する柱穴については、必要箇所のみ断面図作成を行い、これ以外の柱穴・ビットは、法量計測・土層注記の記録作成のみを行った。この他、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録した。

##### 【遺物の記録・取り上げ】

遺物の記録については、遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に

第3表 北経塚遺跡で使用した遺構番号

項目	遺構番号
1次調査 (A・B区)	SK1～7/SD1 ※2～5次調査とは別番号
2次調査 (C・D区)	SI25・56/SK30～43・45～47・64～70 SD11・16～19・50～53/SE49・54 SX15・20・21/SK6・8・14・29・48・63 ※以降通し 番号で符号 P1～395
3次調査 (E・F区)	SB94～137/SD75～83/SK84～91/SE92 SY93/P396～745
4次調査	遺構なし
5次調査 (G区・本書)	SD138～142/SE143/SK144～185/SB185 ～200/P746～1122

伴う遺物でかつ残存状況のよいもののみとした。

遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は基本層・検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

### 【写真撮影】

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ（NikonD5300/レンズ SIGMA 18-200mm/画質モード FINE）、俯瞰撮影システム（CUBIC/搭載カメラ NikonD5500）を使用した。

調査区的全景写真については、業務委託でドローンによる航空撮影（一眼レフデジタルカメラ/Canon EOS 5DMark III）を行った（委託業者：㈱日本特殊撮影）。

## 2. 室内整理

### ①遺物の整理作業

#### 【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（土師器）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。

遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・基本層・攪乱など）から出土した遺物の接合を行った。

遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

#### 【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行った。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

#### 【遺物抽出・登録】

遺物の抽出・登録は調査員が行った。遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外（基本層出土遺物も含む）出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。遺物の登録に際しては、過去の番号との混同を避けるため、それぞれの種別ごとに3次調査で使用する最終番号の次の番号から使用し登録を行った。遺物種別の略記号は、例言に示したとおりである。

土器類については、残存状態のよいものを優先的に抽出した。この他、小破片であっても、文様や器形などが特徴的なものや時期・産地推定が可能なものについても抽出の対象とした。抽出した資料は原則として報告書掲載遺物として扱い、それぞれ種別1点ごとに登録番号を付し、非抽出遺物は種別・出土遺構・層位ごとに分け袋詰めし、袋ごとに非抽出遺物の登録を行った。石器は原則として全点を登録の対象とし、全点登録番号を付したが、このうち報告書掲載としたものは完形品を優先し掲載した。

#### 【遺物の実測図作成】

遺物の実測図作成は調査員が行った。実測図は原則として手実測により作成した。

#### 【拓本図作成】

遺物の拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。

拓本図の作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーでPCに画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

#### 【実測図トレース、掲載遺物の写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み、PC上でのデジタルトレースを行い作成した。

報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、調査員が担当した。

### ②出土遺物等の自然科学分析

今回の以下の自然科学分析は、次の機関に業務委託により実施した。

- 放射性炭素年代測定：隸加速器分析研究所

### ③図面・記録写真の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。記録写真の整理作業は、撮影年月日ごとにデータを整理し、それらのデータをコピーしたものを、JPG データと RAW データに分け、リネームを行った。その後、各種遺構ごとに分け収納した。報告書の版組み・執筆は、調査員が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みについては、遺構くん cubic 2016 12.03、Adobe Illustrator CS6、Adobe Photoshop CS6、Adobe InDesign CS6、表データ・報告書原稿の作成については Microsoft Office Word・Excel のソフトウェアを使用した。

## 3. 東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の自治法派遣・短期出張による支援

平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生し、岩手・宮城・福島 の三県では甚大な被害を受けた。被災三県では、震災からの復旧・復興事業に関連した工事に伴う発掘調査が急増した。これを受け、震災復興事業に関連した復興調査に迅速に対応するため、文化庁を通じて、埋蔵文化財専門職員の自治法派遣や県内陸上市町村からの短期出張による、被災 3 県の発掘調査体制の強化が図られた（宮城県教育委員会 2014・2015・2016）。

### 【山元町における復興調査等の現状】

山元町では、平成 22 年度から開始された常磐道関連遺跡の発掘調査を機に、町内での遺跡調査が増加した。そして、東日本大震災後の平成 24 年度以降、公共事業や個人住宅建設などの震災復興事業に関連した発掘調査が町内各所で行われるようになり、町内遺跡の発掘調査件数はここ数年で劇的に増加した。加えて、最近では、土砂採取事業等といった復興事業に関連した民間開発の案件も発生している。

具体的な実績でみてみると、平成 22 年 4 月から平成 28 年 12 月末の段階で、山元町内において発掘調査が実施された遺跡は、61 遺跡 90 地点で、その調査総面積は約 194,000 m<sup>2</sup> にのぼる。

### 【山元町における発掘調査体制と派遣職員受入状況】

常磐道関連遺跡の調査が開始された平成 22 年度当時、山元町では、発掘調査に対応する専門職員（町職員）が 1 名のみの配置だったため、町単独でその調査に対応することが困難な状況にあった。このことから、常磐道関連遺跡の調査は、県教委の全面的な協力を得て対応していた。こうした状況の中、平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生したことにより、常磐道以外の各種復興関連事業や民間開発に関連した発掘調査がさらに増加し、専門職員の不足はさらに悪化した。

これを受け、町では、平成 25 年度から、前述の手法による専門職員の派遣を本格的に受け入れることができ、激増する発掘調査に対応することができた。

具体的な山元町での専門職員受け入れ状況は第 4・5 表のとおりで、平成 25 年 4 月～平成 28 年 12 月の 3 年 9 ヶ月でのべ 37 名の派遣を受けることができた〔町への直接派遣のべ 13 名（平成 25 年度 4 名、平成 26 年

度2名、平成27年度4名、平成28年度3名) / 県教委経由による職員派遣のべ24名(平成26年度8名、平成27年度9名、平成28年度7名) ]。

**【北経塚遺跡発掘調査(5次調査)への支援】**

今回報告する北経塚遺跡の本発掘調査(5次調査)では、平成27年度の現地調査において、福岡県筑紫野市派遣の川口陽子調査員の支援を受けた。また、平成28年度に実施した本報告書作成業務にあたっては、町担当職員の報告書刊行に係る業務時間確保のために、派遣職員による他の現場対応といった支援を受けることができ、町担当職員の負担軽減につながった。町内での発掘調査が継続して実施される中、予定どおりに本報告書の刊行を完了することができた背景には、こうした派遣職員の支援・協力があつたことは言うまでもない。本書作成を担当した職員として、感謝の意を表したい。



北経塚遺跡5次調査 調査風景  
(写真左から2番目:福岡県筑紫野市派遣・川口調査員)

第4表 山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況(直接派遣) (H25年4月~H28年12月末現在)

派遣年度	氏名	派遣元	派遣期間	備考
H25年度	森 秀之	北海道恵庭市	H25.4.1~H26.3.31	文化財業務全般(埋蔵文化財事前協議・確認調査等対応・事務手続き、有形文化財修繕、標柱整備ほか)
	草場 啓一	福岡県筑紫野市	H26.12.1~12.31	合戦原遺跡確認調査
	小鹿野 亮	福岡県筑紫野市	H26.1.1~2.28	合戦原遺跡確認調査
	日下 和寿	宮城県白石市	H25.12.1~H26.3.31	週1日程度の支援 中筋・谷原遺跡の弥生土器遺物整理
H26年度	小南 裕一	福岡県北九州市	H27.1.1~2.28	大塚遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
	中村 昇平	福岡県春日市	H27.3.1~3.31	大塚遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
H27年度	木下 晴一	香川県	H27.4.1~H28.3.31	各種業務全般支援、復興事業・民間開発の支援
	城門 義廣	福岡県	H27.4.1~H28.3.31	各種業務全般支援、大塚遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
	熊代 昌之	福岡県久留米市	H27.6.1~7.31	大塚遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
H28年度	川口 陽子	福岡県筑紫野市	H27.8.1~10.9	北経塚遺跡(民間・店舗開発)本調査対応
	城門 義廣	福岡県	H28.4.1~9.30	合戦原遺跡線刻画移設工事対応 大塚遺跡(民間・土砂採取)報告書対応
	星野 恵美	福岡県福岡市	H28.4.1~9.30	日向遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
	板倉 有太	福岡県福岡市	H28.10.1~H29.3.31	川内遺跡(民間・土砂採取)本調査対応

第5表 山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況(宮城県経由・出張扱い) (H25年4月~H28年12月末現在)

派遣年度	人数	派遣職員(派遣元)	備考
H26年度	8名	大友 邦彦・佐藤 則之(宮城県)、 長橋 至(山形県)、石川 智紀(新潟県)、小瀬 忠司(岐阜県)、東影 悠(奈良県)、 御旗 貞義(福井県)、守岡 正司(高知県)	復興事業の支援
H27年度	9名	高橋 洋彰・下山 貴生・長内 祐輔・佐藤 則之(宮城県)、 長橋 至(山形県)、伊藤 智樹(千葉県)、飯坂 盛泰(新潟県)、小瀬 忠司(岐阜県)、 杉山 一雄(岡山県)	復興事業の支援
H28年度	7名	高橋 洋彰・下山 貴生・佐藤 則之・熊谷 宏規・白崎忠介(宮城県) 長橋 至(山形県)、飯坂 盛泰(新潟県)	復興事業の支援 民間開発の支援

## 第2節 基本層序

今回の調査区は、標高 5.6~7.6m の低位段丘裾部の平坦面に位置する。調査区北東部の標高が最も高く、そこから西・南にかけて緩やかに傾斜する。調査区の発掘調査実施前の土地利用状況は原野であるが、地権者等の話では、過去にリンゴ畑や水田等に利用されていたとのことである。

調査区の基本層序は、調査地点によって若干の相違はあるが、原則として上から現代の表土（I層）、現代の盛土（II層）、耕作土（III層）、旧表土（IV~VI層）、地山（VII層）の順で構成される。遺構確認面はVII層上面である。遺構確認面である地山や遺構の残存状況から、今回の調査区については、調査区北東~東端部分で後世の削平を若干受けているが、基本的に本来の地形は残存しているものと考えられる。

それぞれの層の概要は以下のとおりである（第5図）。

**I層**：現代の表土・耕作土。層厚は6~25cm。

**II層**：現代の盛土。層厚は5~105cm。IIa層は調査区西端のみ、IIb層は調査区全域で確認された。

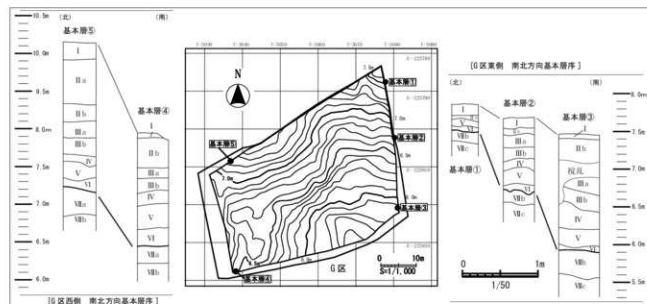
**III層**：近現代の耕作土。層厚は30~60cmである。土色と混入物の違いにより、IIIa層：灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルトとIIIb層：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルトに細別される。調査区北東部分以外で確認した。

**IV層**：黒褐色（10YR3/2）シルト。層厚は5~35cmで、近世・近代の陶磁器を包含する。調査区北東部分以外で確認した。近世以降の旧表土とみられる。

**V層**：黒褐色（10YR2/2）シルト。層厚は10~40cmである。調査区のほぼ全域で確認された。平成15年度調査のA・B区3層、平成21年度調査のD区V層、平成23年度調査のF区V層と対応するとみられる。過去の調査成果から、古墳時代~中世の旧表土であったと考えられる。

**VI層**：褐色（7.5YR4/3）粘土質シルト。層厚は8~40cmである。調査区のほぼ全域で確認された。平成15年度調査のA区4層、平成21年度調査のD区VI層、平成23年度調査F区VI層と対応するとみられる。過去の調査成果から、縄文時代の旧表土であったと考えられる。

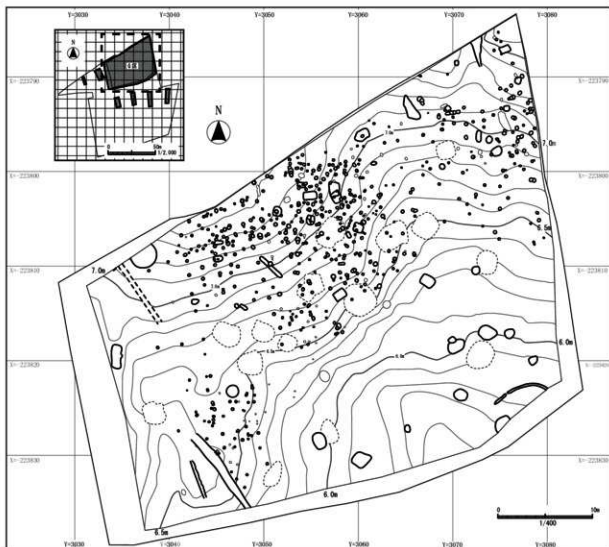
**VII層**：地山。各地点によって異なる種類のものが分布していた。基本的にはVIc層~VIb層~VIa層の順に堆積しており、平成21年度調査・平成23年度調査で確認した層序と対応する。VIIa層：橙色（7.5YR6/8）粘土質シルトは調査区西側のみに、VIIb層：黄褐色（10YR5/6）粘土質シルトとVIIc層：にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルトは調査区全域に分布する。



第5図 北経塚遺跡 G区 基本層序

### 第3節 発見された遺構と遺物の概要

今回の調査区で検出した遺構は、掘立柱建物跡16棟、溝跡5条、井戸跡1基、土坑41基、柱穴・ピット568個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）である（第6図）。これらの遺構から出土した遺物は、遺物収納箱（長59cm×幅38cm×深20cm）で2箱出土しており、その内訳は、縄文土器、土師器（非ロクロ・ロクロ成形）、須恵器、かわらけ、中世陶器、磁器、漆器、石器である。以下、発見された遺構・遺物について、遺構の種類ごとに記述する。



第6図 北経塚遺跡G区 遺構配置図

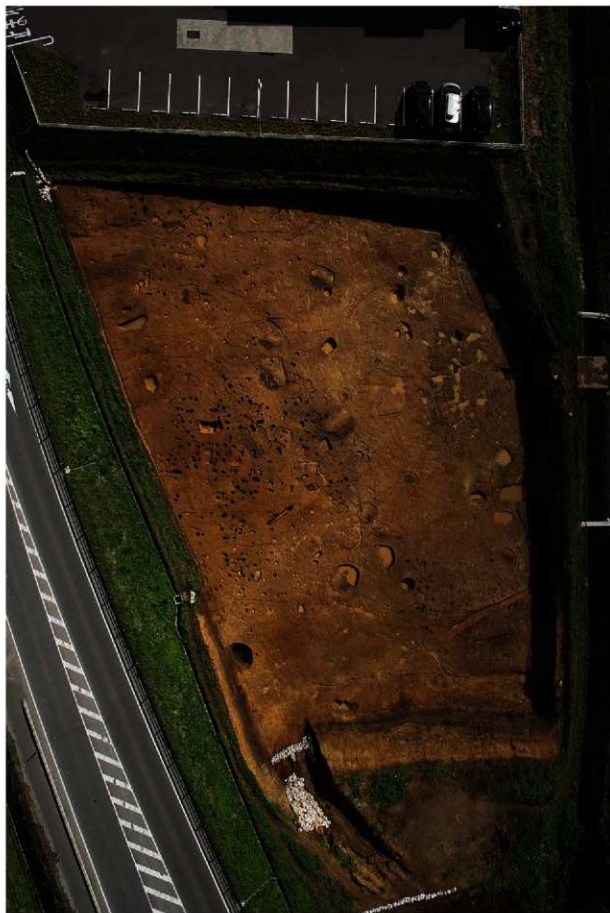


1. 北経塚遺跡G区調査区遠景（西から撮影）



2. 北経塚遺跡G区調査区遠景（東から撮影）

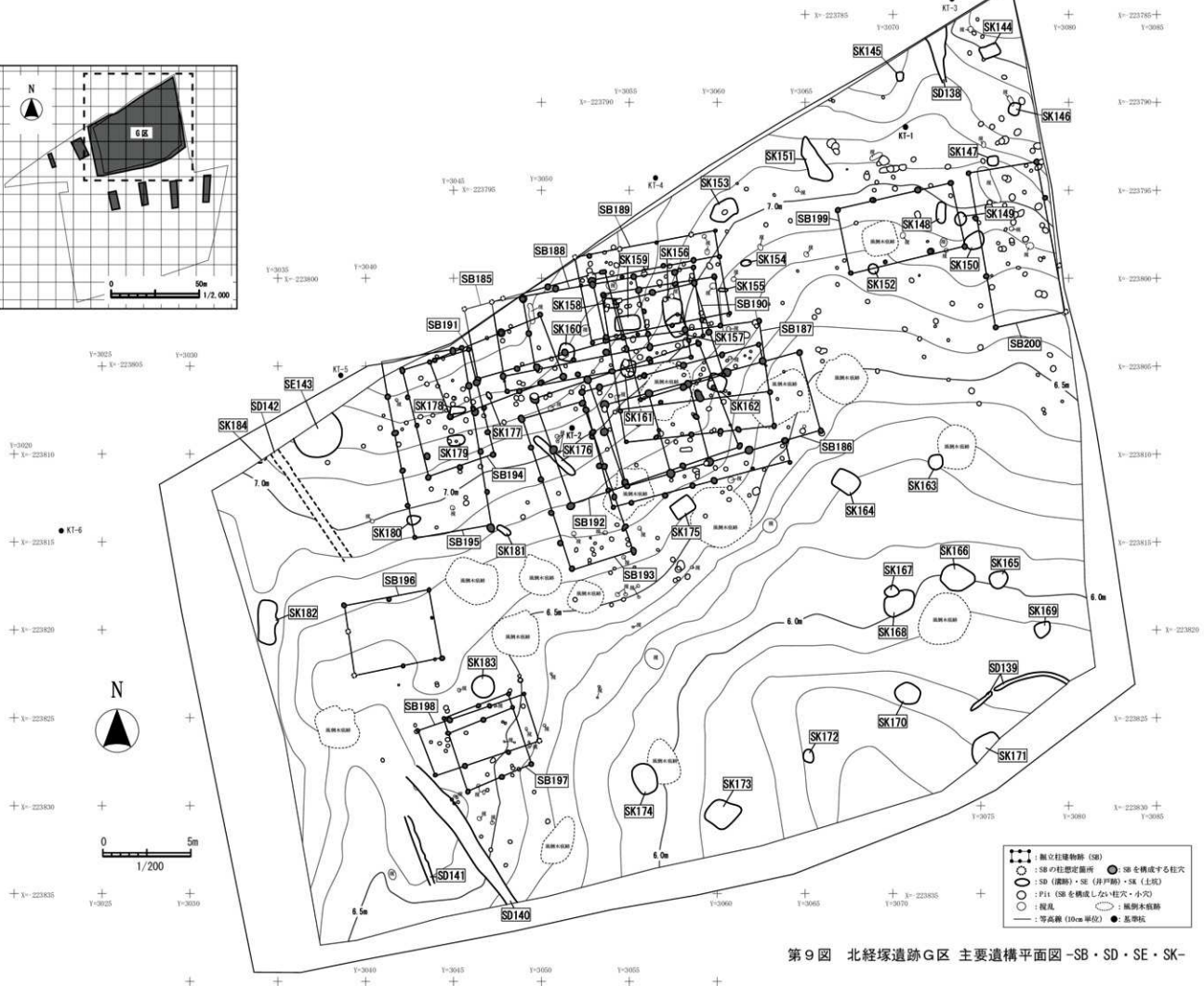
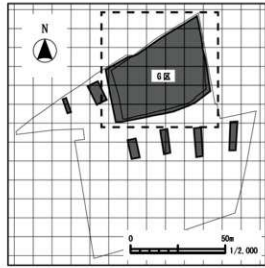
第7図 北経塚遺跡 G区 調査区全景 (1)



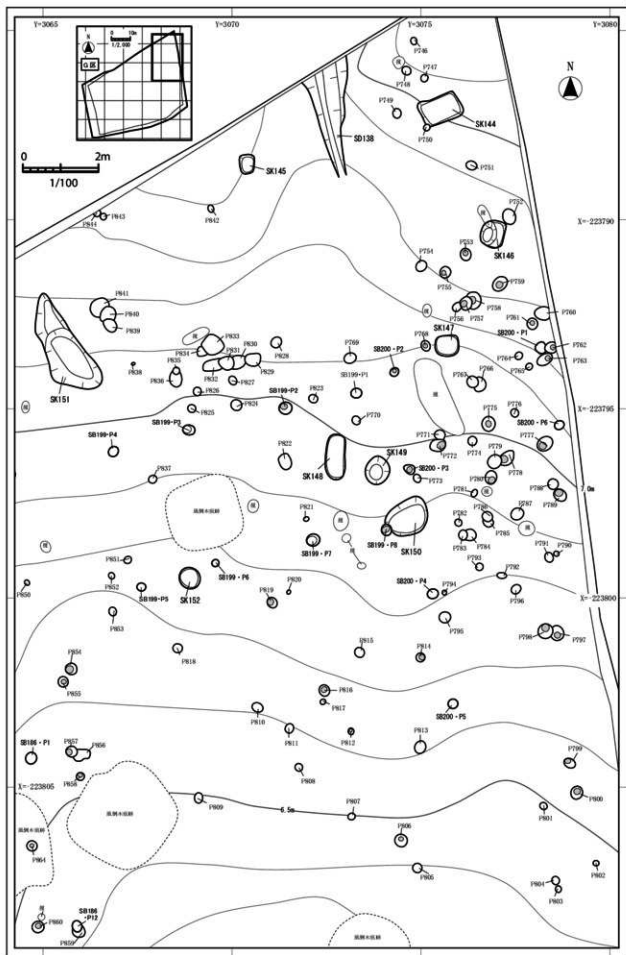
3. 北経塚遺跡G区調査区全景（上が東）

第8図 北経塚遺跡 G区 調査区全景（2）

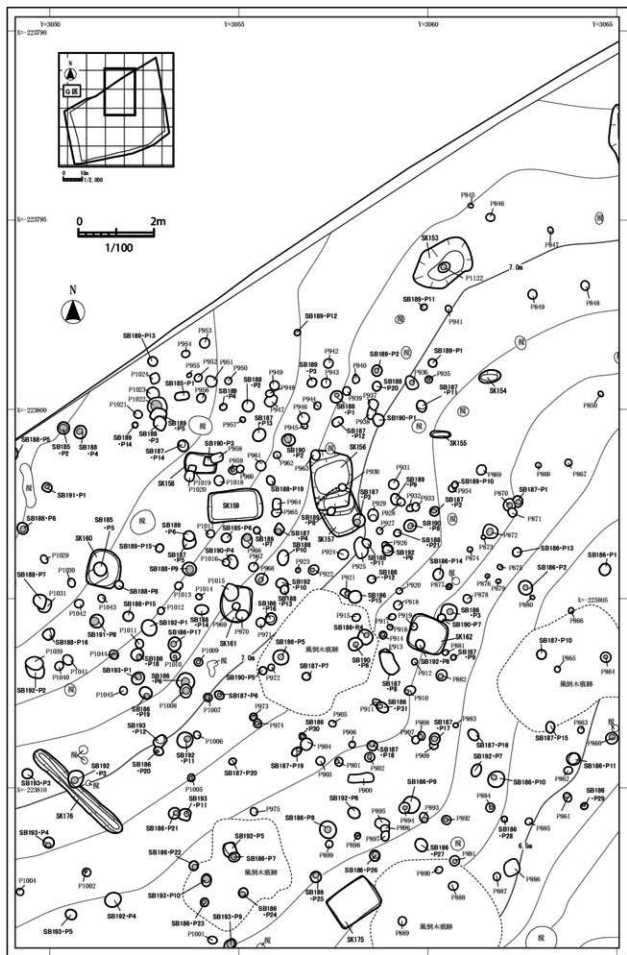




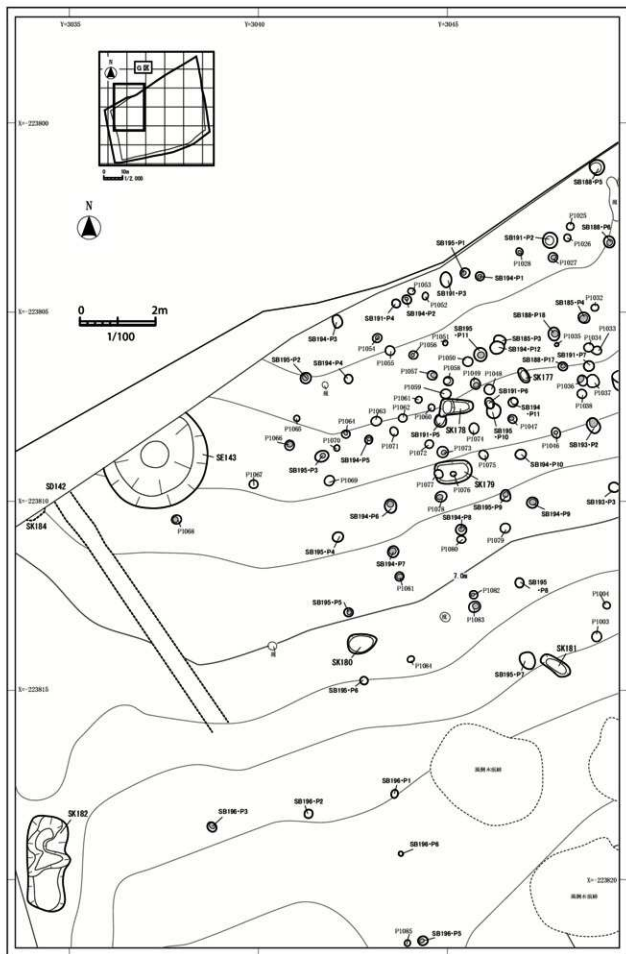
第9図 北経塚遺跡G区 主要遺構平面図・SB・SD・SE・SK-



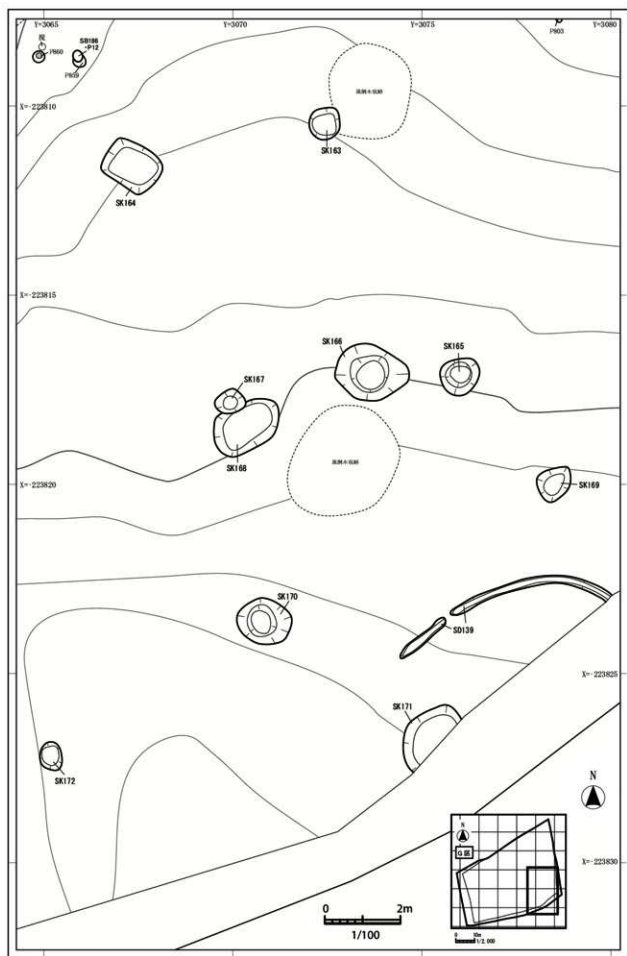
第 10-1 図 北塚遺跡G区 遺構配置図 (詳細図 1)



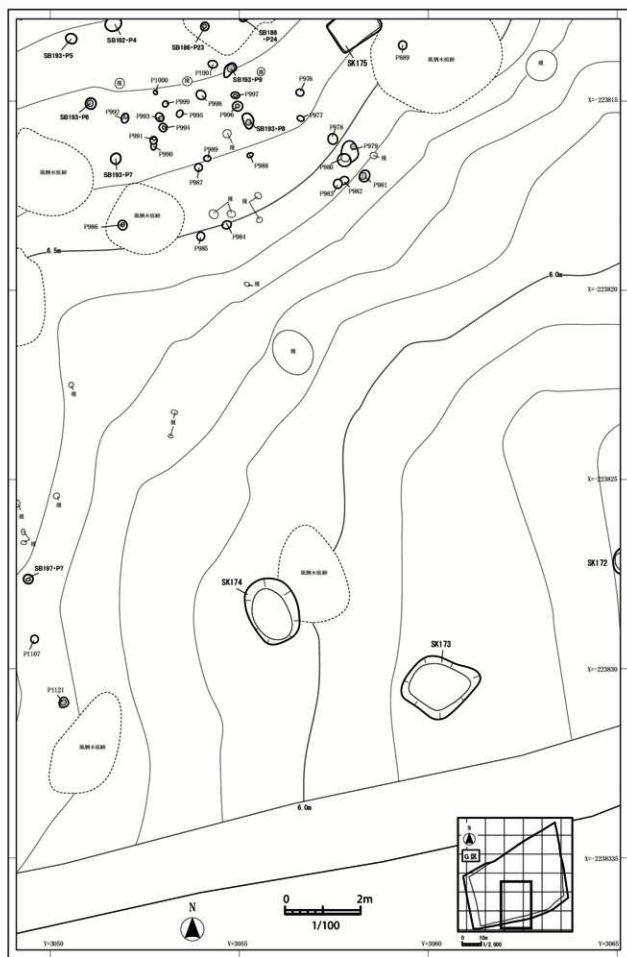
第10-2図 北経塚遺跡G区 遺構配置図(詳細図2)



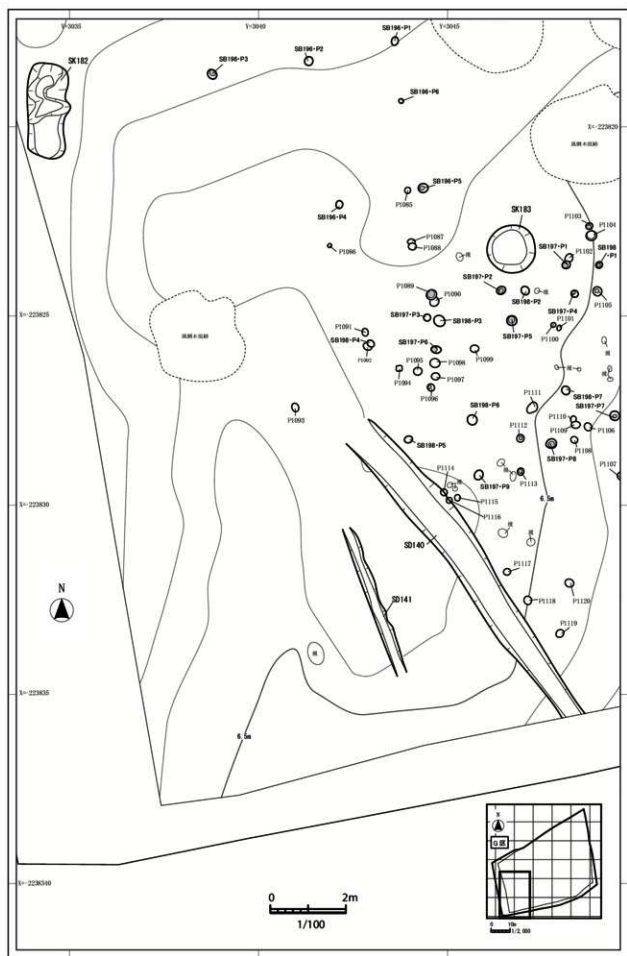
第10-3図 北経塚遺跡G区 遺構配置図(詳細図3)



第10-4図 北経塚遺跡G区 遺構配置図(詳細図4)



第 10-5 図 北経塚遺跡G区 遺構配置図 (詳細図 5)



第10-6図 北経塚遺跡G区 遺構配置図(詳細図6)

## 1. 掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット

今回の調査では、568個の柱穴跡・ピット（小穴）を検出した。これらの柱穴・ピットの多くは、掘立柱建物跡や柱穴列跡などを構成する柱穴であったと考えられる。検出した568個の柱穴・ピットを検討した結果、掘立柱建物跡16棟（SB185～200）を抽出することができた（第11図）。以下、柱穴・ピットの調査方法と建物の認定基準、確認した建物の詳細、その他の柱穴・ピットの特徴について記載する。

### （1）柱穴・ピットの調査方法と掘立柱建物跡の認定方法

本項で報告する掘立柱建物跡については、次の手順で検討を行い、その認定を行った。また、検出した柱穴・ピットの調査方法は以下のとおり行った。

#### 【柱穴・ピットの調査方法】

今回の調査では、現場での建物検討時間の確保のため、柱穴の一部の記録作成の省略（単層ないし柱痕跡のないピットの断面図作成の省略、柱穴・ピットの下場計測の省略）を行った。一方で、今後も建物の再検討ができる情報を記録・提示するために、柱痕跡の有無の確認、重複関係の確認、柱穴・ピットすべての土層注記作成、底面標高の記録、柱穴の断面写真撮影は徹底して行い、本報告に検出した柱穴・ピットすべての情報（平面・属性表）を掲載することとした。

#### 【建物の認定基準】

建物の認定にあたっては、柱通り・柱の対応関係のよいもので、歪みの少ない四角形・長方形となるものを建物として認定した。ただし、柱穴の密集地帯では、1間×1間の建物の認定は避けた。また、柱通り・柱の対応関係が多少悪い場合でも、柱列が平行し、隅柱の位置が対応する歪みの少ないものについても建物として認定した。

#### 【建物抽出の手順】

建物の抽出作業は、原則として、現地調査の段階で行い、その後、整理作業段階でそれらの建物についての再検討を行うといった2段階での作業を経て建物を認定した。

##### （現地作業での手順）

- ① 遺構抽出段階で、柱穴及び柱痕跡のプランを測量して作成した白図をもとに建物を検討。
- ② 柱穴精査（半裁）時に遺構の重複関係・深さ・埋土の状態を確認し、①で検討した建物と照らし合わせ、切合の矛盾や柱筋等を考慮しながら再度建物を検討。
- ③ ①と②の検討により、建物として想定しても差し支えないと判断できたものを建物として認定。
- ④ 建物として認定できなかった柱穴のみを抽出し、かつ、柱穴群の周囲を再度精査し、柱穴の検出漏れがないか確認した上で、残った柱穴で再度建物を検討。

##### （整理作業での手順）

- ① 現地調査で認定した建物の方向・軸をもとに、再度余った柱穴で建物を検討。検討にあたっては、現場で作成した柱穴の属性表（埋土・底面標高などの情報）を参考にした。
- ② 現地調査で認定した建物の再確認（より大型にならないか、建物として無理がないか、庇がつかないかなどの再確認）。



以上の方法により、掘立柱建物跡を認定したが、建物を構成する柱穴として判断できたものは568個中191個（全体の3割程度）であり、多数の「柱穴跡」が残る結果となった。これらの残された柱穴・ピットのうち多くは、本来、建物等を構成する柱穴であったと考えられ、今回の調査区内ではさらに建物・柱穴列などが存在したと推定される。また、建物として認定したのものの中には、調査区外に延びていると想定したものもあり、実際には建物ではない可能性があるものも含まれている。これらのことから、今回報告する建物については、今後の周辺の発掘調査や掘立柱建物研究の進展、建物群の再検討等により、変更・追加する可能性があることを申し添えておきたい。

## (2) 掘立柱建物跡

今回の調査では、掘立柱建物跡16棟(SB185～200)を検出した(第11～14図)。建物の柱穴は、基本層VIIb層上面において確認した。

以下、全体の概要を記載し、その後、それぞれの個別の建物の特徴等に掲載した。

第6表 北塚塚遺跡 G区 掘立柱建物跡(SB185～200) 一覧表

遺跡No.	建物形状		棟方向	平面積(m <sup>2</sup> )	[内]・埋没・掘立柱の計画		建物の方向	建物深層(m)	備考					
	縦行	横行			縦行長さ(測点柱列/柱間寸法)	横行長さ(測点柱列/柱間寸法)				建物傾斜角度/ 真正基準				
SB185	3	1	東西	5.6	南	2.3+2.9+3.4	3.9	東	3.9	西18°	N-18°-W	33.5	ef	構成P11:P1~6 敷瓦:SB185-100(敷瓦) -SB194
SB186	[1]+5	[1]+[1]	東西	11.5 [12.5]	北	[1.0]+2.6+2.3+2.2+2.1+2.3	4.9 [7.0]	西13°	西	13°	N-13°-W	39.3 [32.8]	ef	構成P11:P1~21 骨P1~12(骨), P13~29(瓦), P30~31(瓦柱) 敷瓦:SB192-102, P30(骨)-191-192-193 P34~39(骨) 芝居付遺物(瓦:北-西・南)・敷瓦
SB187	4	[1]+[1]	東西	8.7	北	2.3+3.2+2.0+2.2	4.1 [8.4]	西13°	西	13°	N-W	35.7 [20.1]	ef	構成P11:P1~29 骨P1~10(骨), P11~14(骨), P15~29(瓦) 敷瓦:SB125, P9(骨)-13-13a(骨)-18(骨) 家・瓦柱付遺物(瓦:北-西・南)
SB188	5+[1]	[1](1)	東西	10.7 [11.0]	南	2.0+2.1+1.9+2.5+2.2+2.0	4.0 [4.9]	西9°	西	9°	N-W	42.6 [36.0]	ef	構成P11:P1~21 骨P1~5~9-11-13(骨), 12-17-20-21(瓦), 18-19(瓦柱) 敷瓦:SB185-102, SB166, P35(骨)-193-194 二重瓦葺付遺物(瓦:南・東)・埋瓦
SB189	[1]+4	[1]+1	東西	7.3 [8.0]	南	[0.5]+1.9+2.0+1.7+1.7	3.5 [4.7]	東	東	13°	N-11°-W	23.0 [27.6]	ef	構成P11:P1~15 骨P1~10(骨), P11~15(瓦) 敷瓦:SB187, SB136-137, P34-193 二重瓦葺付遺物(瓦:東)
SB190	2	2	南北	3.7	西	2.7-3.0	4.9	南	2.5-2.4	西19°	N-19°-W	27.9	ef	構成P11:P1~8 敷瓦:SB186, SB138, P39-193 -SB166, SB167, P39-193
SB191	3	1	東西	4.8	北	1.4+3.0+2.4	3.8	東	3.8	西22°	N-22°-W	25.8	ef	構成P11:P1~8 敷瓦:SB190-191-192-193
SB192	3	2	東西	10.2	南	3.4+3.4+3.4	6.4	西	3.0-3.4	西22°	N-22°-W	63.9	ef	構成P11:P1~11 骨P11(瓦柱) 敷瓦:SB178, P32-193 -SB186+189, SB182, P103 瓦葺付
SB193	5	1	南北	9.0	東	1.8+2.0+1.9+1.8+1.5	3.6	北	3.6	西21°	N-21°-W	32.4	ef	構成P11:P1~12 敷瓦:SB189 -SB186
SB194	4	2	南北	4.3	西	1.6+1.7+1.8+1.2	4.0	北	2.0+2.0	西14°	N-14°-W	23.2	ef	構成P11:P1~12 敷瓦:SB185-194
SB195	5	1	南北	10.4	東	2.2+1.5+2.3+2.2+2.1	4.3	南	4.3	西10°	N-10°-W	44.7	ef	構成P11:P1~11 敷瓦:SB195 -SB193
SB196	2	2	東西	4.9	北	2.0-2.3	3.9	東	1.5-2.4	西12°	N-12°-W	19.1	ef	構成P11:P1~6 敷瓦:なし
SB197	3	[1]+1	東西	3.9	北	2.1+1.8	3.4 [4.3]	西13°	西	13°	N-13°-W	13.3 [16.8]	ef	構成P11:P1~9 骨P1~9(骨), P10~13(瓦) 敷瓦:P1102-192 瓦葺付遺物(瓦:北)
SB198	3	1	東西	4.4	北	1.9+2.4+2.1	2.7	南	2.7	西24°	N-24°-W	12.3	ef	構成P11:P1~7 敷瓦:P1102-193
SB199	3	1	東西	4.7	南	2.0+2.7+2.0	3.7	西	3.7	西14°	N-14°-W	24.8	ef	構成P11:P1~8 敷瓦:SB130-193
SB200	3	1	南北	3.9	西	2.6+1.4+2.9	3.9	北	3.9	西10°	N-10°-W	34.7	ef	構成P11:P1~6 敷瓦:SB106 -P182

※建物形状の欄で「[ ]」とあるのは「骨P」間、埋瓦または敷瓦に用いた「または測点」間、「[ ]+」とあるのは「骨P」間、埋瓦または敷瓦に用いた「または測点」間；であることを示す。

※平面積の欄( )内の数値は埋瓦を示す。

※平面積の縦行・横行の数は埋瓦は原則として「骨P部分の長さ」を示した。このうち、骨・埋瓦の付く建物については、その下の「[ ]内に骨・埋瓦に含めた埋瓦の数を表記した。柱間寸法(柱と、敷瓦部分)の、東西方向、南北方向のものは北から順に記した。従って「[ ]」は「[ ]」で示した測点柱列の柱間寸法を示す。

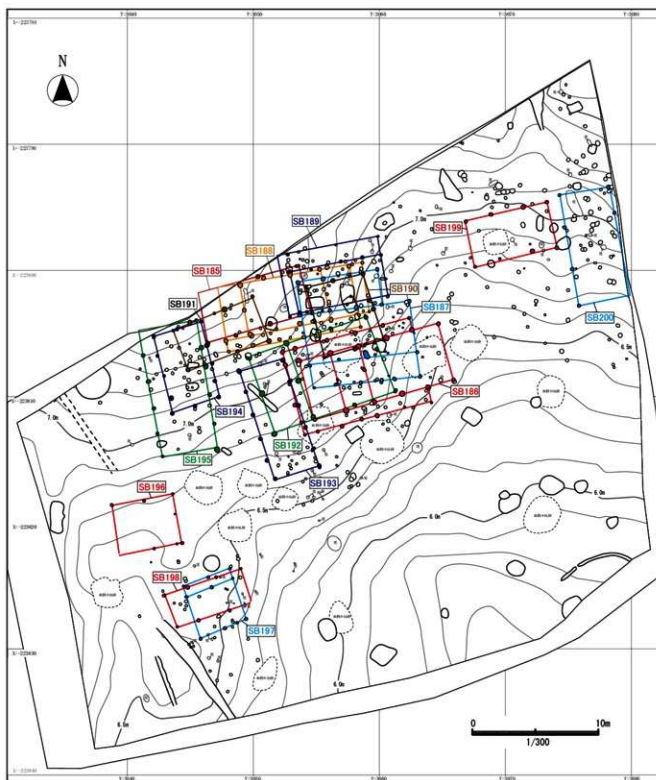
※建物(埋瓦部分)に用いている材料、敷瓦が平面的建物や柱の一端の骨Pに用いている材料として、平面的に示した。

※調査区外に延びる遺物・・・・建物形状「●」(上×1間)、平面積欄「埋瓦」(●)以上と表記した。

※柱穴の一端が骨Pに用いている遺物・・・・埋瓦・柱間寸法のうち、埋瓦の計画に●、敷瓦の計画に○、柱長に●、骨Pに○、●と表記した。

※建物形状欄、骨・埋瓦の付く建物については、上の骨Pの埋瓦、下段の「 ]」に骨・埋瓦を示した骨Pの埋瓦を示した。

■ 骨Pに埋瓦または敷瓦に用いた骨P



第 11 図 北経塚遺跡G区 SB (掘立柱建物跡) 遺構配置図

## ① 検出した掘立柱建物跡の概要（第11～25図、第6表）

掘立柱建物跡は、16棟（SB185～200）確認した。以下、その概要について説明する。

## 【建物の規模】

検出した建物跡16棟のうち、その身舎の規模の内訳は、

- 桁行5間の建物が 4棟（5間×1間：4棟[SB186・188・193・195]）  
 桁行4間の建物が 3棟（4間×2間：1棟[SB194]、4間×1間：2棟[SB187・189]）、  
 桁行3間の建物が 6棟（3間×2間：1棟[SB192]、3間×1間：5棟[SB185・191・198～200]）、  
 桁行2間の建物が 3棟（2間×2間：2棟[SB190・196]、2間×1間：1棟[SB197]） である。

## 【柱穴規模・柱痕跡・柱間寸法】

柱穴掘方の規模は、長軸20～30cm前後の円形・楕円形を呈するものが主体で、柱痕跡は、直径15cm前後のもので円形・楕円形を呈するものが多い。身舎の桁行の柱間寸法は、1.4～3.4mでばらつきがあるが、2.0m前後のものが多い。

## 【建物の方向・傾き】

建物棟方向の内訳は、東西棟建物が11軒、南北棟建物が5軒である。建物の傾きは、建物の東辺・西辺が真北に対して西に傾くものがほとんどで、西に9～24°前後傾く。

## 【庇・張出が付く建物】

検出した建物16棟中、身舎に庇や張出の付く建物は5棟確認した。その内訳は、庇の付く建物4棟（SB186・188・189・197）、庇・張出の付く建物1棟（SB187）である。

## 【掘立柱建物跡の分布】

掘立柱建物跡の分布状況を見ると、その分布は、G区北半中央部（SB185～195周辺）、北東部（SB199・200周辺）、南西部（SB196～198周辺）の大きく3つに分けることができ、その中でも、北半中央部付近の範囲に建物が密集して配置されている。その一方で、G区の南半東側一帯では柱穴・ピットは検出されておらず、この範囲内には建物は存在しなかったと考えられる。また、配置されている建物の規模をみてみると、「庇・張出の付く建物」や「規模の大きい建物」は、北半中央部に集中しており、小規模の建物はその外周に配置される傾向が認められた。

以上のことから、今回の調査区においては、北半中央部付近に集落内の中心となる建物が配置され、その東側（調査区北東部）と南西側（調査区南西部）に付属する建物、南東部に空間がある集落構成であったと考えられる。

## 【出土遺物】

掘立柱建物跡の柱穴からは、土師器10点[環1点(5g)・甕9点(45g)]、須恵器2点[壺1点(50g)・甕1点(5g)]、かわらけ2点[皿2点(10g)]、中世陶器3点[壺1点(15g)・甕1点(420g)・器種不明品1点(5g)]、石器1点[磨製石斧1点(84.4g)]が出土した。このうち、SB186・P3出土の在産の中世陶器甕（第25図3）、SB186・P18出土の磨製石斧（第25図4）、SB190・P4出土の古瀬戸産の中世陶器壺（第25図5）、SB195・P3出土のかわらけ皿（第25図6）を図示した。



1. 北経塚遺跡G区北半中央部 SB185～196 掘立柱建物跡 完掘状況（北が上）



2. 北経塚遺跡G区北東部  
SB199・200 掘立柱建物跡  
調査状況（南から）

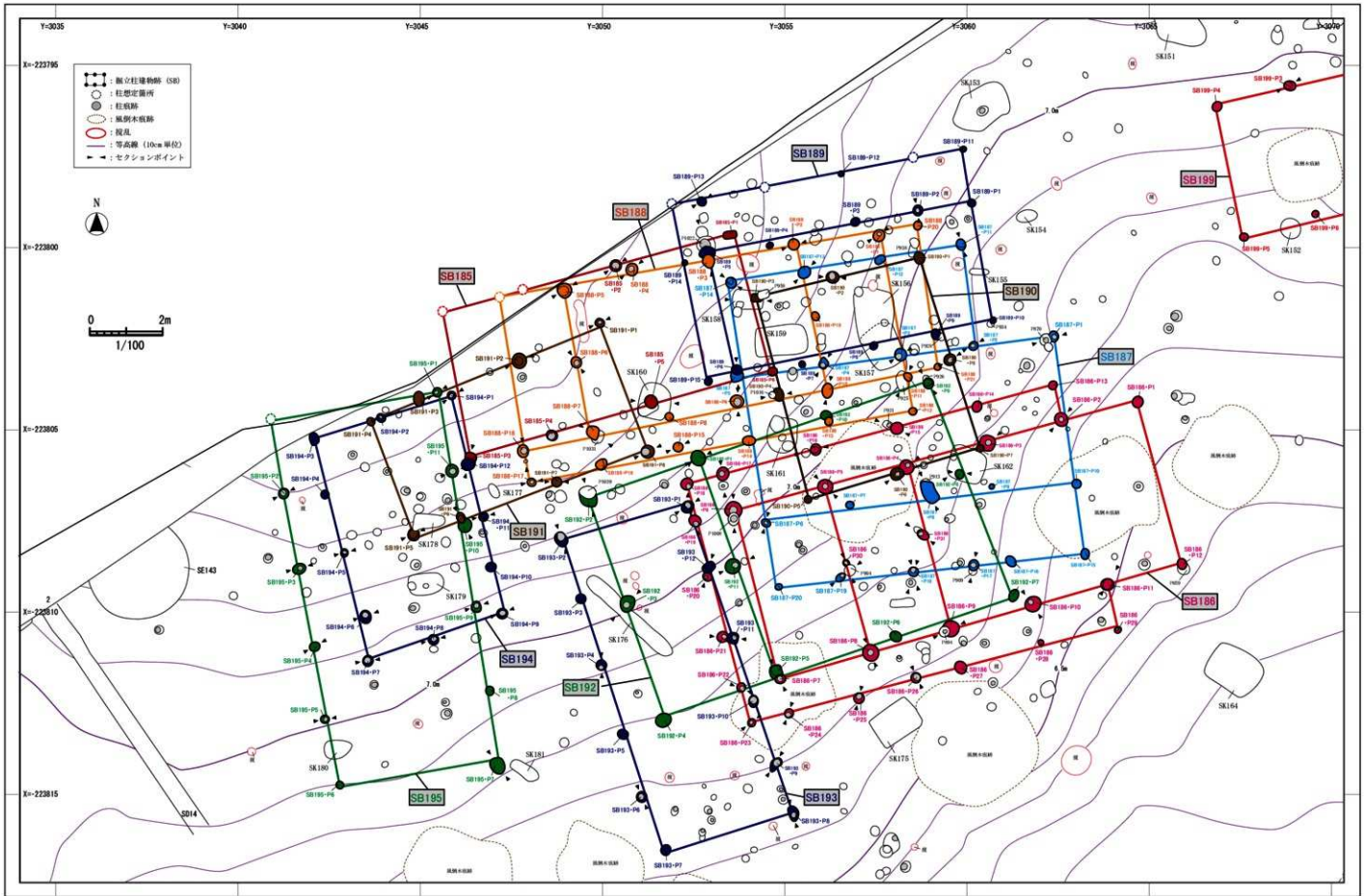


3. 北経塚遺跡G区南西部  
SB197・198 掘立柱建物跡  
調査状況（北から）

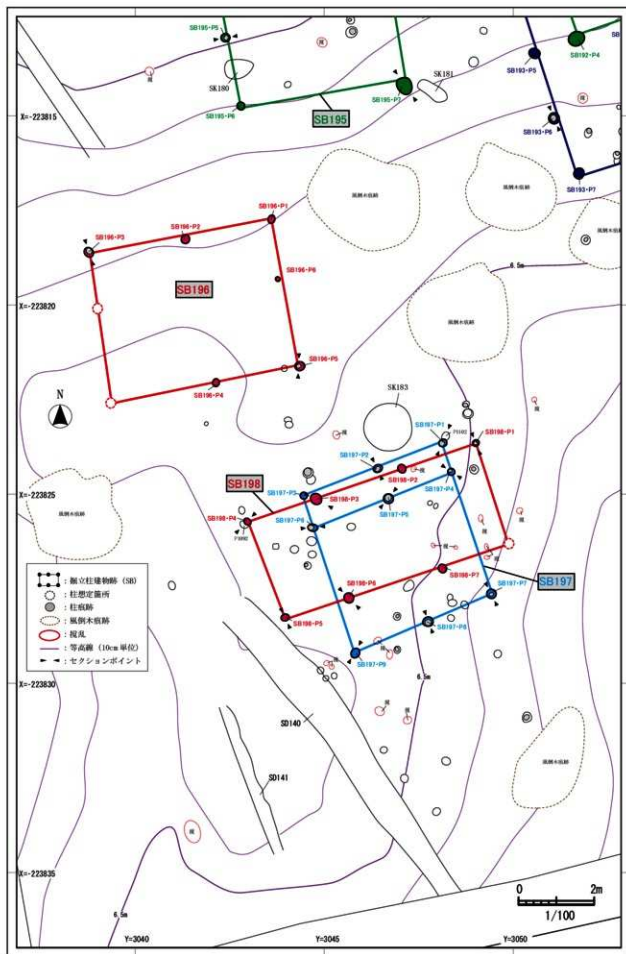
第12図 北経塚遺跡G区 掘立柱建物跡 分布状況（写真図版）



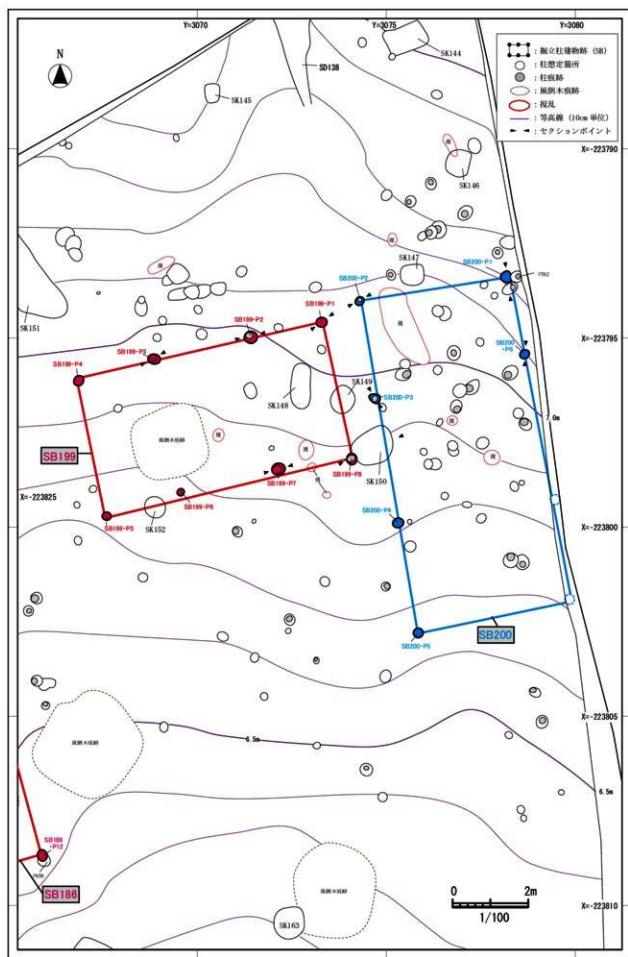
第 13 図 北経塚遺跡G区 SB (掘立柱建物跡) 掲載区分図



第14-1図 北経塚遺跡G区 掘立柱建物跡 平面図(1) -SB185~195-



第 14-2 図 北経塚遺跡 G 区 掘立柱建物跡 平面図 (2) -SB196 ~ 198-



第 14-3 図 北経塚遺跡G区 掘立柱建物跡 平面図 (3) -SB199 ~ 200-



## ②検出した掘立柱建物跡の詳細（第15～25図）

前項では、今回の調査区（G区）で確認した掘立柱建物跡の概要を示した。本項では、検出した16棟の建物跡（SB185～200）それぞれの特徴等について、第15～23図をもとに、その詳細を記載する。なお、本項での掘立柱建物跡の情報掲載にあたっては、柱穴規模・柱間寸法・傾きなどの各計測値、柱穴の土層などの観察表、平面図の表記方法は以下のとおりとした。

【掘立柱建物跡総括表（一覧表）の記載方法】

遺構 No.	建物形状		柱穴 No.	柱間寸法	柱穴の 規模	平面規模(m) 壁内内 確定値 / 測内 仮定の計測値			建物の方向	建物 面積 (㎡)	備考				
	軒行	梁行				軒柱間・測定柱列・柱間寸法	梁柱間・測定柱列・柱間寸法	建物傾角/測定値/推定値							
S185	3	1	東向	9.6	傾	2.3+2.9+3.4			3.9	南	3.9	西18°	N-18°-W	33.3	検出P1-P3 遺構 No. SB185-00180-00194
S186	[3]x4	[1]x[1+1]	東向	11.5 [11.5]	北	[1.0]+2.6+2.3+2.2+2.1+2.3			4.9 [7.0]	西	[1.1]+1.9+[1.0]	西17°	N-17°-W	38.3 [82.8]	検出P1-P13 測内=12(傾き)、P13=29(傾)、P10-P11(8柱) 遺構 No. SB177-001、SB178-0119-02-03-04-05 3区画併存建物跡、北-西-南、東西並行

※建物の規模・方向・平面規模・傾き・面積の情報を記載

※備考欄には、建物・柱穴列を構成するP番号、重層階級、その他特記を記載

【各柱穴・ピットの個別情報の記載方法】

(例) SB187 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構 番号	柱穴・ピット番号 / 高輪・短輪・短輪・短輪・短輪・短輪・短輪・短輪				柱穴属性				備考 (傾斜・出土層階級)
	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	
P1	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20° 20° 20° 20° 20° 20°
P2	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	同上
P3	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20°
P4	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20°
P5	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20°
P6	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20°
P7	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20°
P8	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20°
P9	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20°
P10	高輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	短輪	傾斜 20° 20°

※①内の数値は推定値

①傾斜表  
により  
記号化

②その他の  
記載事項参照

①ピット（柱穴・小穴）類型

【柱穴】  
 a: 柱跡が柱穴部分に  
 到達するもの  
 b: 柱跡が柱穴部分  
 まで達しない  
 のもの

【柱跡・ピット・小穴】  
 a: 柱跡が柱穴部分  
 まで達しない  
 のもの  
 b: 柱跡が柱穴部分  
 まで達しない  
 のもの

【土層・地層の埋土・埋土層別】

■土層  
 1: 黒褐色 (01002/1) 2: 黒褐色 (01002/2) 3: 黒褐色 (01002/3)  
 4: 黒褐色 (01002/4) 5: 黒い黒褐色 (01002/5) 6: 黒い黒褐色 (01002/6)  
 7: 灰褐色 (01002/7) 8: 褐色 (01002/8) 9: 褐色 (01002/9)  
 10: 褐色 (01002/10) 11: 黒い黒褐色 (01002/11) 12: 黒褐色 (01002/12)  
 13: 灰褐色 (01002/13) 14: 黒褐色 (01002/14) 15: 黒褐色 (01002/15)  
 16: 褐色 (01002/16)

■土質  
 A: シルト B: 砂質シルト C: 粘土質シルト

■埋人物

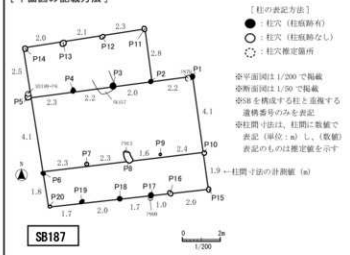
a: 埋土ブロック多く含む b: 埋土ブロック含む c: 埋土ブロック少量含む  
 d: 埋土ブロック微量含む e: 埋土粒子多く含む f: 埋土粒子含む  
 g: 埋土粒子少量含む h: その他のもの (上記以外のもの) i: 埋人物なし  
 ※aを埋めた場合は埋土層に埋土層埋人物を記載  
 ※埋土層の埋土層から、下記の内容については記載を省略した  
 灰褐色物一件付 黒褐色ブロック一つ付 灰褐色物ブロック一つ付  
 灰色土ブロック一つ付

【記載例】  
 10a・1・土色: 黒褐色 (01002/1)、土質: シルト、埋人物: 埋土ブロック多く含む

②その他の記載事項

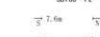
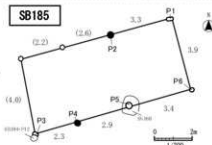
■柱穴・ピットの計測値  
 ・(傾斜) は測定値を示す  
 ・(傾斜) は推定値を示す  
 ■柱穴・ピット傾斜の「埋土・埋土層(埋土層)」記載事項  
 ・柱穴の場合には「埋土層」を意味する。  
 ・「傾斜」は、等の記載は「柱穴・小穴」の埋土層等2層以上に分層した場合を示す。  
 ・「傾斜」は柱跡が柱穴の埋土・埋土層 / 「傾斜」は柱跡が柱穴1層の埋土・埋土層  
 ・「傾斜」は柱跡が柱穴の埋土・埋土層 / 「傾斜」は柱跡が柱穴1層の埋土・埋土層  
 ■埋土層の記載事項  
 ・柱跡が柱跡が埋土層に埋土層 / 柱跡が柱跡が埋土層に埋土層  
 ・この際、埋土層別・出土層階級を記載

【平面図の記載方法】



**【SB185 掘立柱建物跡】**

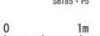
- [建物間数] 桁行3間×梁行1間/東西棟建物跡
- [建物方向] N-18°-W
- [構成 Pit] P1～6
- [平面規模] 桁行8.6m×梁行3.9m(身舎面積33.5㎡)
- [柱間寸法] 桁行2.3～3.4m・梁行3.9m
- [出土遺物] なし
- [重 複] SK160→SB185→SB194



SB185 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

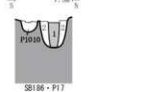
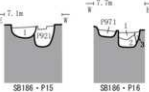
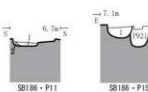
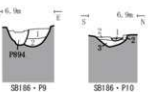
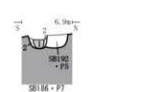
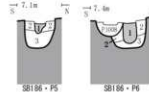
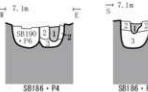
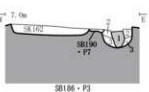
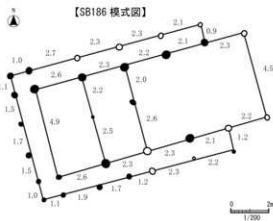
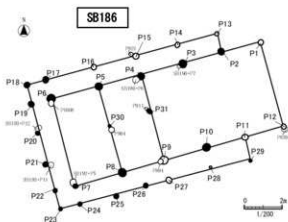
遺構番号	柱穴・ピット掘方(長軸・短軸 on, 深さ掘深高: m)				柱 遺 跡				柱 間 寸 法	備 考 (遺物・出土遺物等)	
	平面形	長 軸	短 軸	深 度	遺 跡	遺 跡	遺 跡	遺 跡			
P1	円形	3.7	1.9	1.5	7.2	遺跡: 2.6m	---	---	---	柱取取	
P2	円形	3.0	3.0	1.3	7.2	6.0m	円形	2.3	1.9	2.6	遺: 土器
P3	円形	3.0	3.0	1.9	7.2	遺跡: 1.6m	---	---	---	---	遺194・P12.3.9在
P4	円形	3.0	3.0	3.0	7.0	遺跡: 1.6m	---	---	---	---	柱取取
P5	円形	3.2	3.2	3.2	6.9	遺跡: 1.2m	---	---	---	---	柱取取
P6	円形	2.3	2.3	2.1	2.6	遺跡: 2.6m	---	---	---	---	遺190.2.9在

- 【P2】 1層: 柱取取  
2層: 掘方埋土
- 【P3・5】 1・2層: 柱取取



**【SB186 掘立柱建物跡】**

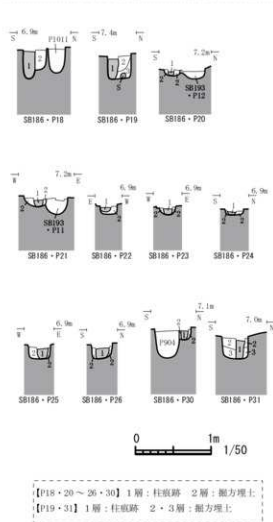
- [建物間数] 桁行5間×梁行1間+庇1間(三面)/東西棟建物跡(身舎の北・西・南に庇が付く)
- [建物方向] N-15°-W
- [構成 Pit] P1～31(※P1～12: 身舎/P13～29: 庇/P30・31: 束柱)
- [平面規模] 桁行11.5m×梁行4.9m・庇の出0.9～1.2m(身舎面積56.3㎡/庇を含む面積82.8㎡)
- [柱間寸法] 桁行2.1～2.6m・梁行4.9m
- [出土遺物] 土師器・須恵器・中世陶器(第25図3)・石器(第25図4)
- [重 複] SR192・193・P859・911・921→SB186→SB190・P894・904・1008



- 【P2～6・10】 1層: 柱取取/2・3層: 掘方埋土
- 【P7・8・17】 1層: 柱取取/2層: 掘方埋土
- 【P9】 1・2層: 堆積上(柱取取)
- 【P11】 1層: 柱取取/2層: 掘方埋土
- 【P15】 1層: 堆積上(柱取取)
- 【P16】 1・2層: 柱取取/3層: 掘方埋土



第15図 SB185 掘立柱建物跡・SB186 掘立柱建物跡(1)



SB186 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	掘立柱の掘方(長軸・短軸・掘削深さ・埋土厚)				柱の属性				柱の位置(東・西・南・北)	柱の形状(柱高・柱径)	柱の材質	柱の用途(柱高・柱径)	
	平面形状	長軸	短軸	掘削深さ	埋土厚	平面形状	長軸	短軸					
P1	円形	32	30	8	6.5	掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P2	円形	38	38	16	6.5	掘立柱 掘立柱	円形	14	13	3A	5'1"	—	—
P3	円形	43	45	25	6.0	掘立柱	円形	17	16	3A	5'	—	—
P4	円形	40	34	30	6.8	掘立柱	円形	13	13	3A	5'	—	—
P5	円形	41	40	39	6.6	掘立柱 掘立柱	円形	15	15	4A	5'1"	—	—
P6	円形	42	43	43	6.8	掘立柱 掘立柱	円形	21	20	3A	5'1"	円形(上)古	—
P7	円形	28	25	19	8.3	3層	円形	10	10	3A	5'	円形(上)古	—
P8	円形	46	42	24	6.5	2層	円形	19	17	3A	5'	—	—
P9	円形	44	38	28	6.4	掘立柱 掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P10	円形	46	44	37	6.5	掘立柱	円形	18	14	3A	5'	—	—
P11	円形	38	38	19	8.3	掘立柱 掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P12	円形	30	30	16	6.3	掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P13	円形	25	24	8	6.7	掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P14	円形	30	27	13	6.6	掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P15	円形	32	33	17	6.6	掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P16	円形	28	28	23	6.7	掘立柱 掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P17	円形	14	14	33	6.8	3層	円形	16	15	2A	5'	—	—
P18	円形	30	30	30	6.8	4層	円形	18	14	2A	5'	掘立柱	—
P19	円形	34	30	30	6.8	掘立柱 掘立柱	円形	13	13	2A	5'	—	—
P20	円形	25	23	20	6.9	3層	円形	9	9	2A	5'	円形(上)古	—
P21	円形	30	29	14	6.7	3層	円形	13	12	2A	5'	円形(上)古	—
P22	円形	23	20	11	6.7	3層	円形	13	14	2A	5'1"	—	—
P23	円形	23	22	12	6.6	3層	円形	11	10	3A	5'	—	—
P24	円形	25	25	8	6.7	4層	円形	16	14	2A	5'	—	—
P25	円形	29	29	19	6.5	4層	円形	16	15	2A	5'	—	—
P26	円形	36	28	26	6.5	3層	円形	20	16	4A	5'	—	—
P27	円形	35	33	14	6.6	掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P28	円形	16	16	4	6.5	掘立柱	—	—	—	—	—	—	—
P29	円形	16	16	4	6.4	6層	円形	7	7	2A	5'	—	—
P30	円形	110	16	17	6.7	3層	楕円形	12	9	3A	5'	楕円形(古)	—
P31	楕円形	35	26	32	6.3	掘立柱	楕円形	15	12	2A	5'	楕円形(古)	—



SB186 掘立柱建物跡 (南から撮影)

第 16 図 SB186 掘立柱建物跡 (2)

【SB187 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行4間×梁行1間+庇1間+張出1間/東西棟建物跡（身舎の北に張出・南に庇が付く）

【建物方向】 N-9°-W

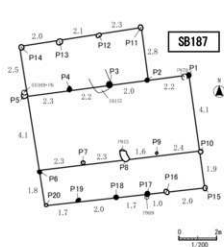
【構成Pit】 P1～20（※P1～10：身舎/P11～14：張出/P15～20：庇）

【平面規模】 桁行8.7m×梁行4.1m・庇の出1.8～1.9m・張出の出2.8m（身舎面積35.7㎡/庇・張出を含む面積70.1㎡）

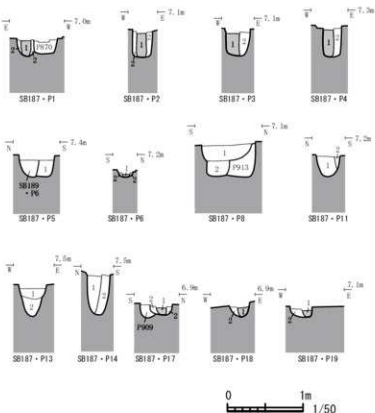
【柱間寸法】 桁行1.6～2.4m・梁行4.1m

【出土遺物】 土師器、中世陶器

【重複】 SK157、P909・913→SB187→SB189、P870



- 【P1～4・6・17～19】  
1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
- 【P5】  
1層：堆積土（柱枝取）
- 【P8・13】  
1・2層：堆積土（柱枝取）
- 【P11・14】  
1層：堆積土（柱枝取）  
2層：掘方埋土



SB187 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

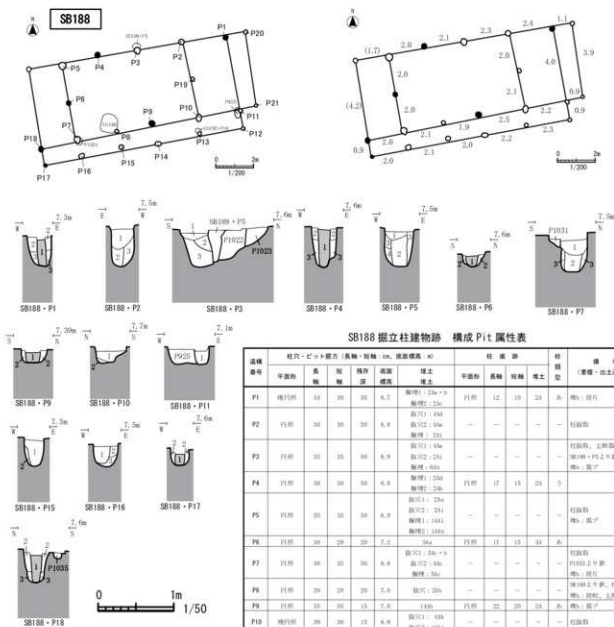
遺構 番号	柱式・ピット掘方（表軸・短軸、ch. 掘深・埋高、地）				柱 遺 跡				柱 遺 跡 （重複・出土遺物等）		
	平面形	長 軸	短 軸	掘深 埋高	平面形	長軸	短軸	埋土 埋高			
P1	円形平	31	123	26	6.5	366	円形	14	13	24	赤土層上層
P2	楕円形	25	29	49	6.5	281	円形	13	11	23	赤土層
P3	楕円形	22	30	32	6.9	136a	円形	19	17	23	赤土層上層
P4	楕円形	29	22	24	6.6	25a	円形	15	13	23	赤土層
P5	円形平	1363	30	30	6.9	掘方：25a・b	—	—	—	—	埋土層・赤土層 柱遺跡、埋土・掘方 中世陶器
P6	円形	26	22	13	6.9	35a	円形	11	10	23	赤土層
P7	円形	22	22	11	6.8	掘方：25a	—	—	—	—	柱遺跡
P8	楕円形	42	36	41	6.4	掘方：25a 掘方：25a	—	—	—	—	柱遺跡 P912上層
P9	円形	14	15	12	6.6	掘方：34g	—	—	—	—	柱遺跡
P10	円形	25	25	9	6.4	掘方：25a	—	—	—	—	柱遺跡
P11	楕円形	30	25	30	6.9	掘方：25a 掘方：18a	—	—	—	—	柱遺跡
P12	楕円形	27	22	18	6.9	掘方：25a	—	—	—	—	柱遺跡
P13	楕円形	46	30	40	6.8	掘方：13a 掘方：25a	—	—	—	—	柱遺跡
P14	円形	30	30	30	6.9	掘方：25a 掘方：25a	—	—	—	—	柱遺跡 埋土・掘方
P16	円形	22	26	22	6.5	掘方：25a	—	—	—	—	柱遺跡
P17	円形	30	26	14	6.6	35a	円形	17	16	23	赤土層上層・土師器
P18	円形	29	26	20	6.6	35a	円形	16	15	23	赤土層
P19	楕円形	36	19	14	6.7	35a	楕円形	13	10	23	赤土層
P20	円形	20	46	17	6.8	掘方：25a	—	—	—	—	柱遺跡

第17図 SB187 掘立柱建物跡

【SB188 掘立柱建物跡】

[建物間数] 桁行5間×梁行1間+庇1間(二面)/東西棟建物跡(身舎の南・東に庇が付く)  
 [建物方向] N-9°-W  
 [構成Pit] P1~21(※P1~5・7~11・18:身舎/P12~17・20・21:庇/P6・19:東柱)  
 [平面規模] 桁行10.7m×梁行4.0m・庇の出0.9~1.1m(身舎面積42.8㎡/庇を含む面積56.0㎡)  
 [柱間寸法] 桁行1.9~2.5m・梁行4.0m  
 [出土遺物] 土師器  
 [重複] SB189・192, SK160, P925・1031→SB188

【SB188 模式図】



SB188 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

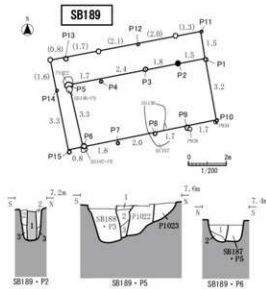
遺構番号	柱・ビツの方位(真軸・短軸・cm. 庇深標準値 m)			埋土 層数・土質	柱 属性			柱 型	備 考 (遺物・出土遺物等)					
	平面形	真 軸	短 軸		平面形	真軸	短軸							
P1	楕円形	34	30	33	6.7	掘削: 25a 露出: 14a 露出: 14a 掘削: 25a	円形	12	10	3a	赤 焼	灰片		
P2	円形	30	30	30	6.8	露出: 14a 露出: 14a 掘削: 25a	-	-	-	-	-	-	柱取跡	
P3	円形	30	30	30	6.9	露出: 14a 露出: 24a 掘削: 16a	-	-	-	-	-	-	柱取跡, 土師器 ※P925・P926 焼土	
P4	円形	30	30	30	6.8	掘削: 25a	円形	17	13	3a	5	-	-	
P5	円形	30	30	30	6.9	露出: 14a 露出: 23a 掘削: 14a 掘削: 14a	-	-	-	-	-	-	柱取跡 焼土	
P6	円形	30	29	29	7.0	5a 掘削: 14a	円形	17	13	3a	4a	-	-	
P7	円形	36	33	36	6.8	露出: 23a・5a 露出: 14a 掘削: 5a	-	-	-	-	-	-	柱取跡 P925土師器 焼土・灰片	
P8	円形	30	30	30	7.0	露出: 20a	-	-	-	-	-	-	焼土・土師器, 柱取跡 焼土, 土師器	
P9	円形	30	30	30	7.0	14a	円形	22	20	2a	4a	-	-	
P10	楕円形	29	29	28	6.9	露出: 14a 露出: 14a	-	-	-	-	-	-	柱取跡	
P11	円形	29	29	28	6.7	露出: 20a	-	-	-	-	-	-	柱取跡, P925土師器	
P12	円形	27	27	27	6.8	露出: 16a	-	-	-	-	-	-	有取跡	
P13	円形	30	29	29	6.8	露出: 20a	-	-	-	-	-	-	焼土・P925土師器 柱取跡	
P14	楕円形	27	27	27	6.9	露出: 20a	-	-	-	-	-	-	柱取跡	
P15	円形	40	40	30	6.8	露出: 24a 掘削: 16a	-	-	-	-	-	-	柱取跡 土師器	
P16	楕円形	32	28	32	7.0	露出: 20a 掘削: 20a 掘削: 25a	-	-	-	-	-	-	柱取跡	
P17	円形	34	34	30	7.0	13a	円形	13	11	3a	4a	-	-	
P18	楕円形	35	30	30	6.9	掘削: 130a・5a 掘削: 115a	円形	18	17	3a	4a	-	-	焼土・掘削土: 灰片 焼土・掘削土: 灰片
P19	楕円形	25	25	25	6.9	露出: 20a	-	-	-	-	-	-	柱取跡	
P20	楕円形	28	28	30	6.7	露出: 20a	-	-	-	-	-	-	柱取跡	
P21	円形	29	29	29	6.7	露出: 20a	-	-	-	-	-	-	柱取跡	

【P1・4・16】  
 1層: 柱取跡 2・3層: 掘方埋土  
 【P2・3・7】  
 1・2層: 堆積土(柱取取) 3層: 掘方埋土  
 【P3】  
 1・2層: 堆積土(柱取取) 3・4層: 掘方埋土  
 【P6・9・17】  
 1層: 柱取跡 2層: 掘方埋土  
 【P10】  
 1・2層: 堆積土(柱取取)  
 【P11】  
 1層: 堆積土(柱取取)  
 【P15】  
 1層: 堆積土(柱取取) 2層: 掘方埋土  
 【P16】  
 1層: 堆積土(柱取取) 2・3層: 掘方埋土

第18図 SB188 掘立柱建物跡

**[SB189 掘立柱建物跡]**

- [建物間数] 桁行4間×梁行1間+庇1間(二面)/東西棟建物跡(身舎の北・西に庇が付く)
- [建物方向] N-11°-W
- [構成Pit] P1～15(※P1～10:身舎/P11～15:庇)
- [平面規模] 桁行7.2m×梁行3.2m・庇の出0.8～1.5m(身舎面積23.0㎡/庇を含む面積37.6㎡)
- [柱間寸法] 桁行1.5～2.4m・梁行3.2～3.3m
- [出土遺物] なし
- [重 複] SB187, SK156・157, P934, P1022→SB189→SB188, P928



SB189 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

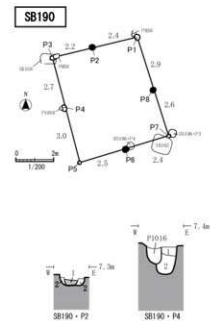
遺構番号	柱穴・ピット部方(長軸・短軸 cm, 掘削深高 m)				柱 遺 跡			柱 間 距	備 考 (遺物・出土遺物等)		
	平面形	長	短	深	長さ	幅	高さ				
P1	円形	35	29	23	6.7	掘穴: 25x	-	-	-	柱遺跡	
P2	円形	34	30	19	6.4	掘穴: 13x 掘穴: 25x	円形	33	11	2.6	柱遺跡
P3	円形	29	29	20	6.3	掘穴: 25x	-	-	-	柱遺跡	
P4	楕円形	29	14	14	7.1	掘穴: 4.5x	-	-	-	柱遺跡	
P5	円形?	33	33	19	7.4	掘穴: 22x 掘穴: 14x	-	-	-	柱遺跡 ※P10・P12より古 P10以上より	
P6	楕円形	34	29	23	7.4	掘穴: 18x 掘穴: 20x	-	-	-	柱遺跡 ※P10・P12より古 柱遺跡、礎、土板	
P7	円形	29	29	20	7.0	掘穴: 15x	-	-	-	柱遺跡	
P8	円形	29	29	15	6.8	掘穴: 25x	-	-	-	柱遺跡 ※P10・P12より古 柱遺跡	
P9	円形	33	24	19	6.8	掘穴: 25x	-	-	-	柱遺跡 ※P10より古 礎、土板	
P10	円形	29	29	15	6.7	掘穴: 25x	-	-	-	柱遺跡 ※P10より古	
P11	円形	30	30	16	6.9	掘穴: 25x	-	-	-	柱遺跡	
P12	円形	32	30	19	7.1	掘穴: 14x	-	-	-	柱遺跡	
P13	円形	31	26	20	7.2	掘穴: 15x 掘穴: 14x	-	-	-	柱遺跡 礎、土板	
P14	円形	19	29	1	7.3	掘穴: 2.5x	-	-	-	柱遺跡	
P15	円形	29	29	2	7.4	掘穴: 7.5x	-	-	-	柱遺跡	

- [P2] 1層: 柱痕跡 2・3層: 掘方埋土
- [P5] 1～3層: 堆積土(柱抜取)
- [P6] 1・2層: 堆積土(柱抜取)



**[SB190 掘立柱建物跡]**

- [建物間数] 桁行2間×梁行2間/南北棟建物跡
- [建物方向] N-19°-W
- [構成Pit] P1～8
- [平面規模] 桁行5.7m×梁行4.9m(身舎面積27.9㎡)
- [柱間寸法] 桁行2.6～3.0m・梁行2.2～2.5m
- [出土遺物] 中世陶器(第25図5)
- [重 複] SB186, SK158, P938→SB190→SK162, P958・1016



SB190 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット部方(長軸・短軸 cm, 掘削深高 m)				柱 遺 跡			柱 間 距	備 考 (遺物・出土遺物等)		
	平面形	長	短	深	長さ	幅	高さ				
P1	円形	30	30	6.9	掘穴: 25x	-	-	-	柱遺跡 ※P10より古		
P2	楕円形	35	30	10	7.1	14x	円形	32	18	2.4	礎、土板
P3	楕円形	30	29	19	7.0	掘穴: 25x	-	-	-	柱遺跡 ※P10より古 柱遺跡	
P4	円形?	30	30	33	6.8	掘穴: 2.5x 掘穴: 2.5x	-	-	-	柱遺跡 ※P10より古 中世陶器	
P5	円形	29	29	20	6.9	掘穴: 14x	-	-	-	柱遺跡	
P6	円形	30	30	30	6.9	30x	円形	15	13	2.4	礎、土板 柱遺跡 ※P10より古 ※P10・P12より古
P7	円形	21	29	5	6.8	掘穴: 30x	-	-	-	柱遺跡 ※P10より古 ※P10・P12より古	
P8	円形	30	30	30	6.9	掘穴: 20x 掘穴: 14x 掘穴: 20x	楕円形	11	13	2.4	礎、土板

- [P2・6] 1層: 柱痕跡 2層: 掘方埋土
- [P1] 1・2層: 堆積土(柱抜取)
- [P7] 1層: 堆積土(柱抜取)
- [P8] 1層: 柱痕跡 2～4層: 掘方埋土

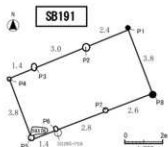


第 19 図 SB189・190 掘立柱建物跡

### 【SB191 掘立柱建物跡】

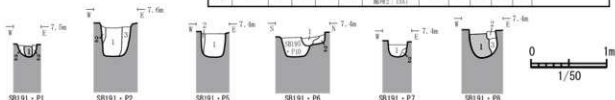
【建物間数】 桁行3間×梁行1間/東西棟建物跡  
 【建物方向】 N-22°-W  
 【構成Pit】 P1～8  
 【平面規模】 桁行6.8m×梁行3.8m(身舎面積25.8㎡)

【柱間寸法】 桁行1.4～3.0m・梁行3.8m  
 【出土遺物】 なし  
 【重 複】 SB195→SB191→SK178



SB191 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット部材(長軸・短軸、cm、深部埋深 m)				柱 遺 跡			柱 間 距	備 考 (遺構・出土遺物等)			
	平面形	長 軸	短 軸	埋 存 深 度	埋土	平面形	長 軸			短 軸		
P1	円形	25	25	19	2.2	なし	円形	12	11	25	赤	焼土・灰土
P2	円形	44	44	20	2.0	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	-	赤褐色 焼土・灰土
P3	円形	40	40	20	2.2	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	-	赤褐色
P4	円形	29	29	19	2.4	掘削：135a 埋埋：135b	-	-	-	-	-	赤褐色
P5	円形	33	33	25	2.0	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	-	赤褐色・P192より古
P6	楕円形	30	25	12	2.1	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	-	赤褐色・P192より古 柱取込、焼土・灰土
P7	円形	30	30	30	2.9	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	-	赤褐色 焼土・灰土
P8	円形	30	30	30	2.9	掘削：134a 埋埋：134b	円形	24	21	25	赤	赤褐色

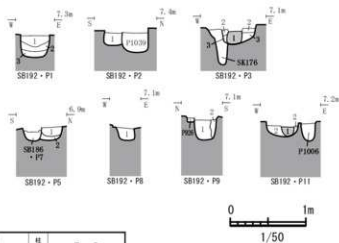
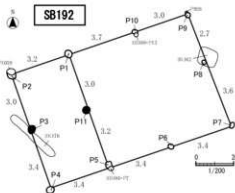


【P1】1層：柱取込跡 2層：掘方埋土 【P2】1層：堆積土(柱取込) 2・3層：掘方埋土  
 【P5～7】1層：堆積土(柱取込) 2層：掘方埋土 【P8】1層：柱取込跡 2・3層：掘方埋土

### 【SB192 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行3間×梁行2間/東西棟建物跡  
 【建物方向】 N-23°-W  
 【構成Pit】 P1～11(※P1～10:身舎/P11:束柱)  
 【平面規模】 桁行10.2m×梁行6.4m(身舎面積65.3㎡)

【柱間寸法】 桁行3.0～3.7m・梁行2.7～3.6m  
 【出土遺物】 土師器  
 【重 複】 SK176、P926→SB192→SB186・188、SK162、P1039



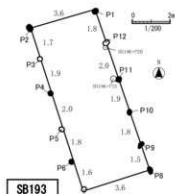
SB192 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット部材(長軸・短軸、cm、深部埋深 m)				柱 遺 跡			柱 間 距	備 考 (遺構・出土遺物等)			
	平面形	長 軸	短 軸	埋 存 深 度	埋土	平面形	長 軸			短 軸		
P1	円形	30	30	35	2.9	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	赤褐色 土師器		
P2	楕円形	40	40	20	2.1	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	赤褐色、P1039より古		
P3	楕円形	48	40	21	2.9	掘削：134a 埋埋：134b	円形	18	18	28	赤	SK162より古
P4	楕円形	49	39	5	2.7	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	赤褐色	
P5	楕円形	44	33	20	2.6	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	赤褐色・P1より古	
P6	楕円形	34	28	7	2.7	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	赤褐色	
P7	楕円形	35	25	10	2.7	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	赤褐色	
P8	円形	28	28	18	2.9	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	赤褐色、SK162より古	
P9	円形	30	30	30	2.9	掘削：134a 埋埋：134b	-	-	-	-	赤褐色	
P10	円形	43	43	17	2.9	掘削：134a 埋埋：134b	円形	38	18	28	赤	SK162より古 土師器
P11	円形	43	43	17	2.9	掘削：134a 埋埋：134b	円形	38	18	28	赤	赤褐色

第 20 図 SB191・192 掘立柱建物跡

### [SB193 掘立柱建物跡]

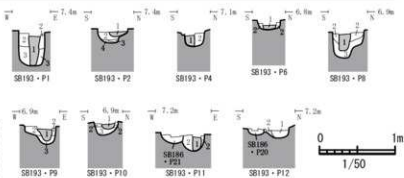
- [建物間数] 桁行5間×梁行1間 / 南北棟建物跡
- [建物方向] N-21°-W
- [構成Pit] P1～12
- [平面規模] 桁行9.0m×梁行3.6m (身舎面積32.4㎡)
- [柱間寸法] 桁行1.5～2.0m×梁行3.6m
- [出土遺物] 土師器
- [重 複] SB193→SB186



- [P1・8～10] 1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土
- [P2] 1層：柱痕跡 2～4層：掘方埋土
- [P1・6・11] 1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
- [P12] 1層：堆積土(柱採取) 2層：掘方埋土

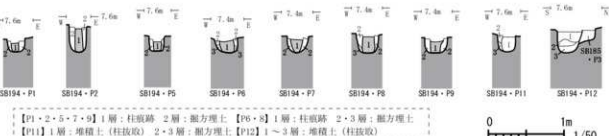
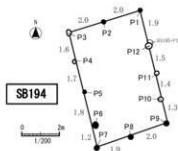
SB193 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット掘方(長軸・短軸 cm, 遺構深高 m)					柱 遺 跡			柱 型	備 考 (遺物・出土遺物等)		
	平面形	長 軸	短 軸	構 深	底 高	埋土	平面形	長 軸			短 軸	埋土
P1	円形	35	35	23	6.0	掘埋：23a 掘埋：27a	円形	18	17	23	赤	
P2	角円形	100	30	20	7.0	掘埋：141 掘埋：131	円形	25	24	35	赤	焼：灰子
P3	円形	27	25	27	6.9	掘埋：143	-	-	-	-	-	柱取
P4	円形	30	28	19	6.7	掘埋：34g	円形	13	12	24	赤	土師器
P5	円形	29	27	20	6.6	掘埋：34g	-	-	-	-	-	柱取
P6	円形	30	29	11	6.5	掘埋：35a	円形	17	15	24	赤	
P7	円形	27	26	6	6.4	掘埋：35a	-	-	-	-	-	柱取
P8	円形	40	37	33	6.9	掘埋：35a 掘埋：35a	円形	15	14	34	赤	
P9	多角形	41	33	22	6.5	掘埋：43a	円形	21	19	24	赤	
P10	角円形	32	35	20	6.4	掘埋：25a	円形	20	20	24	赤	
P11	円形	32	30	20	6.7	掘埋：35a	角円形	15	12	24	赤	SB186・P21より古 柱取。焼：灰子
P12	角円形	38	27	20	6.6	掘埋：35a・b 掘埋：43a	-	-	-	-	-	SB186・P21より古 柱取。焼：灰子



### [SB194 掘立柱建物跡]

- [建物間数] 桁行4間×梁行2間 / 南北棟建物跡
- [建物方向] N-14°-W
- [構成Pit] P1～12
- [平面規模] 桁行6.3m×梁行4.0m (身舎面積25.2㎡)
- [柱間寸法] 桁行1.2～1.9m / 梁行1.9～2.0m
- [出土遺物] なし
- [重 複] SB185→SB194



- [P1・2・5・7・9] 1層：柱痕跡 2層：掘方埋土 [P6・8] 1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土
- [P11] 1層：堆積土(柱採取) 2・3層：掘方埋土 [P12] 1～3層：堆積土(柱採取)

SB194 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

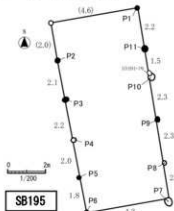
遺構番号	柱穴・ピット掘方(長軸・短軸 cm, 遺構深高 m)					柱 遺 跡			柱 型	備 考 (遺物・出土遺物等)		
	平面形	長 軸	短 軸	構 深	底 高	埋土	平面形	長 軸			短 軸	埋土
P1	円形	25	25	20	7.2	掘埋：143	角円形	12	10	24	赤	
P2	円形	20	20	20	7.1	掘埋：156	角円形	8	8	24	赤	
P3	円形	30	30	20	7.5	掘埋：25a	-	-	-	-	-	柱取。焼：灰子
P4	円形	25	23	13	7.3	掘埋：95a	-	-	-	-	-	柱取
P5	円形	20	20	20	7.1	掘埋：143	角円形	13	9	24	赤	
P6	円形	30	30	20	7.0	掘埋：123a 掘埋：133a	円形	18	17	24	赤	
P7	円形	30	30	20	6.9	掘埋：143	円形	19	18	24	赤	焼：灰子
P8	円形	30	30	20	6.8	掘埋：123a 掘埋：1241	円形	19	13	24	赤	
P9	円形	30	30	22	6.9	掘埋：123a	円形	18	16	24	赤	
P10	角円形	30	24	5	7.1	掘埋：134a・b	-	-	-	-	-	柱取。焼：灰子
P11	円形	24	24	20	7.0	掘埋：25a 掘埋：141 掘埋：1241	-	-	-	-	-	柱取
P12	円形	37	33	33	7.0	掘埋：25a 掘埋：35a	-	-	-	-	-	SB185・P21より古 柱取

第21図 SB193・194 掘立柱建物跡



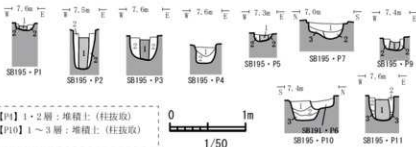
【SB195 掘立柱建物跡】

- 【建物間数】 桁行5間×梁行1間 / 南北棟建物跡
- 【建物方向】 N-10°-W【構成Pit】 P1~11
- 【平面規模】 桁行10.4m×梁行4.3m (身舎面積44.7㎡)
- 【柱間寸法】 桁行1.5~2.3m×梁行4.3m
- 【出土遺物】 かむらけ (第25図6)
- 【重複】 SB195-SB191



SB195 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

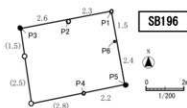
遺物番号	柱穴・ピット観方 (長軸・短軸 (cm), 遺物埋蔵高 (m))				柱 痕 跡			柱 間 寸 (遺物・出土遺物等)		
	平面形	長 軸	短 軸	埋 蔵 深	平 面 形	長 軸	短 軸			
P1	円形	25	25	19	7.3	11.0	-	-		
P2	円形	26	26	22	6.8	5.6	円形	18	25	
P3	楕円形	30	30	40	6.9	5.6	円形	11	25	5~6m径
P4	楕円形	30	25	6.8	6.8	跡P1・25	-	-	-	
P5	円形	25	24	11	6.9	5.6	跡P1・25	-	-	
P6	円形	23	23	11	6.8	6.8	跡P1・25	-	-	
P7	楕円形	48	30	21	6.8	跡P1・25	-	-	柱痕跡 礎：断片	
P8	円形	23	22	8	6.8	跡P1・25	-	-	-	
P9	円形	30	30	18	6.9	11.0	円形	18	25	25
P10	円形	180	80	30	6.9	跡P1・25	-	-	遺物・P6.5~7	
P11	楕円形	40	30	30	7.0	跡P1・25	-	-	柱痕跡	



- 【P1~3・5~9】1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
- 【P7】1~2層：堆積土 (柱痕跡) 3層：掘方埋土
- 【P10】1~3層：堆積土 (柱痕跡)
- 【P11】1層：柱痕跡 2~3層：掘方埋土

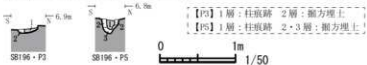
【SB196 掘立柱建物跡】

- 【建物間数】 桁行2間×梁行2間 / 東西棟建物跡
- 【建物方向】 N-12°-W【構成Pit】 P1~6
- 【平面規模】 桁行4.9m×梁行3.9m (身舎面積19.1㎡)
- 【柱間寸法】 桁行2.2~2.6m×梁行1.5~2.4m
- 【出土遺物】 なし【重複】 なし



SB196 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺物番号	柱穴・ピット観方 (長軸・短軸 (cm), 遺物埋蔵高 (m))				柱 痕 跡			柱 間 寸 (遺物・出土遺物等)		
	平面形	長 軸	短 軸	埋 蔵 深	平 面 形	長 軸	短 軸			
P1	円形	22	18	13	6.6	6.6	-	-		
P2	円形	23	24	9	6.8	6.6	跡P1・25	-		
P3	円形	25	23	6	6.7	5.6	楕円形	17	25	6
P4	円形	20	20	2	6.6	6.6	-	-	-	
P5	円形	25	23	20	6.4	6.6	楕円形	13	24	1.1
P6	円形	13	12	10	6.6	6.6	-	-	-	



- 【P1】1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
- 【P5】1層：柱痕跡 2~3層：掘方埋土

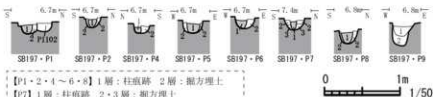
【SB197 掘立柱建物跡】

- 【建物間数】 桁行2間×梁行1間+庇1間 / 東西棟建物跡 (身舎の北側に庇が付く)
- 【建物方向】 N-20°-W
- 【構成Pit】 P1~9 (※P4~9身舎/P1~3:庇)
- 【平面規模】 桁行3.9m×梁行3.4m・庇の出0.8~0.9m (身舎面積13.3㎡/庇を含む面積16.8㎡)
- 【柱間寸法】 桁行1.8~2.2m×梁行3.4m
- 【出土遺物】 かむらけ
- 【重複】 P1102-SB197



SB197 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺物番号	柱穴・ピット観方 (長軸・短軸 (cm), 遺物埋蔵高 (m))				柱 痕 跡			柱 間 寸 (遺物・出土遺物等)		
	平面形	長 軸	短 軸	埋 蔵 深	平 面 形	長 軸	短 軸			
P1	円形	20	18	14	6.4	5.6	楕円形	13	25	5.1
P2	円形	24	23	16	6.5	5.6	楕円形	13	25	5.6
P3	円形	19	18	25	6.3	5.6	跡P1・25	-	-	-
P4	円形	20	18	18	6.4	2.6	-	-	-	-
P5	円形	25	20	16	6.4	5.6	楕円形	18	25	5.6
P6	円形	25	20	16	6.4	5.6	楕円形	18	25	5.6
P7	円形	25	23	18	6.2	5.6	楕円形	12	25	5.6
P8	楕円形	31	22	20	6.3	5.6	円形	17	25	5.6
P9	楕円形	27	22	20	6.3	5.6	跡P1・25	-	-	-

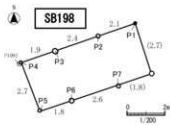


- 【P1・2・4~6・8】1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
- 【P7】1層：柱痕跡 2~3層：掘方埋土
- 【P9】1~2層：堆積土 (柱痕跡)

第22図 SB195~197 掘立柱建物跡

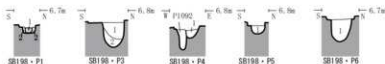
**【SB198 掘立柱建物跡】**

- 【建物間数】 桁行3間×梁行1間/東西棟建物跡
- 【建物方向】 N-24°-W
- 【構成Pit】 P1～7
- 【平面規模】 桁行6.4m×梁行2.7m (身舎面積17.3㎡)
- 【柱間寸法】 桁行1.8～2.6m・梁行2.7m
- 【出土遺物】 土師器
- 【重複】 P1092→SB198



**SB198 掘立柱建物跡 構成Pit属性表**

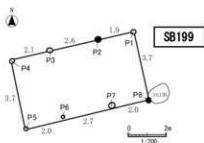
遺構番号	柱穴・ピット掘方 (柱跡・短跡・長跡・面方埋土: ㎡)					柱 遺 跡			注 (遺構・出土遺物等)	
	平面形	長	短	残存	埋土	平面形	長跡	短跡		
P1	円形	19	11	6.9	埋土	円形	19	11	23.5	柱取跡
P2	円形	25	18	6.9	掘穴・埋土	---	---	---	---	柱取跡
P3	円形	29	29	6.3	掘穴・3層埋土・2層	---	---	---	---	柱取跡
P4	円形	19	13	6.5	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡、PT902土台
P5	円形	19	13	6.5	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡
P6	円形	27	26	6.3	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡、土師器
P7	円形	25	22	6.9	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡



- 【P1】1層:柱取跡 2層:面方埋土
- 【P2】1・2層:堆積土(柱取跡) 【P4～6】1層:堆積土(柱取跡)

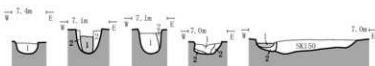
**【SB199 掘立柱建物跡】**

- 【建物間数】 桁行3間×梁行1間/東西棟建物跡
- 【建物方向】 N-14°-W
- 【構成Pit】 P1～8
- 【平面規模】 桁行6.7m×梁行3.7m (身舎面積24.8㎡)
- 【柱間寸法】 桁行1.9～2.7m・梁行3.7m
- 【出土遺物】 なし
- 【重複】 SK150→SB199



**SB199 掘立柱建物跡 構成Pit属性表**

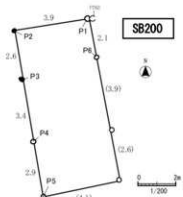
遺構番号	柱穴・ピット掘方 (柱跡・短跡・長跡・面方埋土: ㎡)					柱 遺 跡			注 (遺構・出土遺物等)	
	平面形	長	短	残存	埋土	平面形	長跡	短跡		
P1	楕円形	30	15	6.9	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡
P2	円形	35	20	6.7	埋土	円形	18	18	23.5	柱取跡
P3	楕円形	30	30	6.6	掘穴・2層埋土・1層	---	---	---	---	柱取跡
P4	円形	30	30	6.9	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡
P5	円形	26	25	6.6	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡
P6	円形	29	17	6.6	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡
P7	円形	25	25	6.7	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡
P8	楕円形	27	25	6.7	掘穴・埋土	楕円形	23	18	23.5	埋土・土台



- 【P1】1層:堆積土(柱取跡)
- 【P2・6】1層:柱取跡 2層:面方埋土
- 【P3・7】1層:堆積土(柱取跡) 2層:面方埋土

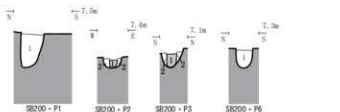
**【SB200 掘立柱建物跡】**

- 【建物間数】 桁行3間×梁行1間/南北棟建物跡
- 【建物方向】 N-10°-W
- 【構成Pit】 P1～6
- 【平面規模】 桁行8.9m×梁行3.9m (身舎面積34.7㎡)
- 【柱間寸法】 桁行2.1～3.4m・梁行3.9m
- 【出土遺物】 なし
- 【重複】 SB200→PT62



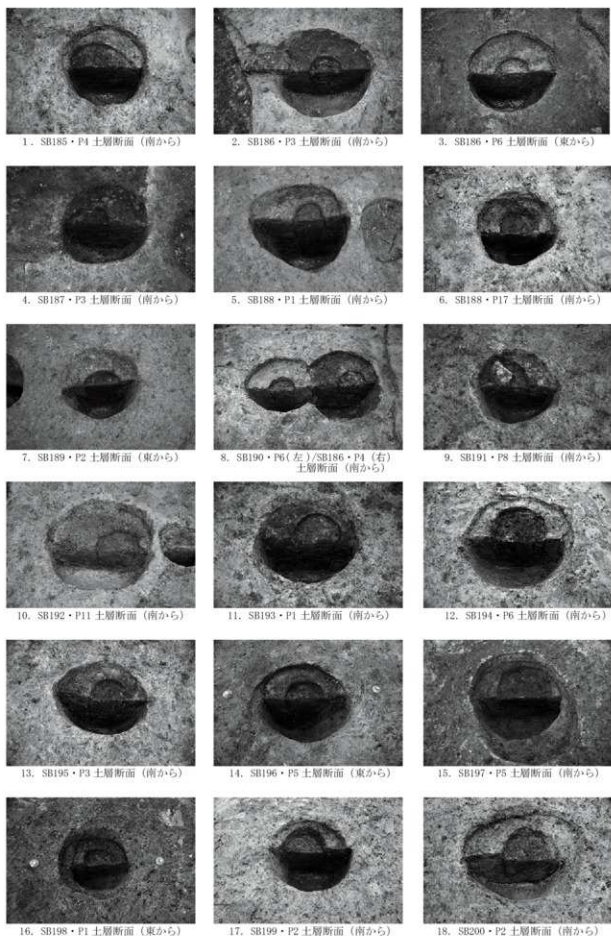
**SB200 掘立柱建物跡 構成Pit属性表**

遺構番号	柱穴・ピット掘方 (柱跡・短跡・長跡・面方埋土: ㎡)					柱 遺 跡			注 (遺構・出土遺物等)	
	平面形	長	短	残存	埋土	平面形	長跡	短跡		
P1	円形	28	23	6.4	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡、PT62土台
P2	楕円形	25	20	6.9	掘穴	楕円形	12	11	23.5	---
P3	楕円形	22	19	6.7	掘穴	楕円形	13	13	23.5	---
P4	楕円形	19	12	6.7	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡
P5	楕円形	30	25	6.4	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡
P6	円形	29	22	6.9	掘穴・2層埋土	---	---	---	---	柱取跡



- 【P1・6】1層:堆積土(柱取跡)
- 【P2・3】1層:柱取跡 2層:面方埋土

第 23 図 SB198～200 掘立柱建物跡



第24図 北経塚遺跡G区 掘立柱建物跡 主要柱穴土層断面 (写真図版)

### (3) その他の柱穴・ピット (第10図、第7・8表)

前項で示したとおり、今回確認した柱穴・ピット 568 個のうち、建物 (16 棟) を構成する柱穴として認定できたものは 191 個であった。その他の残された 377 個の柱穴・ピットについては、その特徴・位置関係から、本来は建物や柱穴列・その他の建築物を構成する柱穴であったと考えられる。

本項では、建物として認定できなかった柱穴・ピットについて若干の記載を行う。なお、柱穴・ピット個別の情報は、今後ともさらなる検討が加えられるよう、平面図を第 10-1~10-6 図、規模・堆積土・出土遺物などのデータを第 8-1~8-4 表に掲載した。

#### 【その他の柱穴・ピットの特徴】

柱穴・ピットは、基本層Ⅶ層において確認した。その分布範囲は、掘立柱建物跡の分布域とほぼ重なる。検出した柱穴・ピットの規模・平面形は、長軸 5~65cm、短軸 5~50cm の円形・楕円形・隅丸方形を呈し、残存深は 3~60cm ほどである。検出した 377 個のうち、97 個で直径 8~28cm の円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。全体として、今回確認した柱穴・ピットは、平面形が円形・楕円形、掘方規模が長軸 20~30cm 前後、柱痕跡が 15cm 前後のものが主体といえる。

#### 【出土遺物】

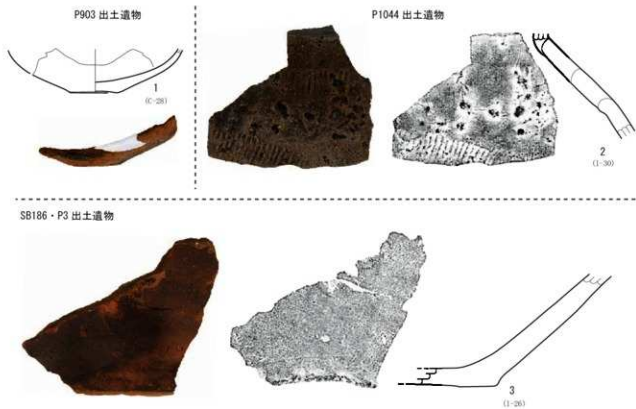
柱穴・ピットからは、第 7 表のとおり、土師器 14 点 (160g)・須恵器 1 点 (20g)・かわらけ 3 点 (15g)・中世陶器 1 点 (275g)・石器 2 点 (8g) が出土した。このうち、図示できたものは、P903 出土の土師器鉢 1 点 (第 25 図 1)、P1044 出土の中世陶器壺または甕の破片 1 点 (第 25 図 2) である。

第 7 表 その他の柱穴・ピット出土遺物一覧

遺構名	出土層位	種別	器種	点数	重量(g)
P772	柱痕跡	土師器	甕	1	20
P941	1層	土師器	甕	1	5
P955	掘方埋土	土師器	甕	1	5
P978	1層	かわらけ	皿	1	5
P982	掘方埋土	土師器	杯	1	10
P985	1層	石器	削片	1	2
P991	掘方埋土	須恵器	甕?	1	20
	堆積土	石器	削片	1	6
P903	1層	土師器	鉢	1	70
P909	1層	土師器	甕	1	5
P928	1層	土師器	杯	1	5
P931	1層	土師器	甕	2	15
P963	1層	土師器	甕	1	5
P994	掘方埋土	土師器	杯	1	5
P995	1層	土師器	甕	1	5
P1008	柱痕跡	かわらけ	皿	1	5
P1027	掘方埋土	土師器	甕	1	5
P1028	掘方埋土	土師器	杯	1	5
P1044	柱痕跡	中世陶器	壺・甕	1	275
P1089	柱痕跡	かわらけ	皿	1	5



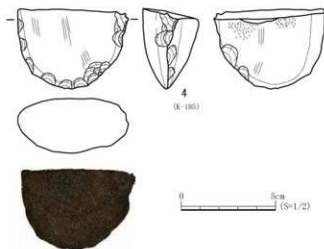
北経塚遺跡G区 調査区遠景 (東から)



SB186・P3 出土遺物



SB186・P18 出土遺物



SB190・P4 出土遺物



SB195・P3 出土遺物



※土器類 (1～3・5・6) : S=1/3 ※石器類 (4) : S=1/2

No.	層	種類	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→その他の特徴の順に記載】	登録
1	P903 1層	土器類	鉢	体部 ～底部	内外面：磨鉢のため不明。色調：外面・にぶい褐色(T.59K5/4)、内面・明赤褐色(2.5YR5/6)。法量：直径(4.0)cm・残存高3.5cm・器厚0.3～1.1cm	C-28
2	P1044 柱廊跡	中世陶器	雙耳甕	胴部	外面：ナズ・押印・自然釉、内面：胎オサエ・ナズ。色調：外面・黄灰色(2.5Y4/7)、内面・灰色(N5/0)。法量：器厚1.3～1.4cm、産地：産地	I-30
3	SB186・P3 掘方壇上	中世陶器	甕	体部 ～底部	外面：ナズ・ナズ、内面：胎オサエ・ナズ。色調：外面・焼灰色(7.5YR4/1)/焼灰色(10YR4/1)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)/焼灰色(N3/0)。法量：残存高(9.0)cm・器厚1.3～1.8cm、産地：在地	I-26
4	SB186・P18 掘方壇上	石器	磨製石斧	刃部	石材：砂岩。法量：長さ4.25cm/幅3.85cm/厚3.2.95cm/重量84.4g	K-185
5	SB190・P4 柱状取次(1層)	中世陶器	甕	体部	外面：ナズ・自然釉、内面：ナズ。色調：外面・焼灰色(5YR5/7)、内面・焼灰色(10YR5/1)。法量：器厚0.8～0.9cm、産地：衣瀬戸	I-27
6	SB195・P3 掘方壇上	かわらけ	皿	体部 ～底部	内外面：ロクロナズ。色調：内外面・にぶい褐色(T.59K5/4)。法量：直径(5.0)cm・残存高0.8cm・器厚0.4～0.5cm	C-25

第25図 ビット(P904・1044)・掘立柱建物跡(SB186・190・195)出土遺物





第8-3表 北経塚遺跡跡区 ピット(柱穴・小穴) 属性表(3) ※SBを構成するもの以外 P930~1022

発掘 位置	形状	用途	柱穴				用途	形状	用途	小穴				用途	形状	用途
			中径	高さ	埋土	埋土				中径	高さ	埋土	埋土			
P930	小穴	埋土	16	20	12	8.9	5%									
P931	小穴	埋土	15	23	12	8.8	5%									
P932	小穴	埋土	16	19	19	8.9	14%									
P933	小穴	埋土	20	30	20	8.7	14%									
P934	小穴	埋土	13	13	10	8.2	7%									
P935	小穴	埋土	20	30	13	8.9	14%									
P936	小穴	埋土	16	30	30	8.6	14%									
P937	小穴	埋土	16	20	16	8.6	13%									
P938	小穴	埋土	13	20	18	8.9	13%									
P939	小穴	埋土	16	20	18	8.9	13%									
P940	小穴	埋土	16	19	23	8.9	5%									
P941	小穴	埋土	16	19	27	7.6	2%									
P942	小穴	埋土	14	24	30	7.6	2%									
P943	小穴	埋土	16	20	1	7.1	1%									
P944	小穴	埋土	18	30	8.6	7.6	2%									
P945	小穴	埋土	12	13	19	7.6	5%									
P946	小穴	埋土	30	30	30	7.6	5%									
P947	小穴	埋土	30	30	30	7.6	5%									
P948	小穴	埋土	30	30	30	7.6	5%									
P949	小穴	埋土	30	30	30	7.6	5%									
P950	小穴	埋土	30	30	30	7.6	5%									
P951	小穴	埋土	30	30	30	7.6	5%									
P952	小穴	埋土	30	30	30	7.6	5%									
P953	小穴	埋土	30	30	30	7.6	5%									
P954	小穴	埋土	18	20	20	7.2	5%									
P955	小穴	埋土	18	20	20	7.2	5%									
P956	小穴	埋土	15	15	15	7.2	5%									
P957	小穴	埋土	15	15	15	7.2	5%									
P958	小穴	埋土	15	15	15	7.2	5%									
P959	小穴	埋土	15	15	15	7.2	5%									
P960	小穴	埋土	15	15	15	7.2	5%									
P961	小穴	埋土	15	15	15	7.2	5%									
P962	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P963	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P964	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P965	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P966	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P967	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P968	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P969	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P970	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P971	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P972	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P973	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P974	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P975	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P976	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P977	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P978	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P979	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P980	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P981	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P982	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P983	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P984	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P985	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P986	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P987	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P988	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P989	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P990	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P991	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P992	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P993	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P994	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P995	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P996	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P997	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P998	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P999	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									
P1000	小穴	埋土	30	30	30	7.2	5%									

●ピット(柱穴・小穴)簡型

**【柱穴型】**

① 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

② 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

③ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

④ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑤ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑥ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑦ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑧ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑨ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑩ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑪ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑫ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑬ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑭ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑮ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑯ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑰ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑱ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

⑳ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉑ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉒ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉓ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉔ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉕ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉖ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉗ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉘ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉙ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉚ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉛ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉜ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉝ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉞ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㉟ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊱ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊲ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊳ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊴ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊵ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊶ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊷ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊸ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊹ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊺ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊻ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊼ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊽ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊾ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

㊿ 柱穴が柱穴の  
底面に埋するもの

●土質  
 ■ シルト ①: 砂質シルト ②: 粘土質シルト

●埋入物  
 ■ 埋入物  
 a) 地面ブロック多く含む b) 地面ブロック含む c) 地面ブロック少量含む  
 ■ 地面ブロック多く含む d) 地面ブロック少量含む e) 地面ブロック含む  
 ■ 地面ブロック少量含む f) その他(のり) g) 記号以外の埋入物  
 ※埋入物については発掘時に埋入物と認められたものを記載する。埋入物の種類については記載を省略した。  
 ※埋入物一式片 埋入物ブロック+埋入物 埋入物ブロック+埋入物  
 ※埋入物一式片 埋入物ブロック+埋入物 埋入物ブロック+埋入物  
 ※埋入物一式片 埋入物ブロック+埋入物 埋入物ブロック+埋入物

●土質  
 ■ シルト ①: 砂質シルト ②: 粘土質シルト

●埋入物  
 ■ 埋入物  
 a) 地面ブロック多く含む b) 地面ブロック含む c) 地面ブロック少量含む  
 ■ 地面ブロック多く含む d) 地面ブロック少量含む e) 地面ブロック含む  
 ■ 地面ブロック少量含む f) その他(のり) g) 記号以外の埋入物  
 ※埋入物については発掘時に埋入物と認められたものを記載する。埋入物の種類については記載を省略した。  
 ※埋入物一式片 埋入物ブロック+埋入物 埋入物ブロック+埋入物  
 ※埋入物一式片 埋入物ブロック+埋入物 埋入物ブロック+埋入物  
 ※埋入物一式片 埋入物ブロック+埋入物 埋入物ブロック+埋入物

●その他の記載事項

- ピット・小穴の形状  
 - (形状) は形状を示す
- ピット・小穴の形状の(埋土・埋入物)記載事項  
 - 記載の形状は「埋入物」を意味する  
 - 「埋土・埋入物」等の記載は「柱穴・小穴」の埋土埋入物が埋入物と認められたものを示す  
 - 「柱穴」は柱穴が柱穴の埋土・埋入物と「柱穴」は柱穴が柱穴の埋土・埋入物  
 - 「埋入物」は埋入物が埋入物の埋土・埋入物と「埋入物」は埋入物が埋入物の埋土・埋入物
- 埋入物の記載事項  
 - 埋入物(柱穴が埋入物と認められたもの)・埋入物(柱穴が埋入物と認められたもの)  
 - ②の柱穴・埋入物の記載





## 2. 溝跡・井戸跡・土坑

今回の調査(G区)では、溝跡5条(SD139~142)、井戸跡1基(SE143)、土坑41基(SK144~184)を検出した(第26図)。遺構の重複関係・出土遺物の年代から、これらの遺構は縄文時代・古墳時代・古代・中世のものと考えられる。

なお、各遺構の特徴等については第9~11表に示したとおりである。

第9表 北経塚遺跡 G区 溝跡一覧 (SD138~142)

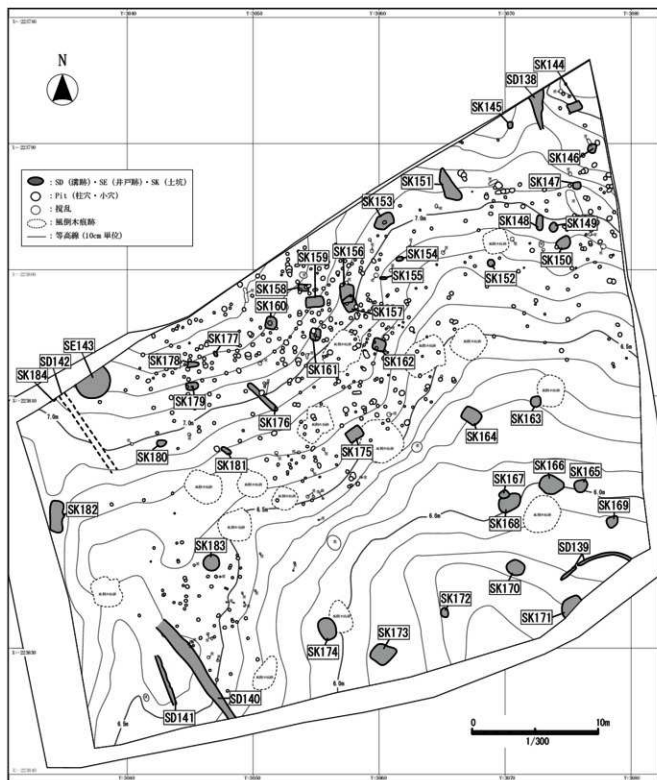
遺構No.	方向	幅広さ(m) Oは推定値	規模(cm)			断面形状	出土遺物	備考	図面No.
			上幅	下幅	深さ				
SD 138	南-北 (直線)	2.85	25~130	12~20	5~42	V字形	—	直線傾斜:北(高)一低(南)/調査区北に延びる	27
SD 139	東-西 (弧状)	6.15	20~22	11~14	5~10	U字形	—	直線傾斜:ほぼ平直/調査区南に延びる	27
SD 140	南-北 (直線)	9.32	56~118	38~72	22~23	逆台形	土師器・須恵器	直線傾斜:北(高)一低(南)/調査区南に延びる P1114・1116より新	28
SD 141	南-北 (直線)	4.09	31~34	13~22	3~10	U字形	土師器	直線傾斜:北(高)一低(南)	28
SD 142	南-北 (直線)	7.35	9~90	9~50	1~52	U字形	—	確認調査時検出(本調査時未掘)/調査区北西部部分のみ埋存	29

第10表 北経塚遺跡 G区 井戸跡一覧 (SE143)

遺構No.	平面形状	規模(m) Oは推定値	深さ(m)	断面形状	出土遺物	備考	図面No.
SE 143	円形?	2.80×1.80	1.68	逆台形	土師器・須恵器	階層土1層:人為堆積/堆積土2~3層:自然堆積/調査区北側に延びる	30

第11表 北経塚遺跡 G区 土坑一覧 (SK144~184)

遺構No.	平面形状	規模(m) Oは推定値	深さ(cm)	断面形状	出土遺物	備考	図面No.
SK 144	隅丸方形	1.05×0.67	5	直状	—	P130より古	31
SK 145	隅丸方形	0.49×0.38	8	U字形	—	—	31
SK 146	隅丸方形	0.73×0.62	30	不整形	—	—	31
SK 147	円形	0.62×0.55	12	U字形	—	—	31
SK 148	隅丸方形	1.19×0.50	8	直状	—	—	31
SK 149	円形	0.74×0.64	13	直状	—	—	31
SK 150	円形	1.12×0.88	22	直状	—	SR199・P8より古	31
SK 151	不整形	2.70×0.99	61	U字形	—	—	32
SK 152	円形	0.56×0.54	4	直状	—	—	32
SK 153	不整形	1.65×1.03	45	不整形	—	P1122より古	32
SK 154	楕円形	0.58×0.33	22	逆台形	—	—	32
SK 155	長楕円形	0.53×0.15	15	U字形	—	—	32
SK 156	隅丸方形	1.53×1.07	30	不整形	土師器	P930・963、SR189・P9より古/SK157より新	32
SK 157	隅丸方形	1.21×0.95	50	不整形	—	階層土層の為人為堆積:SR187・P3、SR189・P8、SK156、P930より古	33
SK 158	隅丸方形	0.84×0.52	10	直状	—	人為堆積/P950・1019・1020、SR190・P3より古	33
SK 159	隅丸方形	1.44×0.80	15	直状	中世陶器 かわらけ	人為堆積	33
SK 160	隅丸方形	0.98×0.87	6	直状	—	人為堆積/SR188・P8、SR185・P5より古	34
SK 161	隅丸方形	0.97×0.80	10	直状	—	人為堆積/P960・1015より古/P950より新	34
SK 162	隅丸方形	1.00×0.92	10	直状	中世陶器	人為堆積/P919、SR190・P7、SR192・P8より新	34
SK 163	円形	0.81×0.80	50	U字形	—	—	35
SK 164	隅丸方形	1.47×1.14	52	U字形	土師器	—	35
SK 165	楕円形	1.02×0.95	55	逆台形	—	—	35
SK 166	楕円形	1.71×1.47	70	漏斗形	土師器・須恵器 中世陶器	—	36
SK 167	不整形	0.74×0.62	42	U字形	—	SK168より新	37
SK 168	楕円形	1.84×1.37	5	直状	土師器	人為堆積/SK167より古	37
SK 169	不整形	0.94×0.77	8	直状	—	—	37
SK 170	楕円形	1.41×1.16	62	漏斗形	中世陶器	—	38
SK 171	楕円形?	1.96×0.95	40	U字形	—	—	38
SK 172	楕円形	0.73×0.57	20	U字形	—	—	38
SK 173	不整形	2.09×1.66	11	直状	中世陶器	—	39・40
SK 174	楕円形	1.74×1.32	25	直状	青磁・漆器	—	39・40
SK 175	隅丸長方形	1.28×0.90	27	方形	—	本段地成土塊	41
SK 176	直状	3.08×0.36	49	漏斗形	—	落土/穴:SR192・P3より古	41
SK 177	楕円形	0.42×0.21	5	直状	—	—	42
SK 178	不整形	0.85×0.36	20	方形	—	SR191・P5より新	42
SK 179	楕円形	0.97×0.58	10	直状	—	人為堆積/P1076・1077より古	42
SK 180	楕円形	0.77×0.50	20	U字形	—	—	43
SK 181	楕円形	0.84×0.33	22	U字形	土師器	—	43
SK 182	不整形	2.47×1.04	44	不整形	—	人為堆積/自然堆積/直線区固有	43
SK 183	円形	1.27×1.24	54	U字形	土師器・須恵器	—	44
SK 184	円形?	0.56×0.7	48	不整形	—	調査区北西部のみで確認	44



第 26 図 北経塚遺跡G区 SD (溝跡)・SE (井戸跡)・SK (土坑) 遺構配置図

(1) 溝跡

【SD138 溝跡】(第27図)

【位置】 G区北西部の標高7.3~7.4mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 南-北方向に延びる溝で、遺構北側は調査区外に延びる。溝の南側は標高7.3m付近で途切れる。検出長2.85m、上幅25~130cm、下幅12~20cm、深さ5~42cm、底面の標高は溝の北側が高く、南側が低い。溝の断面形はV字形である。

【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

【SD139 溝跡】(第27図)

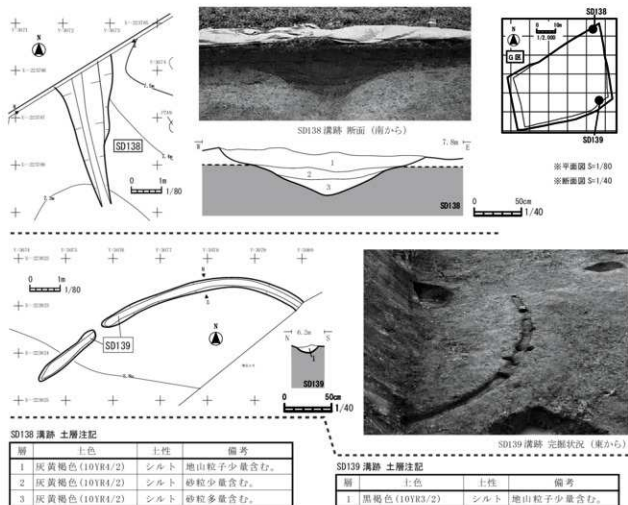
【位置】 G区南東部の標高5.8mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 東-西方向に弧状に延びる溝で、遺構南側は調査区外に延びる。溝跡は西側付近で一度途切れる。検出長6.15m、上幅20~22cm、下幅11~14cm、深さ5~10cm、底面の標高はほぼ平坦である。溝の断面形はU字形である。

【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。



第27図 SD138・139 溝跡

## 【SD140 溝跡】(第28図)

【位置】 G区南西部の標高6.3~6.6mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。

【重複】 P1114・1116と重複し、これらより新しい(P1114・1116→SD140)。

【規模・形状】 南-北方向に延びる溝で、遺構南側は調査区外に延びる。溝の北側は標高6.6m付近で途切れる。検出長9.32m、上幅56~118cm、下幅38~72cm、深さ22~23cm、底面の標高は溝の北側が高く、南側が低い。溝の断面形は逆台形である。

【堆積土】 4層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土1層から非ロクロ成形の甕破片1点(5g)、須恵器壺破片1点(55g)が出土した。いずれも小破片のため、図示できたものはない。これらの遺物は、出土状況等から本遺構に伴うものでなく、周辺から流入したものとみられる。

## 【SD141 溝跡】(第28図)

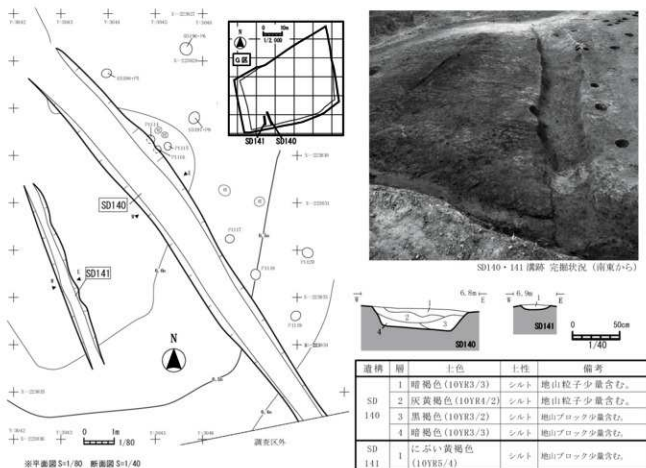
【位置】 G区南西部の標高6.6mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 南-北方向に延びる溝で、北側・南側ともに途中で途切れる。検出長4.09m、上幅31~34cm、下幅13~22cm、深さ3~10cm、底面の標高は溝の北側が高く、南側が低い。溝の断面形はU字形である。

【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土1層からロクロ成形の土師器坏破片1点(10g)、甕破片2点(5g)が出土した。このうち、土師器坏は赤焼土器である。いずれも小破片のため、図示できたものはない。これらの遺物は、出土層位・出土状況等から、本遺構に伴うものでなく、周辺から流入したものとみられる。



第28図 SD140・141 溝跡

**[SD142 溝跡]** (第29図)

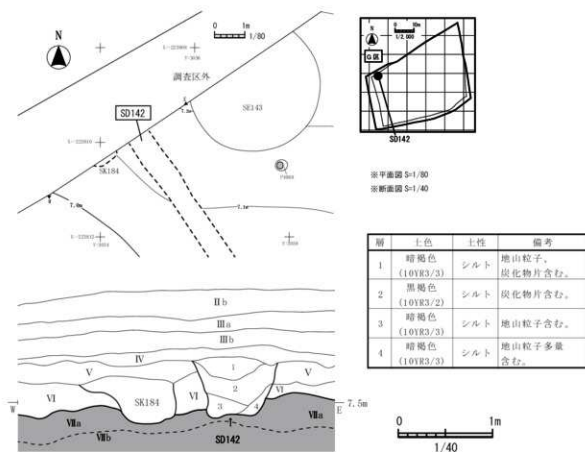
**[位置]** G区北西部の標高6.9～7.1mの平坦面で確認した。検出面はVIIa層である。SD142は、調査区北側に延びており、調査区壁際断面の観察から、遺構の掘り込み面は基本層V層上面であることが確認されている。

**[重複]** なし。

**[規模・形状]** 南-北方向に延びる溝で、遺構北側は調査区外に延びる。SD142は確認調査時のトレンチ9 (T-9) において確認していた溝跡であるが、その後の本調査表土掘削時に、誤って溝跡の上部を削平してしまった遺構である。したがって、本調査においては、所々わずかに残存していた溝底面付近の掘方を確認し、遺構の範囲を推定した。また、溝跡掘方の深さ・堆積状況については、調査区北壁断面で確認した。溝の規模は、推定検出長7.35m、上幅90cm前後、下幅50cm前後、深さ1～52cmである。溝の断面形は調査区北壁でU字形である。

**[堆積土]** 4層確認した。いずれも自然堆積層である。

**[出土遺物]** なし。



第29図 SD142 溝跡

## (2) 井戸跡

## 【SE143 井戸跡】(第30図)

【位置】 G区北西部の標高7.2mの平坦面で確認した。検出面はⅧa層である。SE143は、その一部が調査区北側に延びており、調査区壁際断面の観察から、遺構の掘り込み面は基本層Ⅴ層上面であることが確認されている。

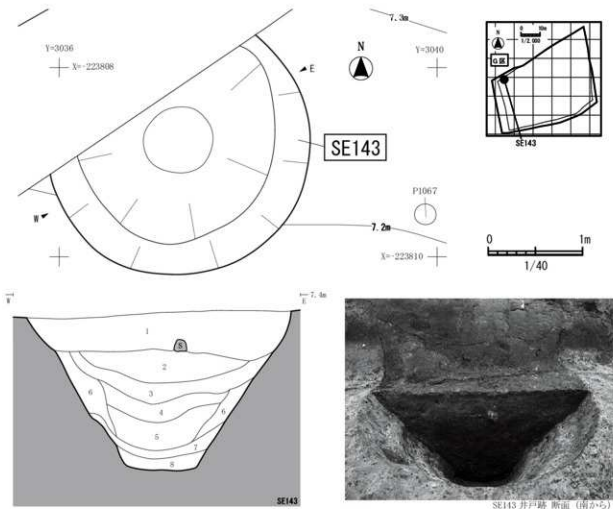
【重複】 なし。

【規模・形状】 素掘りの井戸で、遺構北側は調査区外に延びる。規模は、長軸2.80mの円形を呈するとみられ、深さは1.68mである。底面は平坦で、長軸方向の断面形は逆台形である。

【堆積土】 8層確認した。1層は人為堆積層(井戸埋戻土)、2～8層は自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土1層からロクロ成形の土師器甕破片1点(5g)、堆積土2層から須恵器甕破片2点(95g)が出土した。いずれも小破片のため、図示できたものはない。これらの遺物は、出土状況等から本遺構に伴うものでなく、周辺から流入したものとみられる。

【その他】 堆積土5層(自然堆積層)に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は1478～1625cal AD(室町時代後半から江戸時代初頭頃)であった。



層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片、籾含む。井戸埋戻土。
2	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山ブロック少量、地山粒子・炭化物片微量含む。
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック、炭化物片少量含む。
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒子少量含む。
5	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山粒子・炭化物片少量、木片含む。
6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子多量含む。
7	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。
8	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山粒子含む。

第30図 SE143 井戸跡

### (3) 土坑

#### 【SK144 土坑】(第31・45図)

- 【位置】 G区北東部の標高7.5mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。  
 【重複】 P750と重複し、これより古い(SK144→P750)。  
 【規模・形状】 105cm×67cmの隅丸長方形。深さ5cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。  
 【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。

#### 【SK145 土坑】(第31・45図)

- 【位置】 G区北東部の標高7.4mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 49cm×38cmの隅丸方形。深さ8cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。  
 【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。

#### 【SK146 土坑】(第31図)

- 【位置】 G区北東部の標高7.3mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 73cm×62cmの隅丸方形。深さ30cm。底面は平坦で、遺構西側がさらに深く掘り込まれる。断面形は不整形である。  
 【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。

#### 【SK147 土坑】(第31図)

- 【位置】 G区北東部の標高7.1mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 62cm×55cmの円形。深さ12cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。  
 【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。

#### 【SK148 土坑】(第31・45図)

- 【位置】 G区北東部の標高6.9mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 119cm×50cmの隅丸長方形。深さ8cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。  
 【堆積土】 1層確認した。自然堆積層で、炭化物片を多く含むが、焼面等は確認されていない。  
 【出土遺物】 なし。

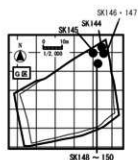
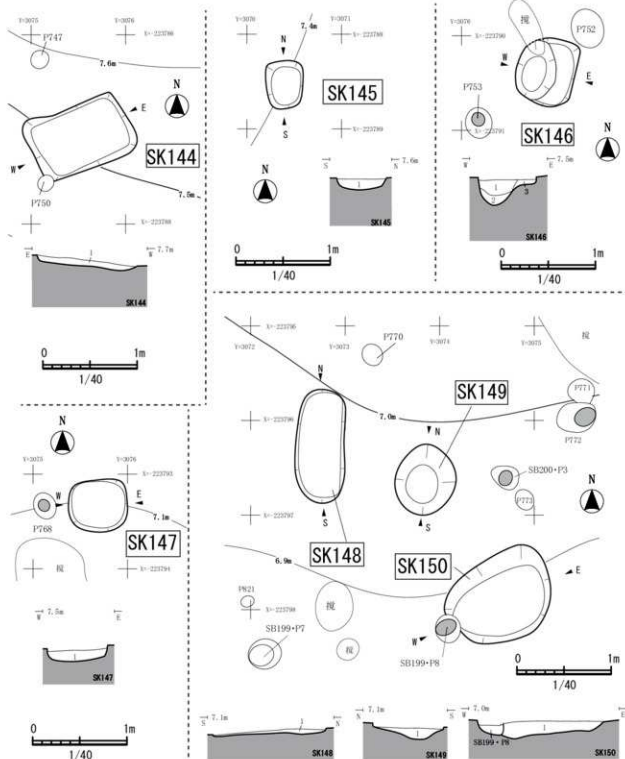
#### 【SK149 土坑】(第31図)

- 【位置】 G区北東部の標高6.9mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 74cm×64cmの円形。深さ13cm。底面は平坦で、中央がやや凹む。断面形は皿状である。  
 【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。

#### 【SK150 土坑】(第31図)

- 【位置】 G区北東部の標高6.9mの平坦面で確認した。検出面はⅧb層である。  
 【重複】 SB199・P8と重複し、これより古い(SK150→SB199・P8)。  
 【規模・形状】 112cm×88cmの円形。深さ22cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。  
 【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。





【SK144～150 土坑 土層注記】

遺構	層	土色	土性	備考
SK144	1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) ブロック含む。
SK145	1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	砂粒多量含む。
	2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒子含む。
SK146	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山ブロック多く含む。
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山粒子含む。
SK147	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック・黒色土ブロック含む。
SK148	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物片多く・地山ブロック含む。
SK149	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒子含む。
SK150	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック多量含む。

第31図 SK144～150 土坑

**【SK151 土坑】** (第 32・45 図)

【位置】 G 区北東部の標高 7.1m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 270cm×99cm の不整形。深さ 61cm。底面には凹凸があり、短軸方向の断面形は U 字形である。

【堆積土】 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

**【SK152 土坑】** (第 32 図)

【位置】 G 区北東部の標高 6.7m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 56cm×54cm の円形。深さ 4cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 1 層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

**【SK153 土坑】** (第 32・45 図)

【位置】 G 区北端やや中央付近の標高 7.0m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 P1122 と重複し、これより古い (SK153→P1122)。

【規模・形状】 165cm×103cm の不整形。深さ 45cm。底面は平坦で、断面形は不整形である。

【堆積土】 4 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

**【SK154 土坑】** (第 32 図)

【位置】 G 区北側やや中央付近の標高 6.9m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 58cm×33cm の楕円形。深さ 22cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

【堆積土】 1 層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

**【SK155 土坑】** (第 32 図)

【位置】 G 区北側やや中央付近の標高 6.9m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 53cm×15cm の長楕円形。深さ 15cm。底面は平坦で、断面形は U 字形である。

【堆積土】 1 層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

**【SK156 土坑】** (第 32 図)

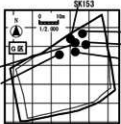
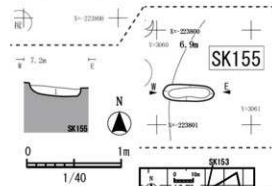
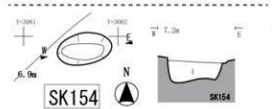
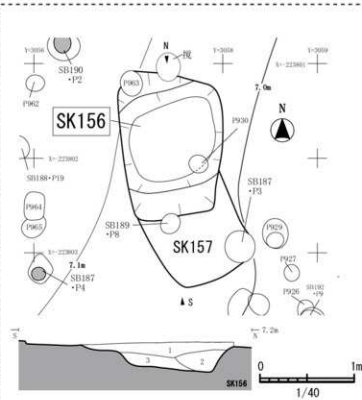
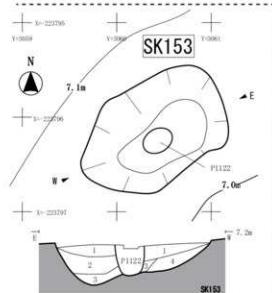
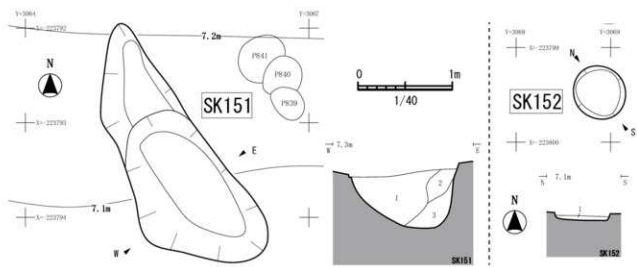
【位置】 G 区北側中央付近の標高 7.1m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 SK157、SB189・P8、P930・963 と重複し、SK157 より新しく、SB189・P8、P930・963 より古い (SK157→SK156→SB189・P8、P930・963)。

【規模・形状】 153cm×107cm の隅丸長方形。深さ 30cm。底面は平坦で、断面形は不整形である。

【堆積土】 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土 1 層から非クロコ成形の土師器甕破片 1 点 (10g) が出土した。小破片のため、図示できたものはない。出土状況等から遺構に伴うものでなく、周辺から流入したものとみられる。



【SK151～156土坑 土層注記】

遺構	層	土色	土性	備考
SK151	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子少量含む。
	3	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	地山粒子少量含む。
SK152	1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山粒子多く含む。
SK153	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物片含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。
	3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	黒褐色土ブロック含む。
	4	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山粒子少量含む。
SK154	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック含む。
SK155	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック含む。
SK156	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子含む。
	2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロック多量含む。
	3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロック含む。

第32図 SK151～156 土坑

**【SK157 土坑】** (第33図)

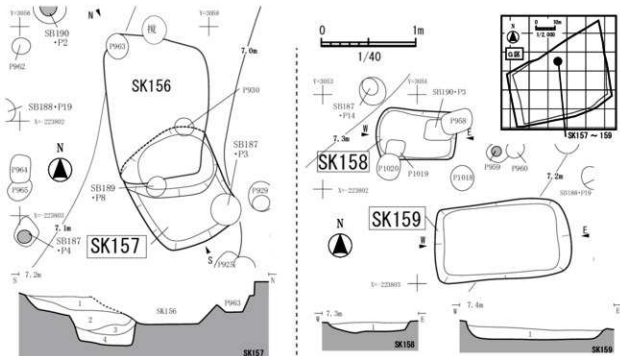
- 【位置】 G区北側中央付近の標高7.0mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。  
 【重複】 SK156、SB187・P3、SB189・P8、P930と重複し、これらより古い(SK157→SK156、SB187・P3、SB189・P8、P930)。  
 【規模・形状】 121cm×95cmの隅丸長方形。深さ50cm。底面は平坦で、断面形は不整形である。  
 【堆積土】 4層確認した。1層が人為堆積層、2～4層が自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。

**【SK158 土坑】** (第33図)

- 【位置】 G区北側中央付近の標高7.2mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。  
 【重複】 SB190・P3、P958・1019・1020と重複し、これらより古い(SK158→SB190・P3、P958・1019・1020)。  
 【規模・形状】 84cm×52cmの隅丸長方形。深さ10cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。  
 【堆積土】 1層確認した。地山ブロックを多量含む人為堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。

**【SK159 土坑】** (第33・47図)

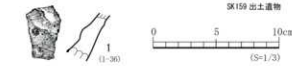
- 【位置】 G区北側中央付近の標高7.2mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 144cm×80cmの隅丸長方形。深さ15cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。  
 【堆積土】 1層確認した。地山ブロックを多量含む人為堆積層である。  
 【出土遺物】 堆積土1層から中世陶器破片(第33図1)1点(20g)、かわらけ皿破片2点(10g)が出土した。かわらけは小破片のため、図示できなかった。



**【SK157～159 土坑 土層記述】**

遺構	層	土色	土性	備考
SK157	1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック多量含む。
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を含む。
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック多量含む。
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	砂粒多量含む。
SK158	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック多く、炭化物片少量含む。
SK159	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック多く、炭化物片少量含む。

SK159 出土遺物



No.	層	種別	器種	残存	特徴	登録
1	SK159 1層	中世 陶器	甕	底部	外面：タマリ、色調：外面・暗赤灰色(10R4/1)、内面・灰色(N4/0)、装束：器厚0.7～1.6cm、産地：不明	1-36

第33図 SK157～159 土坑

**【SK160 土坑】** (第 34 図)

【位置】 G 区北側中央付近の標高 7.3m の平坦面で確認した。検出面はⅧb 層である。

【重複】 SB185・P5、SB188・P8 と重複し、これらより古い (SK160→SB185・P5、SB188・P8)。

【規模・形状】 98cm×87cm の隅丸方形。深さ 6cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 1 層確認した。地山ブロックを多量含む人為堆積層である。

【出土遺物】 なし。

**【SK161 土坑】** (第 34 図)

【位置】 G 区北側中央付近の標高 7.1m の平坦面で確認した。検出面はⅧb 層である。

【重複】 P969・970・1015 と重複し、P969・1015 より古く、P970 より新しい (P970→SK161→P969・1015)。

【規模・形状】 97cm×80cm の隅丸方形。深さ 10cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 1 層確認した。地山ブロックを多量含む人為堆積層である。

【出土遺物】 なし。

**【SK162 土坑】** (第 34・45・47 図)

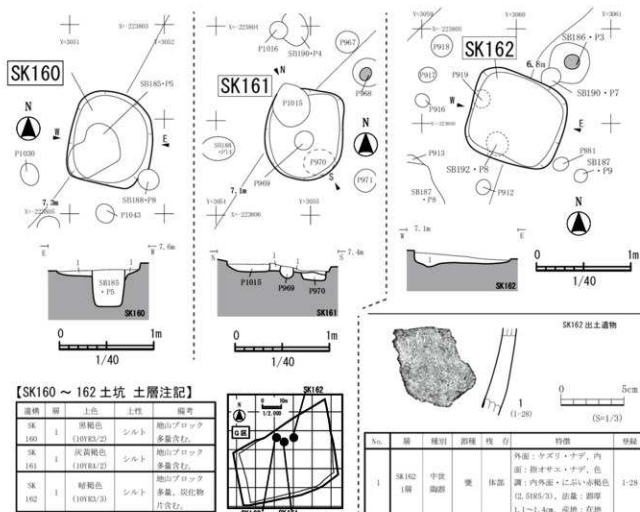
【位置】 G 区北側中央付近の標高 6.8m の平坦面で確認した。検出面はⅧb 層である。

【重複】 SB190・P7、SB192・P8、P919 と重複し、これらより新しい (SB190・P7、SB192・P8、P919→SK162)。

【規模・形状】 100cm×92cm の隅丸方形。深さ 10cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 1 層確認した。地山ブロックを多量含む人為堆積層である。

【出土遺物】 堆積土 1 層から中世陶器破片 (第 34 図 1) 1 点 (80g) が出土した。



第34図 SK160~162 土坑

**【SK163 土坑】** (第 35・45 図)

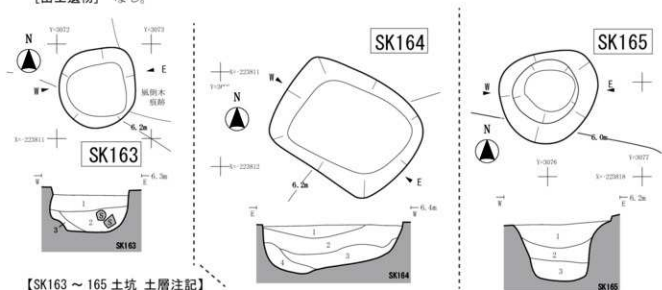
- 【位置】 G 区東側中央付近の標高 6.2m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 81cm×80cm の円形。深さ 50cm。底面は平坦で、断面形は U 字形である。  
 【堆積土】 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。

**【SK164 土坑】** (第 35・45・47 図)

- 【位置】 G 区東側中央付近の標高 6.2m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 147cm×114cm の隅丸方形。深さ 52cm。底面は平坦で、断面形は U 字形である。  
 【堆積土】 4 層確認した。いずれも自然堆積層である。  
 【出土遺物】 堆積土 1 層から非ロクロ成形の土師器甕破片 4 点 (15g)、堆積土 4 層から非ロクロ成形の土師器・器台脚部破片 1 点 (第 35 図 1:195g) が出土した。器台は、出土状況から SK164 土坑に伴う遺物とみられる。

**【SK165 土坑】** (第 35・46 図)

- 【位置】 G 区南東部の標高 6.0m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。  
 【重複】 なし。  
 【規模・形状】 102cm×95cm の楕円形。深さ 55cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。  
 【堆積土】 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。  
 【出土遺物】 なし。



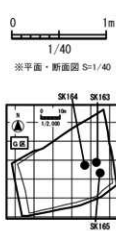
**【SK163～165 土坑 土層注記】**

遺坑	層	土色	土性	備考
SK 163	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子・礫を含む。
	3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	砂粒を含む。
SK 164	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒子を含む。
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	砂粒を含む。
	4	にじみ黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック多量含む。
SK 165	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	砂粒を含む。
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	砂粒多量含む。

SK164 出土遺物

0 5cm (S=1/3) (C=20)

No.	層	種別	器種	残存	特徴	登録
1	SK 164 (4層)	土器	器台脚部	破片	非ロクロ成形の土師器・器台脚部破片。外縁・へらミヨキワ・非ロクロ成形。色黄・内面・凹溝。土色：内面・凹溝に黄褐色 (10YR6/1)、土色：脚部縁部 9.3cm・残存高 9.3cm・厚さ 0.3~1.5cm。台底欠損。脚部黄褐色。同層 3 点遺物。	C-20



第35図 SK163～165 土坑

**【SK166 土坑】** (第 36・46・47 図)

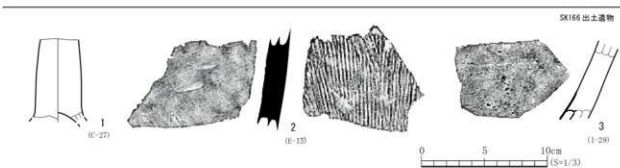
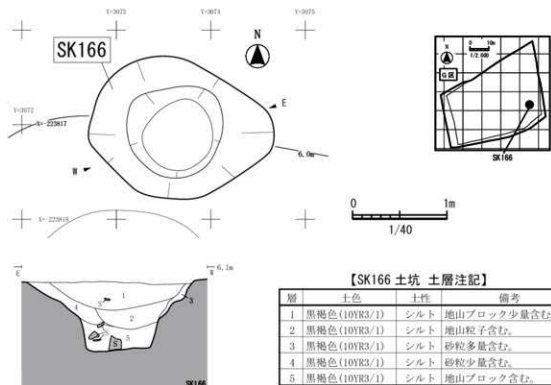
【位置】 G区南東部の標高 6.0m の平坦面で確認した。検出面はVIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 171cm×147cm の楕円形。深さ 70cm。底面は平坦で、断面形は漏斗形である。

【堆積土】 5 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土 1 層から土師器高坏脚部破片 (第 36 図 1) 1 点 (115g)、須恵器甕破片 (第 36 図 2) 1 点 (175g)、中世陶器甕破片 (第 36 図 3) 1 点 (145g) が出土した。



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→重量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK166 1層	土師器	高坏	脚部	内外面：割破のため不明。色調：外面・にぶい褐色(5YR6/3)、内面・灰褐色(7.5YR6/2)。重量：残存高6.6cm、断面厚0.8~2.5cm、坏部・脚部欠損	C-27
2	SK166 1層	須恵器	甕	体部	外面：平行タタキ。内面：当て具痕→ナデ。色調：内外面・黒灰色(10YR3/1)。重量：胴厚1.5~1.6cm	E-13
3	SK166 1層	中世陶器	甕	体部	内外面：ナデ。色調：内外面・黒灰色(7.5YR4/1)。重量：胴厚1.6~1.9cm、底施：白石灰	I-29

第36図 SK166 土坑

【SK167 土坑】 (第 37 図)

【位置】 G 区南東部の標高 6.0m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 SK168 と重複し、これより新しい (SK168→SK167)。

【規模・形状】 74cm×62cm の不整形。深さ 42cm。底面は平坦で、断面形は U 字形である。

【堆積土】 4 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

【SK168 土坑】 (第 37 図)

【位置】 G 区南東部の標高 6.0m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 SK167 と重複し、これより古い (SK168→SK167)。

【規模・形状】 184cm×137cm の楕円形。深さ 5cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 1 層確認した。地山ブロックを多量含む人為堆積層である。

【出土遺物】 1 層から土師器破片 1 点 (5g) が出土した。小破片のため、図示できたものはない。

【SK169 土坑】 (第 37 図)

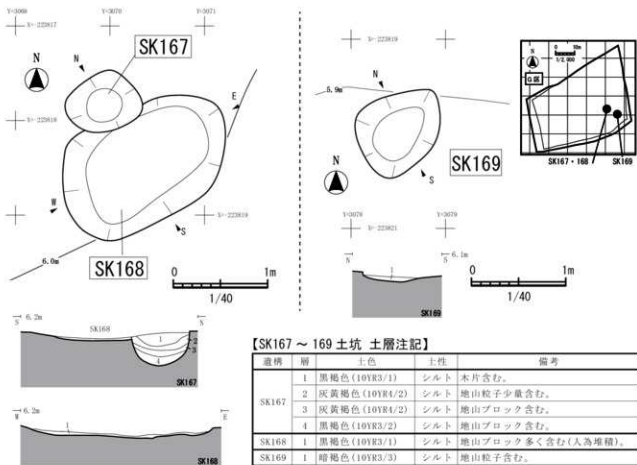
【位置】 G 区南東部の標高 5.9m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 94cm×77cm の不整形。深さ 8cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 1 層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。



第37図 SK167～169 土坑



【SK170 土坑】(第38・46・47図)

【位置】 G区南東部の標高5.7mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 141cm×116cmの楕円形。深さ62cm。底面は平坦で、断面形は漏斗形である。

【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土1層から中世陶器破片(第38図1)1点(180g)が出土した。

【SK171 土坑】(第38図)

【位置】 G区南東部の標高5.7mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 196cm×95cm以上で、遺構南側は調査区外に延びる。平面形は楕円形を呈するとみられる。深さ40cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】 4層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

【SK172 土坑】(第38図)

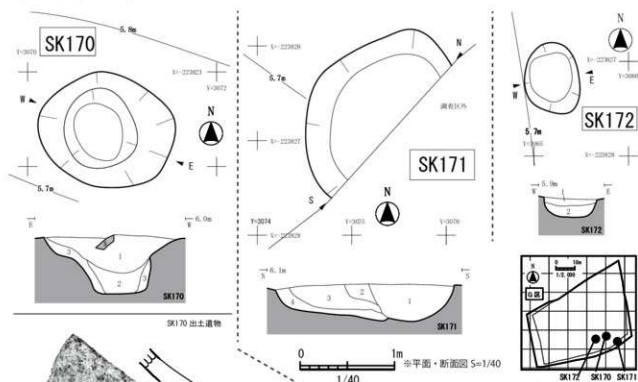
【位置】 G区南端中央部の標高5.7mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 73cm×57cmの楕円形。深さ20cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】 2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。



【SK170～172 土坑 土層注記】

遺物	層	土色	土性	備考
SK 170	1	灰黄褐色(10B4/2)	シルト	地山ブロック・雜含む。
	2	灰黄褐色(10B4/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
	3	灰黄褐色(10B4/2)	シルト	砂粒多量含む。
SK 171	1	黒褐色(10B3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
	2	黄褐色(10B5/6)	シルト	地山砂子少量含む。
	3	灰褐色(7.5B3/2)	シルト	地山ブロック含む。
SK 172	1	灰黄褐色(10B3/2)	シルト	砂粒多量含む。
	2	黒褐色(10B3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
	3	黄褐色(10B3/2)	シルト	灰化物質少量含む。

No.	層	種別	器種	残存	特徴	登録
1	SK170 1層	中世 陶器	壺	残部	外面：ナズ・自然釉。内面：ナズ。色調：外面・黄灰色(2.5B6/1)。内面・赤灰色(2.5B4/1)。流量・器厚1.3～1.4cm。底地：白石英	1-37

第38図 SK170～172 土坑

【SK173 土坑】 (第 39・40・46・47 図)

【位置】 G 区南端中央部の標高 5.9m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 209cm×166cm の不整形。深さ 11cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 1 層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土 1 層から中世陶器鉢 2 個体 (第 40 図 1: 2070g、第 40 図 2: 1055g)、甍破片 2 点 (1245g) (第 40 図 3: 930g、第 40 図 4: 315g) が出土した。これらは、土坑中央部の堆積土 1 層上面でまとまって出土しており、遺構に伴う遺物と判断される。

【SK174 土坑】 (第 39・40・46・47 図)

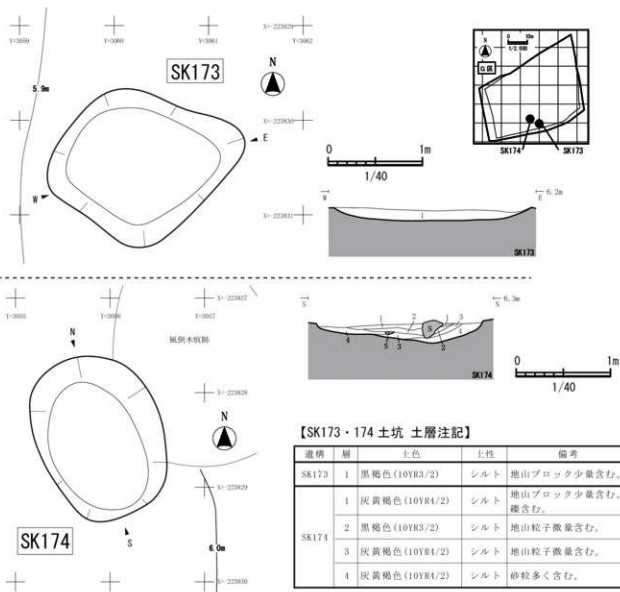
【位置】 G 区南端中央部の標高 6.0m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

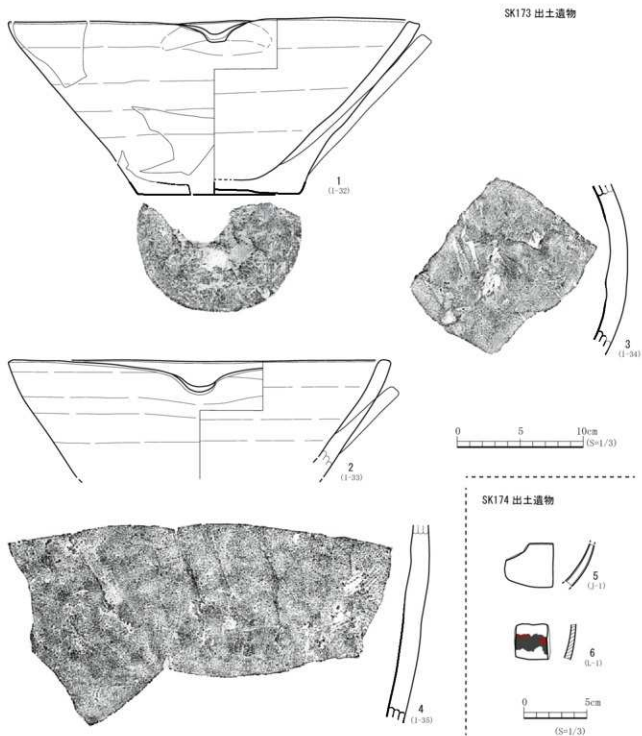
【規模・形状】 174cm×132cm の楕円形。深さ 25cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 4 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 検出面から漆器碗破片 (第 40 図 6) 1 点 (5g)、堆積土 4 層から青磁碗破片 (第 40 図 5) 1 点 (15g) が出土した。



第39図 SK173・174 土坑 (1)



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK173 1層	中冨海部	鉢	口縁部 ～底部	外面：ナズ、内面：ナズ・使用による磨滅。色調：外面・灰褐色(S104/2)、内面・灰褐色(T.5104/2)。法量：口 径32.8cm・器高14.1cm・底径12.8cm・器厚0.9～2.7cm。産地：在地中	I-32
2	SK173 1層	中冨海部	鉢	口縁部	内外面：ナズ。色調：外面・にぶい赤褐色(2.5105/0)、内面・にぶい赤褐色(2.5105/3)。法量：口径30.4cm・残 存高9.4cm・器厚1.0～1.2cm。産地：白石窯	I-33
3	SK173	中冨海部	甕	体部	外面：ケズリ・ナズ。内面：指オサユ・ナズ。色調：外面・にぶい赤褐色(2.515/3)、内面・灰赤色(2.514/2)。 法量：器厚1.3～1.7cm。産地：白石窯。I-35と同一器体	I-34
4	SK173 1層	中冨海部	甕	体部	外面：ケズリ・ナズ。内面：指オサユ・ナズ。色調：外面・にぶい赤褐色(2.515/3)、内面・灰赤色(2.514/2)。 法量：器厚1.2～1.65cm。産地：白石窯。I-34と同一器体	I-35
5	SK174 4層	青磁	瓶	体部	色調：内外面・緑灰色(1003/1)。法量：器厚0.35～0.65cm・軸厚0.1cm程度。青磁無文焼。産地：籠泉窯	J-1
6	SK174 輸出面	漆器	瓶	体部	外面：黒色漆塗り・漆絵(赤色唐・刺繍)。内面：赤色漆塗り。色調：外面・黒色(N2/0)、内面・赤色(1004/0)。 法量：器厚0.3～0.5cm	L-1

第40図 SK173・174 土坑 (2)

**【SK175 土坑】** (第41・46図)

【位置】 G区中央部の標高6.6mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 128cm×90cmの隅丸長方形。深さ27cm。底面は平坦で、断面形は方形である。土坑側壁が被熱を受け赤色化しており、最下層に炭層が認められることから、SK175土坑は木炭焼成土坑とみられる。

【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層で、3層は炭化物片を多量に含む木炭層である。

【出土遺物】 なし。

【その他】 堆積土3層(炭層)に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は788~871cal AD(平安時代前半頃)であった。

**【SK176 土坑】** (第41・46図)

【位置】 G区中央部の標高7.0mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

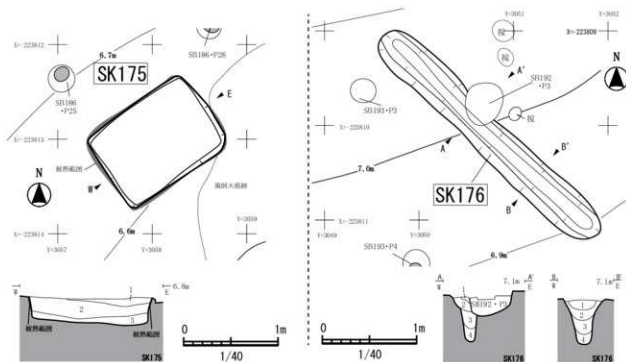
【重複】 SB192・P3と重複し、これより古い(SK176→SB192・P3)。

【規模・形状】 308cm×36cmの溝状を呈する。深さ49cm。底面は平坦で、断面形は漏斗形である。遺構の形状から落とし穴状遺構とみられる。

【堆積土】 4層確認した。いずれも自然堆積層である。

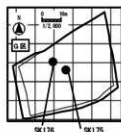
【出土遺物】 なし。

【その他】 堆積土中層にあたる3層(自然堆積層)に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は3626~3381cal BC(縄文時代前期末葉から中期前葉頃)であった。



**【SK175・176 土坑 土層注記】**

遺構	層	土色	土性	備考
SK175	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒子少量含む。
	3	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物片多量含む。炭層。
SK176	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒子少量含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子、炭化物片含む。
	3	褐色(7.5YR4/3)	シルト	地山粒子少量含む。
	4	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	地山粒子少量含む。



第41図 SK175・176 土坑

## 【SK177 土坑】(第42図)

【位置】 G区北側やや中央付近の標高7.3mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 42cm×21cmの楕円形。深さ5cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

## 【SK178 土坑】(第42図)

【位置】 G区北西部の標高7.3mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 SB191・P5と重複し、これより新しい(SB191・P5→SK178)。

【規模・形状】 85cm×36cmの不整形。深さ20cm。底面には凹凸があり、断面形は方形である。

【堆積土】 2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

## 【SK179 土坑】(第42図)

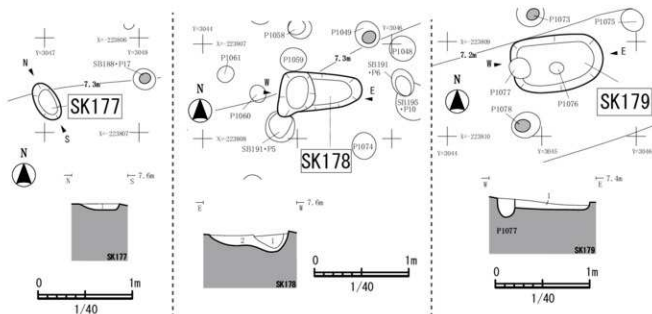
【位置】 G区北西部の標高7.2mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 P1076・1077と重複し、これより古い(SK179→P1076・1077)。

【規模・形状】 97cm×58cmの楕円形。深さ10cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

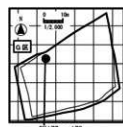
【堆積土】 1層確認した。地山ブロックを多量含む人為堆積層である。

【出土遺物】 なし。



## 【SK177～179 土坑 土層注記】

遺構	層	土色	土性	備考
SK177	1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物片含む。
SK178	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
	2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ブロック・黒色土ブロック少量含む。
SK179	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。



第42図 SK177～179 土坑

**【SK180 土坑】** (第 43 図)

【位置】 G 区北西部の標高 6.9m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 77cm×50cm の楕円形。深さ 20cm。底面は平坦で、断面形は U 字形である。

【堆積土】 2 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

**【SK181 土坑】** (第 43 図)

【位置】 G 区中央部やや西側の標高 6.8m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 84cm×33cm の楕円形。深さ 22cm。底面は平坦で、断面形は U 字形である。

【堆積土】 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土からロクロ成形の土師器坏破片 1 点 (5g)・甕破片 1 点 (5g) が出土した。土師器坏は内黒処理が施されたものである。いずれも小破片のため、図示できたものはない。

**【SK182 土坑】** (第 43 図)

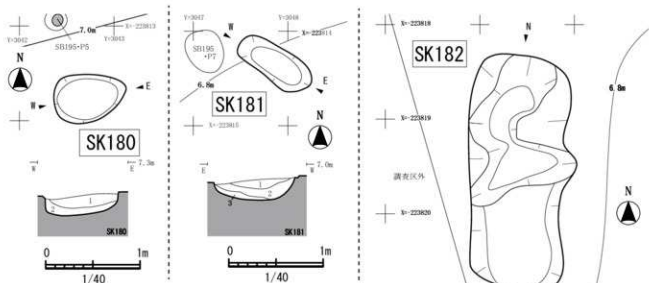
【位置】 G 区西端中央付近の標高 6.8m の平坦面で確認した。検出面は VIIb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 247cm×104cm のやや不整形な隅丸長方形。深さ 44cm。底面には凹凸があり、断面形は不整形である。

【堆積土】 7 層確認した。2・7 層は地山ブロックを多量に含む人為堆積層で、その他は自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。



**【SK180～182 土坑 土層注記】**

遺構	層	土色	土性	備考
SK180	1	灰黄褐色(10Y8/2)	シルト	地山粒子、褐色土ブロック含む。
	2	にぶい黄褐色(10Y6/3)	シルト	地山粒子含む。
SK181	1	緑褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片含む。
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック、炭化物片含む。
SK182	3	灰黄褐色(10Y8/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子微量含む。
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック多量含む。
	3	にぶい黄褐色(10Y6/3)	シルト	地山粒子微量含む。
	4	にぶい黄褐色(10Y6/4)	シルト	砂粒多量含む。
	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	砂粒多量含む。
	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
7	緑褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック多量含む。	

第43図 SK180～182 土坑

## 【SK183 土坑】(第44・46図)

【位置】 G区中央部やや南西付近の標高6.5mの平坦面で確認した。検出面はVIIb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 127cm×124cmの円形。深さ54cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】 5層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土1層からロクロ成形の土師器高台付坏破片1点(5g)・甕破片4点(10g)、須恵器甕2点(25g)が出土した。高台付坏は非内黒処理の底部破片である。いずれも小破片のため、図示できたものはない。

## 【SK184 土坑】(第44図)

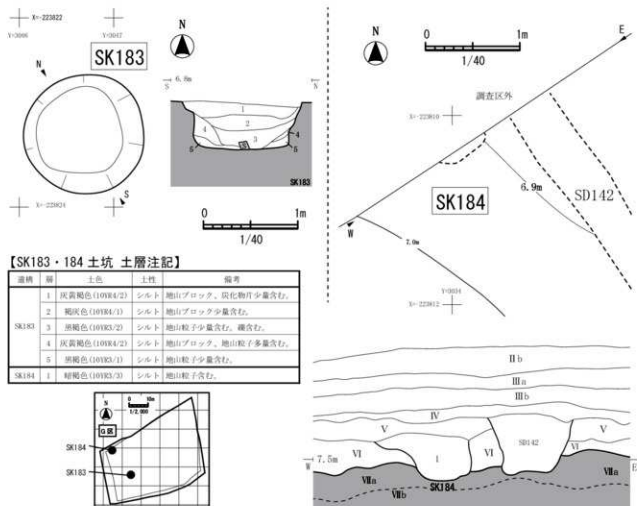
【位置】 G区北西部の北壁断面で確認した。遺構の掘り込み面は基本層VI層上面である。

【重複】 なし。

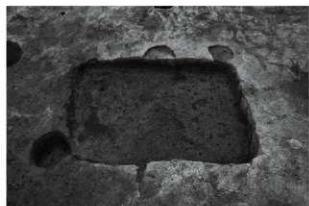
【規模・形状】 56cm以上の円形を呈するとみられる。北壁断面で確認した深さは48cmで、断面形は不整形である。

【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。

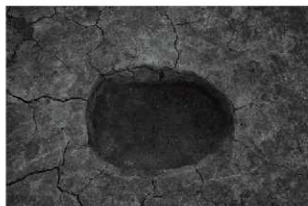
【出土遺物】 なし。



第44図 SK183・184 土坑



1. SK144 土坑 完掘状況 (南から)



2. SK145 土坑 完掘状況 (西から)



3. SK148 土坑 完掘状況 (西から)



4. SK151 土坑 土層断面 (南から)



5. SK153 土坑 完掘状況 (北から)



6. SK162 土坑 土層断面 (南から)



7. SK163 土坑 土層断面 (南から)



8. SK164 土坑 土層断面 (北から)

第45図 主要SK(土坑)写真図版(1) -SK144・145・148・151・153・162~164-





1. SK165 土坑 土層断面 (南から)



2. SK166 土坑 土層断面 (北から)



3. SK170 土坑 土層断面 (北から)



4. SK173 土坑 土層断面 (南から)



5. SK174 土坑 土層断面 (東から)



6. SK175 土坑 土層断面 (南から)



7. SK176 土坑 完形状況 (南から)



8. SK183 土坑 土層断面 (東から)

第46図 主要SK(土坑)写真図版(2) -SK165・166・170・173~176・183-



第47図 SK159・162・164・166・170・173・174 出土遺物 -写真図版-

### 3. 風倒木痕跡

今回の調査区では、風倒木と考えられる痕跡が15カ所確認されている(第26図参照)。これらは、遺構精査の段階で、風倒木痕跡であると判断されたことから、特に断面図作成等の精査は行わないこととしたが、柱穴・土坑などの遺構との重複関係から、少なくとも古代以前の風倒木痕跡と考えられる。

### 4. 遺構外出土遺物

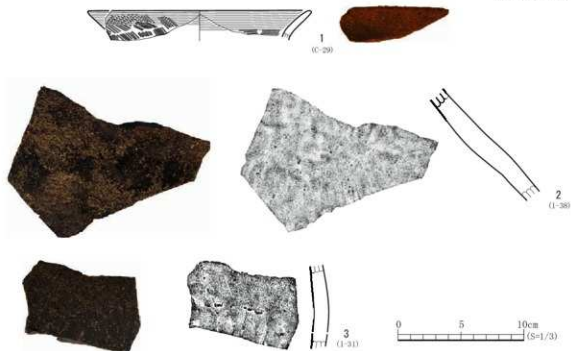
この他、今回の調査区では、遺構検出面、基本層Ⅲ・Ⅳ層、攪乱から縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、石器が出土した(第12表)。

このうち、図示できたものは、遺構検出面から出土した非ロクロ成形の土師器甕(第48図1)・常滑産の中世陶器甕(第48図2)、基本層Ⅳ層から出土した渥美産の中世陶器甕(第48図3)である。

第12表 北経塚遺跡 遺構外出土遺物一覧

調査区	出土地点	種別	器種	点数	重量(g)
G区	基本層Ⅲa層	取巻部	甕	1	5
		土師部	甕	2	25
	基本層Ⅳ層	縄文土器	深鉢	1	20
		土師部	甕	1	5
		中世陶器	甕	1	115
	T-3 検出面	土師部	甕	1	20
	検出面	土師部	甕	3	10
		中世陶器	甕	1	215
	攪乱	石器	剥片	3	41.2

遺構外出土遺物



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→度量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	T-3 検出面	土師部	甕	口縁部	内外面・ハケメ・ヨコナデ。色調：外面・にぶい赤褐色(YR5/4)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：口径(19.0)cm・残存高2.4cm・器厚0.4cm	C-29
2	G区 検出面	中世陶器	甕	体部	外面：ナデ、内面：ナデ・自然釉。色調：外面・黒灰色(10YR4/1)、内面・黒灰色(5YR4/3)。法量：器厚1.1~1.6cm。産地：常滑産	I-28
3	基本層 Ⅳ層	中世陶器	甕	体部	外面：ナデ・自然釉、内面：ナデ。色調：外面・黒灰色(10YR5/1)、内面・灰色(5S/0)。法量：器厚1.0~1.2cm。産地：渥美産	I-31

第48図 北経塚遺跡G区 遺構外出土遺物



北経塚遺跡 G 区 調査風景

## 第IV章 自然科学分析

### 第1節 はじめに

#### 1. 自然科学分析の項目と分析目的

今回の調査では、下記の1項目について、業務委託により自然科学分析等を実施した。それぞれの分析内容、分析目的、分析機関については以下のとおりである。

##### 【遺構出土炭化物の放射性炭素年代測定】

【分析内容】 G区で確認された遺構出土炭化物の放射性炭素年代測定。具体的には、縄文時代の落とし穴と推定されるSK176土坑下層(3層・自然堆積層)出土の炭化物片、古代の木炭焼成土坑と考えられるSK175土坑底面直上出土の炭化物片、中世以降と推定されるSE143井戸跡5層(自然堆積層)出土の炭化物片についての分析を実施した。

【分析目的】 各遺構の年代推定

【分析委託機関】 榊加速器分析研究所

【分析結果】 第IV章第2節に記載

#### 2. 試料の採取地点と採取方法

それぞれの分析試料の採取地点等は第49図のとおりである。上記の放射性炭素年代測定に使用した試料は、発掘担当者が直接発掘調査現場で採取した。試料採取にあたっては、炭化物が含まれる土壌一式をブロック塊で採取し、出土層位を記録した上でビニール袋に詰めて現場から持ち帰った。その後、整理作業の段階で年代測定に適した炭化物を数点抽出し、分析委託機関に試料を引き渡し、分析を実施した。



第49図 分析試料採取箇所位置図

## 第2節 北経塚遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

宮城県亘理郡山元町に所在する北経塚遺跡の測定対象試料は、土坑等の遺構から出土した炭化物3点である(表1)。

### 2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常  $1\text{mol/l}$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 3 測定方法

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{12}\text{C}$  濃度 ( $^{12}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 ( $\text{HOx II}$ ) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の暦年年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦

軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の<sup>14</sup>C年代は、No.1が4750±30yrBP、No.2が1200±20yrBP、No.3が350±20yrBPである。暦年較正年代(1 $\sigma$ )は、No.1が3626~3381cal BCの間に3つの範囲、No.2が788~871cal ADの範囲、No.3が1478~1625cal ADの間に2つの範囲で示され、No.1が縄文時代前期末葉から中期前葉頃、No.2が平安時代前半頃、No.3が室町時代後半から江戸時代初葉頃に相当する(小林編 2008、佐原 2005)。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-151264	No.1	SK176 土坑・3層(自然堆積層)	炭化物	AAA	-26.86 ± 0.27	4,720 ± 30	55.59 ± 0.19
IAAA-151265	No.2	SK175 焼成土坑・底面直上	炭化物	AAA	-25.51 ± 0.22	1,200 ± 20	86.17 ± 0.23
IAAA-151266	No.3	SEI43 井戸跡・5層(自然堆積層)	炭化物	AAA	-27.21 ± 0.24	350 ± 20	95.70 ± 0.26

[#7567]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用<sup>14</sup>C年代、較正年代)

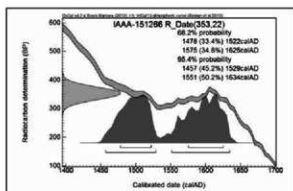
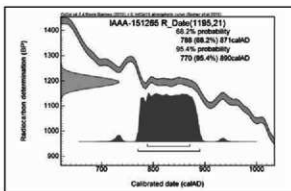
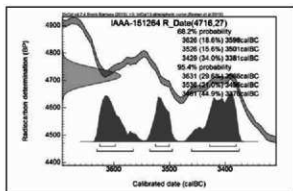
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-151264	4,750 ± 30	55.38 ± 0.19	4,716 ± 27	3626calBC - 3598calBC (18.6%) 3526calBC - 3501calBC (15.6%) 3429calBC - 3381calBC (34.0%)	3631calBC - 3566calBC (29.6%) 3536calBC - 3496calBC (21.0%) 3461calBC - 3376calBC (44.9%)
IAAA-151265	1,200 ± 20	86.08 ± 0.23	1,195 ± 21	788calAD - 871calAD (68.2%)	770calAD - 890calAD (95.4%)
IAAA-151266	390 ± 20	95.27 ± 0.26	353 ± 22	1478calAD - 1522calAD (33.4%) 1575calAD - 1625calAD (34.8%)	1457calAD - 1529calAD (45.2%) 1551calAD - 1634calAD (50.2%)

[参考値]

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原眞, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)



## 第V章 総括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

### 第1節 出土遺物の特徴と時期

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、かわらけ、陶器、磁器、石器、木製品である。遺物の総数は、土器類が84点(約7,100g)、木製品が1点(約5g)、石器類が6点(約133g)である(第13表)。これらの出土遺物のうち、本報告では、土器類20点、木製品1点、石器1点について図示した。以下、それぞれについて検討を行う。

第13表 北経塚遺跡G区(5次調査) 遺構別出土遺物一覧

遺構名	出土層位	遺物 種類	遺物 器種	出土 点数	重量 (g)	特徴	
SB186	P3	縄文土器	須恵器	壺	1	50	胴部破片
		中世陶器	壺	1	420	胴部破片/産地:在地	
	P4	縄文土器	須恵器	壺	1	5	胴部破片/外面タタキ目
	P11	柱状取穴	土師器	甕	1	5	胴部破片/成形技法不明
	P14	柱状取穴	土師器	甕	1	5	小破片/成形技法不明
P18	縄文土器	石器	磨製石斧	1	84	石材:砂岩	
SB187	P2	縄文土器	土師器	壺	1	5	小破片/成形技法不明
	P5	柱状取穴	中世陶器	不明	1	5	小破片/産地:在地?
	P17	柱状取穴	土師器	壺	1	5	小破片/成形技法不明
SB188	P13	柱状取穴	土師器	壺	1	5	胴部破片/ロクロ成形
	P8	柱状取穴	土師器	壺	1	5	胴部破片/ロクロ成形
	P15	柱状取穴	土師器	坏	1	5	胴部破片/ロクロ成形・内黒処理
SB190	P4	柱状取穴	中世陶器	壺	1	15	胴部破片/産地:古瀬戸
SB192	P1	柱状取穴	土師器	壺	1	5	胴部破片/ロクロ成形
SB193	P4	縄文土器	土師器	壺	1	5	胴部破片/ロクロ成形
SB195	P3	縄文土器	かわらけ	皿	1	5	底部破片/ロクロ成形
SB197	P5	柱状取穴	かわらけ	皿	1	5	口縁部破片/非ロクロ成形
SB198	P6	柱状取穴	土師器	壺?	1	5	胴部破片/成形技法不明
SD140	1層	土師器	壺	1	5	口縁部破片/非ロクロ成形/ 外底:赤彩・刷毛目	
		須恵器	壺	1	55	底部破片	
SD141	1層	土師器	坏	1	10	底部破片/ロクロ成形/赤焼土器	
		土師器	壺	2	5	胴部破片/ロクロ成形	
SE143	1層	土師器	壺	1	5	胴部破片/ロクロ成形	
	2層	須恵器	壺	2	95	胴部破片/外面平行タタキ	
SK156	1層	土師器	壺	1	10	胴部破片/非ロクロ成形	
SK159	1層	中世陶器	壺	1	20	胴部破片/産地不明	
		かわらけ	皿	2	10	底部破片/ロクロ成形	
SK162	1層	中世陶器	壺	1	90	胴部破片/産地:在地	
SK164	1層	土師器	壺	4	15	胴部破片/成形技法不明	
	4層	土師器	器台	1	395	胴部破片/非ロクロ成形	
SK166	1層	土師器	高坪	1	115	胴部破片/非ロクロ成形	
		須恵器	壺	1	175	胴部破片/外面平行タタキ	
SK168	1層	中世陶器	壺	1	145	胴部破片/産地:白石窯	
SK170	1層	土師器	壺	1	5	小破片/成形技法不明	
		中世陶器	壺	1	180	胴部破片/産地:白石窯	
SK173	1層	中世陶器	鉢	2	3125	口縁部~底部/産地:白石窯・在地?	
		中世陶器	壺	2	1245	胴部破片/産地:白石窯	
SK174	4層	青磁	埴	1	15	胴部破片/産地:龍泉窯	
	検出面	漆器	輪	1	5	胴部破片	
SK181	堆積土	土師器	坏	1	5	胴部破片/ロクロ成形・内黒処理	
		土師器	壺	1	5	胴部破片/ロクロ成形	
SK183	1層	須恵器	壺	2	25	胴部破片/外面タタキ目	
		土師器	高台付罎	1	5	底部破片/ロクロ成形/赤焼土器	
		土師器	壺	4	10	胴部破片/ロクロ成形	
P772	柱状取穴	土師器	壺	1	20	胴部破片/ロクロ成形	
P841	1層	土師器	壺	1	5	口縁部破片/ロクロ成形	
P855	縄文土器	土師器	壺	1	5	小破片/成形技法不明	
P878	1層	かわらけ	皿	1	5	底部破片/ロクロ成形	
P882	縄文土器	土師器	坏	1	10	底部破片/ロクロ成形・内黒処理/ 底面:磨製赤切無蓋窯	
P885	1層	石器	剥片	1	2	石材:頁岩	
P891	堆積土	石器	剥片	1	6	石材:石英	
	縄文土器	須恵器	壺?	1	20	胴部破片	
P903	1層	土師器	鉢	1	70	底部破片/非ロクロ成形	
P909	1層	土師器	壺	1	5	小破片/成形技法不明	
P928	1層	土師器	坏	1	5	胴部破片/ロクロ成形・内黒処理	
P931	1層	土師器	壺	2	15	胴部破片・小破片/ロクロ成形	
P963	1層	土師器	壺	1	5	胴部破片/ロクロ成形	
P994	縄文土器	土師器	坏	1	5	底部破片/ロクロ成形・内黒処理/ 底面:磨製赤切無蓋窯	
P995	1層	土師器	壺	1	5	胴部破片/ロクロ成形	
P1008	柱状取穴	かわらけ	皿	1	5	底部破片/ロクロ成形	
P1027	縄文土器	土師器	壺	1	5	小破片/成形技法不明	
P1028	縄文土器	土師器	坏	1	5	口縁部破片/ロクロ成形・内黒処理	
P1044	柱状取穴	中世陶器	壺+壺	1	375	胴部破片/厚肉/産地:美濃	
P1069	柱状取穴	かわらけ	皿	1	5	口縁部破片/非ロクロ成形	
T-3	検出面	土師器	壺	1	20	口縁部破片/非ロクロ成形	
基本層IIIa層	埋瓦	石器	剥片	3	41	石材:頁岩	
		土師器	壺	1	5	胴部破片/外面タタキ目	
基本層IV層	検出面	縄文土器	深鉢	1	20	胴部破片	
		土師器	壺	1	5	底部破片/ロクロ成形	
		中世陶器	壺	1	115	胴部破片/産地:美濃	
検出面	土師器	壺	3	10	底部破片・小破片/ロクロ成形		
		中世陶器	壺	1	315	胴部破片/産地:常滑	

※重量は乾燥重量

## 1. 縄文土器

縄文土器は1点(20g)出土した。破片資料で器面の磨減がひどく、図示はできなかった。これまでの北経塚遺跡の調査(A~F区)では、縄文時代前期初頭頃の縄文土器が多く出土していることから、今回の調査区で出土した縄文土器も同時期のものである可能性が考えられる(関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013)。

## 2. 土師器・須恵器

### (1) 土師器(第50図1~4)

土師器は51点(約660g)出土し、このうち4点を図示した。小破片で残りの悪いものが多く、調整を判断できたものはごく一部である。成形技法から、非ロクロ成形6点、ロクロ成形32点、不明13点に分けられる。

#### 【非ロクロ土師器】

非ロクロ土師器の器種には、器台・高坏・鉢・甕がある(第50図1~4)。器台は受け部と脚部の間に貫通孔があり、脚部にヘラミガキを施し、円窓(3孔)を有する(第50図1)。高坏は脚部が中実棒状のものである(第50図2)。甕は、口縁部にハケメ後ヨコナデを施す(第50図4)。

これらの非ロクロ土師器は、器形・製作技術の諸点から古墳時代前期の特徴を有しており、当地域における土師器編年の塩釜式(氏家1957)に位置づけられる。塩釜式については、丹羽茂、次山淳、辻秀人、青山博樹などにより編年案が示されている(丹羽1985、次山1992、辻1994・1995、青山2010・2011)。各氏の編年を参考にとすると、今回の調査で出土した塩釜式期の土師器は、中実棒状の脚部を持つ高坏や貫通孔と円窓を有する器台の存在などから、塩釜式の中でもおおそ中頃から後半にかけてのものと推定される。

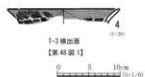
#### 【ロクロ土師器】

ロクロ土師器の器種には、坏・高台付坏・甕がある。これらはすべて小破片であったため、図示できたものはない。出土した坏類の破片資料の特徴としては、底部切り離し技法が回転糸切無調整、内面黒色処理のものと非黒色処理のもの(赤施土器)が混在など挙げられる。これらの点から、今回の調査区で出土したロクロ土師器の年代については、概ね9世紀以降のものと捉えておきたい。

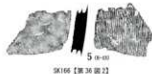
### (2) 須恵器(第50図5)

須恵器は10点(約430g)出土し、このうち1点を図示した(第50図5)。出土した器種は壺・甕である。いずれも破片資料のため、具体的な年代の決定は難しいが、甕の内外面の製作技法等の特徴から概ね古代以降のものと推定される。

土師器(1:器台 2:高坏 3:鉢 4:甕)



須恵器(5:甕)



第50図 北経塚遺跡G区出土土師器・須恵器集成図

## 3. かわらけ・中世陶器・磁器・木製品

## (1) かわらけ (第51図14)

かわらけは7点(35g)出土し、1点図示した(第51図14)。出土したかわらけは、全てロクロ成形による皿である。いずれも破片資料で、全体の器形を復元できるものではなく、詳細な年代的位置づけを行うことは難しいが、器形等の特徴からおおむね中世に属するものとみられる。

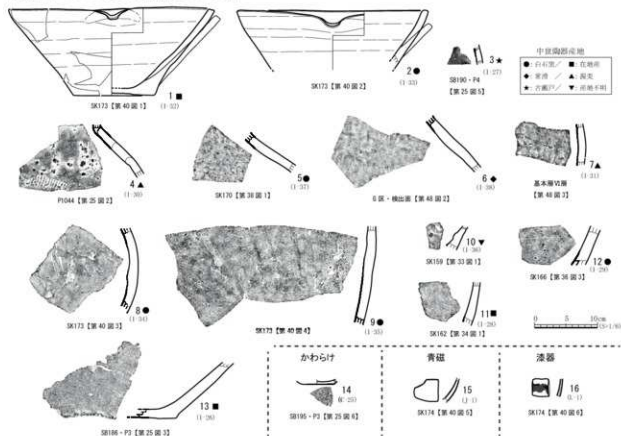
## (2) 中世陶器 (第51図1~13)

中世陶器は14点(5,940g)出土し、このうち13点を図示した。出土した器種は鉢(第51図1・2)・壺(第51図3)・壺または甕(第51図4)・甕(第51図5~13)である。

鉢(第51図1・2)はいずれも片口の鉢で、内面にはおろし目がなく、使用に伴う摩擦により滑らかな器面となっている。壺または甕の破片(第51図4)には押印が認められた。甕(第51図5~13)については、すべて破片資料で器形を復元できるものはない。

これらの中世陶器の産地については、胎土や焼成の特徴から、在地の宮城県白石市に所在する「白石窯」産と推定されるものが5点(第51図2・5・8・9・12)、在地産が3点(第51図1・11・13)、愛知県製の「常滑窯」産が1点(第51図6)、「渥美窯」産が2点(第51図4・7)、「古瀬戸」産が1点(第51図3)確認された(第51図10は産地不明)。白石窯は、大きく4つの支群(東北支群・市ノ沢支群・黒森支群・一本杉窯群)からなっており、このうち、本格的な発掘調査が実施されたのは一本杉窯跡群(菊地・早川1996)のみである。今回の調査で出土した「白石窯」産の中世陶器の所属時期は、白石市一本杉窯跡の調査成果から、概ね13世紀後半~14世紀前半頃と推定される。この他、渥美窯産のものは12世紀代、常滑窯・古瀬戸窯産のものはおおむね中世のものともみられる(※)。

中世陶器 (1・2:鉢 3:壺 4:壺または甕 5~13:甕)



第51図 北経塚遺跡G区出土かわらけ・中世陶器・磁器・木製品集成図

(3) 磁器 (第51図15)

磁器は中国龍泉窯産の青磁 無文碗が1点(15g)出土した(第51図15)。13世紀代のものとみられる(※)。

※陶磁器の産地・年代については、佐藤洋氏(仙台市教育委員会)にご教示いただいた。

(4) 木製品 (第51図16)

木製品は漆器碗の胴部破片が1点(5g)出土した(第51図16)。外面黒色系漆・内面赤色系塗の碗で、外面に赤色系漆による漆絵が描かれている。小破片のため、全体の器形や漆絵のモチーフ、所属時期は不明である。出土した遺構の底面付近から中世陶器が出土していることから、中世以降のものとみておきたい。

#### 4. 石器

石器は6点出土した。その内訳は、磨製石斧が1点、剥片が5点である。

磨製石斧は刃部のみが出土した(第25図4)。石材は砂岩である。剥片の石材は頁岩・石英である。これらの石器は、いずれも中世以降と考えられる遺構や現代の擾乱から出土しており、遺構に伴うものではない。

これまでの北経塚遺跡の調査(A～F区)では、縄文時代前期初頭頃の石器が数多く出土している(岡2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013)。今回の調査区(G区)は過去の調査区(A～F区)のすぐ西側隣接地にあたる。以上のことから、今回出土した石器類は、概ね縄文時代前期頃のものと思われる。

## 第2節 検出遺構の特徴と時期

今回の調査で本調査を実施したG区で検出した遺構は、掘立柱建物跡16棟、溝跡5条、井戸跡1基、土坑41基、柱穴・ピット568個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）である。これらの遺構からは、縄文土器、土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）、須恵器、かわらけ、中世陶器、磁器、石器、漆器が出土した。

ここでは、これらの遺構の特徴・出土遺物・重複関係等から、その時期・性格について検討する。

### 1. 今回の調査区（G区）で検出した各遺構の時期

#### (1) 掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット

掘立柱建物跡は16棟（SB185～200）、建物として認定できなかったその他の柱穴・ピットは377個（P746～1122）を検出した。これらの柱穴・ピットの掘方規模は、長軸20～30cm前後の円形・楕円形を呈するものが主体で、柱痕跡は、直径15cm前後のもので円形・楕円形を呈するものが多い。その分布範囲は、掘立柱建物跡とその他の柱穴・ピット分布域とほぼ重なり、堆積土も類似していることから、これらの建物及びその他の柱穴・ピットは、近い時期に機能した遺構であると判断される。一部の柱穴・ピットでは中世陶器が出土し、近世の遺物は出土していない点から、建物を含めた柱穴・ピットの年代は概ね中世に属すると考えられる。中でもP1044では12世紀代とみられる渥美産の中世陶器が出土しており、中世初期から建物が存在していた可能性が考えられる。

#### (2) 溝跡

溝跡は5条（SD138～142）確認した。このうち、SD140は中世とみられるピットと重複し、これより新しい遺構であることが確認されていることから中世以降の溝跡、SD141ではロクロ土師器が出土していることから平安時代以降の溝跡とみられる。SD138・139・142については出土遺物がなく、かつ他の遺構との重複関係がないため、詳細な時期は不明である。ただし、SD138・139・141・142の堆積土はSD140と類似しており、これらも同様の時期の可能性が高いと考えられる。

#### (3) 井戸跡

井戸跡は1基（SE143）確認した。SE143では、遺構に伴う遺物は出土していないが、下層にあたる堆積土5層（自然堆積層）に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した（第14表）。その結果から、SE143は室町時代後半～江戸時代初頭頃以前に機能した井戸跡であると想定される。

#### (4) 土坑

土坑は41基（SK144～184）確認した。これらの土坑については、堆積土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、出土遺物の年代、遺構の重複関係、堆積土の観察等から、以下のとおり所属時期を推定した。

出土した炭化物片の放射性炭素年代測定はSK175・176土坑で実施した（第14表）。その結果から、SK175は平安時代前半頃（暦年較正年代788～871cal AD）の木炭焼成土坑、SK176は縄文時代前期末葉から中期前葉以前（暦年較正年代3626～3381cal BC）落とし穴状遺構とみられる。

所属時期が推定できる遺物が出土した土坑には、SK156・159・162・164・166・170・173・174・181・183がある。SK164では釜蓋式の土師器が出土した。これらは、出土状況から遺構に伴う遺物と判断され、その所属時期は古墳時代前期とみられる。SK156では、非ロクロ土師器片が出土した。加えて中世とみられる掘立柱建物跡と重複関係（SB189ほか）にあり、これらより古い。このことから、その年代は、古墳時代～中世の幅におさまるものと推定される。SK181・183はロクロ土師器が出土していることから、概ね平安時代以降の年代が考えられる。

SK159・162・166・170・173・174 は、中世の遺物（中世陶器・かわらけ・青磁・漆器）が出土していることから、中世以降の土坑と判断した。

出土遺物はないが、遺構の重複関係や堆積土・遺構の形状などからある程度時期が推定できる土坑には、SK144・150・153・157・158・160・161・165・167・168・171・172・178・179がある。SK144・150・153・158・160・179 は、中世とみられる掘立柱建物跡やピットと重複し、これより古いことから、中世以前の土坑であると考えられる。SK178 は、中世の掘立柱建物跡（SB191）と重複し、これよりも新しい遺構であることから、中世以降の土坑とみられる。SK157 は古墳時代～中世の遺構と考えられる SK156 と重複し、これより古いことから古墳時代～中世以前の土坑と考えられる。SK161 は中世の遺構と重複関係（P970→SK161→P969・1015）から中世の遺構とみられる。SK165・167・168・169・171・172 は遺構の形状や堆積土が中世と考えられる SK166 と類似しており、中世以降の土坑であると推定される。

その他の SK145～149・151・152・154・155・163・177・180・182・184 については出土遺物がなく、かつ、他の遺構との重複関係がないため、所属時期は不明である。

第14表 北経塚遺跡G区（5次調査）出土炭化物の放射性炭素年代

No	炭化物出土 遺構・層位	暦年代範囲 (1σ)	<sup>14</sup> C年代	試料NO.	時期
1	SK176 土坑・3層(自然堆積層)	362calBC～338calBC	4750±30yrBP	No.1	縄文時代前期末葉～中期前葉頃
2	SK175 焼成土坑・底面直上	788calAD～871calAD	1200±30yrBP	No.2	平安時代前半
3	SE143 井戸跡・5層(自然堆積層)	1478calAD～1625calAD	350±20yrBP	No.3	室町時代後半～江戸時代初期

※第IV章第2節の年代測定結果をもとに作成

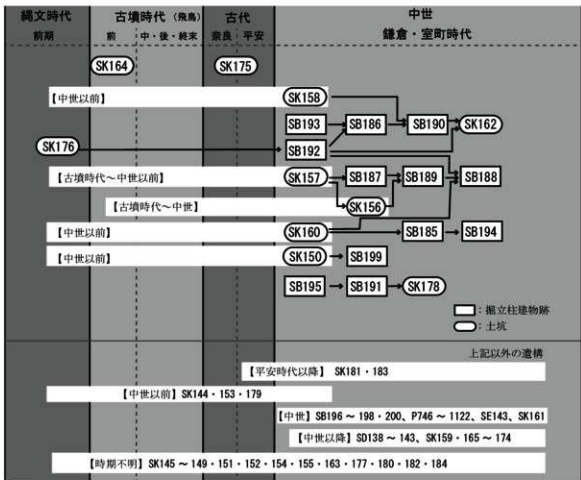
## (5) まとめ

以上の検討の結果をまとめると、主な遺構の重複関係・所属時期は第15表・第52図のとおりとなる。

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代前期、古墳時代前期、奈良時代末～平安時代前半、中世の遺構に分けることができるが、縄文～平安時代の遺構はわずかで、その主体は中世の遺構である。出土遺物についても、縄文～平安時代の遺物は少ない。このことから、先の検討で時期不明とした遺構や推定時期に幅がある遺構の多くは、出土遺物の内容、遺構の形態・堆積土の特徴を踏まえると、中世に属する可能性が高いと考えられる。

第15表 北経塚遺跡G区（5次調査）遺構の所属時期

所属時期	遺構番号
縄文時代前期末葉～中期前葉 以前	SK176 (縄文前期?)
古墳時代前期 (4世紀)	SK164
平安時代 (8世紀末～9世紀代)	SK175
(平安時代以降)	SK181・183
(古墳時代 ～ 中世)	SK156
(古墳時代 ～ 中世以前)	SK157
(中世以前)	SK144・150・153・158・160・179
中世	SB185～200、P746～1122、SE143、SK161
(中世以降)	SD138～143、SK159・162・165～174・178
時期不明	SK145～149・151・152・154・155・163・177・180・182・184



第52図 北経塚遺跡G区 主要遺構の重複関係と所属時期

## 2. 各時代の遺構の特徴と変遷

北経塚遺跡は、阿武隈山地から東に細長く延びる段丘先端部に位置し、遺跡の想定範囲は、段丘先端部にある南北に分断された2つの小丘陵とその周辺の緩斜面にあたる。北経塚遺跡においてこれまで本格的な発掘調査(1～3次調査)が行われた箇所は、この分断された小丘陵のうち、南側に位置する小丘陵上の平坦面と北・東・西側緩斜面(A～F区)である(岡2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013)。今回の調査箇所(G区)は、過去の調査区の西側に位置し、小丘陵西側の低地にあたる(第4図)。このように、今回を含めた4度にわたる本格的な発掘調査で、北経塚遺跡の南北に分断された南側の小丘陵は、その平坦面と緩斜面・低地の大部分が調査されたこととなり、その結果、同丘陵上の各時代の遺構の全容や集落の広がり明らかとなった。

したがって、ここでは、今回の調査成果だけでなく、過去の調査成果も踏まえ、各時代の遺構の特徴とその変遷等についてみていきたい。なお、今回は、遺構がある程度まとまって確認された中世の遺構を中心に検討を進めることとする。

### (1) 縄文時代～平安時代の遺構

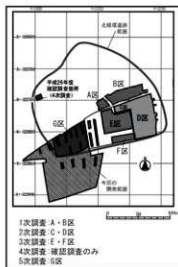
今回の調査区(G区)で、縄文時代～平安時代の遺構として認定できた遺構はわずか3基のみ(縄文時代前期:SK176落とし穴状遺構/古墳時代前期:SK164土坑/奈良時代末～平安時代前半:SK175木炭焼成土坑)である(第53図)。加えて、この時期の出土遺物も少ない。このことから、小丘陵西側の低地にあたるG区は、当該時期の集落からは離れた区域にあたと推定される。



第 53 図 北経塚遺跡 G 区 縄文時代～平安時代の遺構

【5 次調査検出遺構（縄文～古代）】

縄文時代前期：SK176 落とし穴状遺構  
古墳時代前期：SK164 土坑  
奈良時代末～平安時代前半：SK175 焼成遺構



1次調査：A・B区  
2次調査：C・D区  
3次調査：E・F区  
4次調査：確認調査のみ  
5次調査：G区

次に、過去の調査区（A～F区）で確認された縄文時代～平安時代の遺構の分布状況（第54図）をみると、縄文時代前期・古墳時代前期の遺構は、G区東側の丘陵上（A～F区）で多く確認されており【縄文前期：竪穴住居（S125・56・71・72）・ピット群（P1～102・396～460）・土坑（SK1・2・5・6・63・84・85）・焼面（SX20・21）・遺物包含層／古墳時代前期：竪穴住居（S173・74）・方形周溝状遺構（SD16・17・50）】、当該時期の集落の中心はこの範囲にあったと推定される。その一方で、奈良・平安時代の遺構は、A～F区においても土坑が1基（SK90 焼成遺構）確認されている程度であり、調査箇所全体でも当該時期の遺構は非常に少ない状況と言える。この他には、D・E区で古墳時代中期の古墳周溝跡が2条（SD11・75）確認されたほか、遺構は確認されなかったが、縄文時代晩期・弥生時代中期後半・古墳時代終末期の遺物もわずかに出土している（関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

これらの状況を踏まえ、北経塚遺跡南部（小丘陵周辺：A～G区）の縄文時代～平安時代の様相を概観すると、以下のとおりとなる（第54図）。

- 縄文時代前期：小丘陵平坦面周辺付近（C～F区）を居住域とし、小丘陵北側・南側斜面に捨て場（A・B区及びD・F区南端）が広がる。その西側（G区）には落とし穴状遺構が1基分布する程度で、集落の中心は小丘陵上（A～F区）に存在。
- 縄文時代晩期：生活の場としては利用されない（遺物はわずかに出土→人の行き来は有）。
- 弥生時代中期：生活の場としては利用されない（遺物はわずかに出土→人の行き来は有）。
- 古墳時代前期：小丘陵上の平坦面西側（E区）に竪穴住居、南東側の緩斜面（D区）に方形周溝状遺構が分布。丘陵西側の低地（G区）には土坑1基が分布する程度。方形周溝状遺構の性格に課題は残るが、丘陵頂部及び丘陵南東緩斜面を利用。
- 古墳時代中期：小丘陵頂部の平坦面に直径25m・16m程度の円墳2基が分布（E・D区）。その他の遺構は確認されていない。小丘陵は墓域として利用。周辺に同時期の集落が存在する可能性有。
- 古墳時代終末期：生活の場としては利用されない（遺物はわずかに出土→人の行き来は有）。
- 奈良・平安時代：生活の場としては利用されないが、単発的に木炭を生産。周辺に古代集落が存在する可能性有。





## (2) 中世の遺構

今回の調査区(G区)において確認した中世に所属すると考えられる遺構は、掘立柱建物跡16棟(SB185～200)、柱穴・ピット377個(P746～1122)、溝跡5条(SD138～142)、井戸跡1基(SE143)、土坑14基(SK159・161・162・165～174・178)である(第55図)。これらは、中世の屋敷を構成する建物とそれに関連する遺構であると考えられる。以下、それぞれの特徴・性格を検討し、G区の集落構造について検討する。

### 1) 掘立柱建物跡

#### 【建物の分布】

今回の調査区(G区)における掘立柱建物跡の分布は、G区北半中央部(SB185～195周辺)、北東部(SB199・200周辺)、南西部(SB196～198周辺)の大きく3つに分けることができる。中でも、北半中央部付近に建物が最も密集して配置されている。これに対し、G区の南半東側一帯では柱穴・ピットは検出されていないことから、この空間には建物は存在していなかったとみられる。

#### 【建物の規模・構造】

建物16棟の規模内訳は、第16表のとおりで、桁行5間×1間の建物から桁行2間×1間までの様々な規模の建物が検出された。建物棟方向の内訳は、東西棟建物が11軒、南北棟建物が5軒である。身舎に庇や張出の付く建物は5棟確認されており【庇の付く建物4棟(SB186・188・189・197)、庇・張出の付く建物1棟(SB187)】、この他には、桁行が4間以上ある細長い構造の建物(SB193～195・200)も見つかっている。それぞれの建物の面積は、庇・張出も含めた建物の占有面積でみると、16.8㎡～82.8㎡とばらつきがあり、その大きさに応じた建物の用途があったと推定される。

#### 【建物の性格・配置】

占有面積の大きい建物は、SB185～195が分布するG区北半中央部、特に面積が最大であるSB186の分布域に密集している。SB186は三面庇付東西棟建物で、今回検出した建物の中では最も立派な建物である(面積82.8㎡)。このSB186と隣接または重複する形で、SB187(庇・張出付建物/面積70.1㎡)、SB188(二面庇付建物/面積56.0㎡)、SB189(二面庇付建物/面積37.6㎡)、SB192(面積65.3㎡)といった建物が分布する。これらの建物は、その占有面積・構造の面から、屋敷地内での中心的な建物(主屋)であった可能性が高いとみられる。これに対し、比較的小規模の建物や細長い構造の建物は、主屋とみられる建物周辺に配置されているものが多い。その用途は、主屋に付属する施設や屋敷地内の倉庫などに利用された建物と推定される。以上のことから、今回の調査区(G区)で確認された屋敷は、北半中央部のSB186～189の付近に集落内の中心となる建物(主屋)、その周囲に付属する建物が配置され、南東部に空間をもつ屋敷構成であったと考えられる。

第16表 北経塚遺跡G区(5次調査)掘立柱建物跡一覧

遺構	建物規模	建物面積	方向	遺構	建物規模	建物面積	方向
SB185	3間×1間 東西棟建物	33.5㎡	西18°	SB193	5間×1間 南北棟建物	32.4㎡	西21°
SB186	5間×1間 東西棟建物 (三面庇付建物)	56.3㎡ (82.8㎡)	西15°	SB194	4間×2間 南北棟建物	25.2㎡	西14°
SB187	4間×1間 東西棟建物 (庇・張出付建物)	35.7㎡ (70.1㎡)	西9°	SB195	5間×1間 南北棟建物	44.7㎡	西10°
SB188	5間×1間 東西棟建物 (二面庇付建物)	42.8㎡ (56.0㎡)	西9°	SB196	2間×2間 東西棟建物	19.1㎡	西12°
SB189	4間×1間 東西棟建物 (二面庇付建物)	23.0㎡ (37.6㎡)	西11°	SB197	2間×1間 東西棟建物 (庇付建物)	13.3㎡ (16.8㎡)	西20°
SB190	2間×2間 南北棟建物	27.9㎡	西19°	SB198	3間×1間 東西棟建物	17.3㎡	西24°
SB191	3間×1間 東西棟建物	25.8㎡	西22°	SB199	3間×1間 東西棟建物	24.8㎡	西14°
SB192	3間×2間 東西棟建物	65.3㎡	西23°	SB200	3間×1間 南北棟建物	34.7㎡	西10°

**【建物の変遷】**

最も多く建物が密集している調査区北半中央部での遺構の重複関係をみると、「SB193→SB186→SB190」・「SB187→SB189→SB188」の3時期の変遷が確認された（第52図）。さらに、建物どうしの重なりやそれぞれの位置関係から、同時存在が不可能と推定されるものを抽出すると、建物の変遷は、最大7時期まで想定することができた。加えて、今回発見された建物の中には調査区北側・東側に延びる建物があること、建物として認定できなかった柱穴・ピットが多数残されていることも踏まえると、G区の建物密集域には、これ以上の建物が存在し、7時期以上の建物の変遷があったとみられる。

主屋と推定される建物についてみると、その変遷は、SB187→SB189→SB188、SB192→SB188の順となる（SB186との新旧関係は不明）。この主屋とその他の建物が組み合わさり、屋敷を構成していたと考えられる。これらの建物の傾きは、建物の東辺・西辺が真北に対して西に傾く（N-9°24' -W）もので占められ、その角度により、いくつかのまとまりが認められることから、屋敷内の建物は、ある程度方向を揃えて配置されていたと想定される。しかし、今回の検討では、現地調査で記録できた情報から、それぞれの建物の共存関係までを見出すことはできなかった。今後の課題といえる。

**2) 建物群に関連する遺構-溝跡・井戸跡・土坑-**

溝跡（SD138～142）は、調査区の西側（SD140～142）及び北東部（SD138）、南東部（SD139）に分布する。これらの溝跡は、堆積土の観察・遺構の位置関係から、中世に属する遺構と判断した。残りが悪く、その全容は不明であるが、SD140～142については、建物群の外側に配置され、その底面は地形に合わせて傾斜していることから、屋敷地の区画溝または排水溝として機能していた可能性がある。SD138・139は用途不明である。

井戸跡（SE143）は素掘りの井戸で、調査区北西部の建物群から離れた場所に配置されている。堆積土に含まれていた炭化物の年代測定の結果から、室町時代後半～江戸時代初期以前に機能した井戸跡とみられる。

土坑は、建物群の密集域（SK159・161・162・178）と調査区南東部の建物が配置されない低地（SK165～174）に分布する。いずれの土坑もその用途は不明であるが、特に南東部の土坑群については、屋敷地内の建物が配置されない位置に分布することから、この空閑地での活動の際に使用された土坑であるとみられる。

**3) 出土遺物と遺構の所属時期****【出土遺物とその年代】**

今回検出した中世の建物とその関連遺構からは、かわらけ皿、中世陶器鉢・壺・甕、青磁碗、漆器椀が出土した。出土した陶磁器の産地の内訳は、中世陶器が在地の白石窯産5点、産地不明の在産地3点、常滑産1点、渥美産2点、古瀬戸産1点、磁器が中国龍泉窯産1点である。そのほとんどが破片資料のため、詳細な年代が推定できるものは少ないが、渥美産のものが12世紀代、白石窯産が13世紀後半～14世紀前半とみられる。

**【SE143 井戸跡出土炭化物の放射性炭素年代】**

SE143 井戸跡では堆積土に含まれていた炭化物の年代測定を実施した。その年代は、1478～1625cal AD（室町時代後半から江戸時代初頭頃）で、井戸跡の構築年代はそれ以前であると推定した。SE143は堆積土の観察から、人為的に埋戻されている井戸跡であることが分かっている。年代測定を実施した炭化物が出土した堆積層は、井戸埋戻土の下層にあたる。したがって、井戸跡は15世紀後半から17世紀初頭いづれかの時期に埋没し始め、その後、埋め戻された遺構と判断できる。

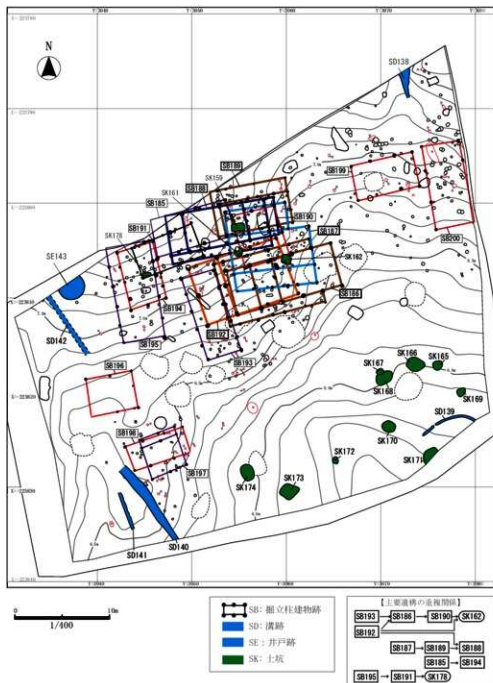
**【遺構の所属時期】**

今回確認した中世の遺構の所属時期は、出土遺物の年代観や放射性炭素年代測定の結果を参考にすると、12世紀代～15世紀後半頃もしくは12世紀代～17世紀初頭頃までの間に収まるものと考えられる。

## 4) 北経塚遺跡G区における中世集落の様相

ここでは、これまでの検討をもとに、今回の調査で確認された北経塚遺跡G区の中世集落の様相についてまとめる(第55図)。

今回の調査区(G区)では、標高5.6~7.6mの低地平坦面において、中世の掘立柱建物跡16棟、溝跡5条、井戸跡1基、土坑14基が確認された。これらは、中世の屋敷を構成する遺構とみられる。屋敷を構成する建物は、調査区の北半及び南西部の比較的平坦な範囲にL字状に配置され、北半中央部に主屋、それ以外の箇所に付属施設や倉庫などの建物が分布し、南東部の低地には建物が配置されない空間地が広がる。この空間地は、屋敷の生活の活動の場であったと考えられ、その際に使用されたとみられる用途不明の土坑が残存している。井戸は屋敷地の北西端に位置し、建物群の西端には溝が流る。この溝は、屋敷の区画・排水等の機能を有していた可能性が想定される。掘立柱建物跡は、その重複関係・建物どうしの重なりから、7時期以上の変遷があったと想定され、その範囲はさらに北側・東側の調査区外まで延びていたと考えられる。出土遺物はかわらけ、陶磁器、漆器が出土し、陶磁器の中には、少量ではあるが渥美産・常滑産・古瀬戸産の中世陶器や中国龍泉窯産の搬入品も確認された。屋敷地の年代は、出土遺物や放射性炭素年代測定の結果から、12世紀代~15世紀後半頃もしくは12世紀代~17世紀初頭頃の間におさまるものとみられる。建物の変遷が7時期以上想定されること、建物として認定できなかった柱穴・ピットが多数残されていることを考慮すると、G区における中世の屋敷は、中世の初期から継続的に営まれた集落の一部であったと考えられる。



第55図 北経塚遺跡G区 中世の遺構配置図

出た遺物はかわらけ、陶磁器、漆器が出土し、陶磁器の中には、少量ではあるが渥美産・常滑産・古瀬戸産の中世陶器や中国龍泉窯産の搬入品も確認された。屋敷地の年代は、出土遺物や放射性炭素年代測定の結果から、12世紀代~15世紀後半頃もしくは12世紀代~17世紀初頭頃の間におさまるものとみられる。建物の変遷が7時期以上想定されること、建物として認定できなかった柱穴・ピットが多数残されていることを考慮すると、G区における中世の屋敷は、中世の初期から継続的に営まれた集落の一部であったと考えられる。

## (3) 北経塚遺跡の中世集落の位置付けと周辺の中世遺跡

本項では、過去の調査区の成果を踏まえ、北経塚遺跡南半で確認された中世集落の様相についてまとめる。

北経塚遺跡において、中世の遺構はC～F区(2・3次調査)及びG区(5次調査)で確認された。C～F区は遺跡南東部の標高10m前後の小丘陵上及びその東・南斜面、G区はC～F区の小丘陵西側隣接地に広がる標高5.6～7.6m低地にあたる。これらの遺構は、中世の屋敷を構成する遺構とみられ、それぞれの調査区で発見された遺構の特徴や出土遺物の年代等から、ほぼ同様の年代幅の中で機能した遺構であると考えられる。

それぞれの調査区で発見された中世の遺構の概要をまとめると、第17表・第56図のとおりとなる。C～F区(2・3次調査)及びG区(5次調査)で発見された中世の屋敷は、屋敷を構成する遺構の分布・立地から、それぞれ別の屋敷地であったと推定される。具体的には、C～F区の屋敷は「遺跡南東部の標高10m前後の小丘陵上とその東・南斜面(E・F区東半分～D区西半)」の範囲内(以下、「屋敷A」とする)、G区の屋敷は「小丘陵西側隣接地に広がる標高5.6～7.6m低地(G区～3次調査T-9)」の範囲内(以下、「屋敷B」とする)におさまるとみられる(第56図)。以下、屋敷A・Bそれぞれの様相を比較・検討し、その性格について、若干の位置付けを行う。

第17表 北経塚遺跡南半の調査で確認された中世集落の概要

調査区	C～F区(2・3次調査): 屋敷A	G区(5次調査): 屋敷B	
集落立地	丘陵 ※遺跡南東部の標高10m前後の小丘陵上とその東・南斜面	低地 ※小丘陵西側隣接地に広がる標高5.6～7.6m低地	
屋敷構成遺構 (検出遺構)	掘立柱建物跡68棟(SB30～43・45～47・64～70・94～137) 柱穴・ピット多数(P103～395・461～745) 井戸跡3基(SE49・54・92) 土坑1基(SK91)	掘立柱建物跡16棟(SB185～200)、 柱穴・ピット多数(P746～1122)、 溝跡5条(SD138～142)、井戸跡1基(SE143) 土坑14基(SK159・161・162・165～174・178)	
建物分布域	丘陵中央部から南斜面(標高6.5～10.0m)	G区北半・南半+G区北側+3次調査T-9・10	
建物配置等	「コの字状」+建物群の東・西に空閑地	「L字状」+建物群の南東部に空閑地	
建物の変遷	16時期以上	7時期以上	
屋敷の範囲	E・F区東半分～D区西半の範囲内 ※敷地面積: 東西70m×南北40m程度	G区～3次調査T-9の範囲内 ※敷地面積: 東西60m×南北40m程度	
主要建物	遺構番号	SB39・45・115・135(張出付)/SB40(二面庇・張出付) SB95・99(二面庇付)/SB96(庇・張出付) SB66・97・98・102(庇付)	SB186(三面庇付)/SB187(庇・張出付) SB188・189(二面庇付)/SB192
	身舎規模	規模: 5×1間、4×2間、4×1間、3×2間、3×1間	規模: 5×1間、4×1間、3間×2間
	建物面積	面積(庇・張出含む): 35～70㎡	面積(庇・張出含む): 37～82㎡
所属時期	13世紀後半～14世紀前半以降 (建物変遷時期から長期間存続した集落と想定)	12世紀代～15世紀後半頃 or 12世紀代～17世紀初頭頃 (長期間存続した集落と想定)	
出土遺物	中世陶器 39点・かわらけ1点・石白2点 ※中世陶器産地割合 在地産 28(白石窯産・その他在地産) 常滑産 1/常滑産? 3/産地不明 1/未鑑定 6	中世陶器 14点・青磁1点・かわらけ7点・漆器1点 ※中世陶器産地割合 在地産 8(白石窯産・在地産)/臨海産 2/常滑産 1/ 古瀬戸 1/産地不明 1/未鑑定 1 ※青磁産地: 中国龍泉窯	

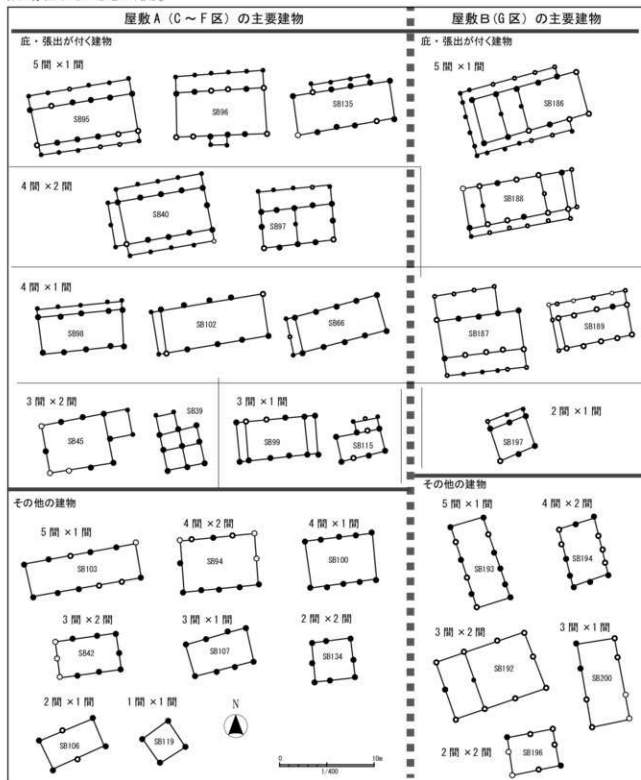
## 【屋敷の敷地範囲と立地】

屋敷の敷地範囲は、建物群の分布範囲でみると、屋敷Aは東西約70m・南北40m、屋敷Bは東西約60m・南北約40m程度と想定され、屋敷Aの方が若干であるがその敷地は広い(第56図)。屋敷立地の面では、屋敷Aが丘陵部、屋敷Bが丘陵西に広がる低地に位置する。標高上、屋敷Aが上部、屋敷Bが下部に立地する点から、屋敷Aの方が好立地といえる。



## 【建物の特徴】

屋敷A・Bそれぞれの屋敷を構成する主要建物の構造・規模は、第17表・第57図に示したとおりである。主屋と想定される建物には、三面庇建物、二面庇建物、庇・張出付建物があり、これらは、屋敷A・Bともに同様の構造のものが確認されている。その規模・占有面積は、両者ともに5間×1間～3間×2間、面積35～80㎡前後の中に収まり、大きな差は認められない。この傾向は主屋以外の建物も同様で、5間×1間の細長い構造の建物や4間×2間～2間×2間の一般的な建物は、屋敷A・B両者に存在し、その規模・構造も類似する。以上のことから、屋敷A・Bそれぞれで確認された建物は、その構造・規模の面で大きな差はなく、むしろ類似する建物が両者に存在しているといえる。



第57図 北経塚遺跡C～F区・G区 中世の主要建物模式図

### 【建物の密度・建替回数】

屋敷範囲内の建物密度の面で両者を比較してみると、丘陵部に立地する屋敷Aの方が、配置された建物の棟数や建物密度が高く、その建替回数も多い（屋敷A：16 時期以上⇔屋敷B：7 時期以上）。

### 【出土遺物の特徴】

遺物は、屋敷Aで中世陶器・かわらけ・石臼、屋敷Bで中世陶器・青磁・かわらけ・漆器が出土した（第17表）。出土遺物の大半は破片資料で、かつ出土点数も少ない。このことから、出土遺物の面で屋敷A・Bを比較することは難しい。

そこで、遺物の中で、最も点数が多く出土した中世陶器全体の特徴についてみてみる。北経塚遺跡で出土した中世陶器の産地には、在地産（白石窯産・その他の在地産）、渥美産・常滑産・古瀬戸産などの搬入品がある。その産地の出土点数の割合について着目すると「在地産のものが大半、搬入品は少量」という傾向が認められた。この傾向は屋敷A・屋敷Bともに共通する。この他には、屋敷Bで12世紀代の渥美産中世陶器、龍泉窯産の青磁が出土した点も注目される。

### 【北経塚遺跡の中世集落の様相-まとめ-】

北経塚遺跡南半の小丘陵上及びその周辺（A～G区）で確認された中世集落は、建物の分布範囲とその立地から、屋敷A【遺跡南東部の標高10m前後の小丘陵上とその東・南斜面の範囲（E・F区東半分～G区西半）】と屋敷B【小丘陵西側隣接地に広がる標高5.6～7.6m低地の範囲】に分けることができ、この2つの屋敷により集落が構成されていたと考えられる。

「屋敷A」は、敷地面積が2,800㎡（東西約70m・南北40m）ほどあり、建物は「コの字状」に配置される。建物群の東西には空地が広がり、建物群に近接して井戸や土坑などが分布する。屋敷Aは、建物の方向・重複関係から、大きくA～C期の3時期に大別することができ、その中で16 時期以上の建物の変遷があったと想定される。その年代幅は、出土遺物の特徴から、概ね13 世紀後半～14 世紀前半がそれ以降の幅におさまるものとみられる（山田・藤田・佐伯2013）。

「屋敷B」は、敷地面積が2,400㎡（東西約60m・南北約40m）程度と想定され、建物は「L字状」に配置される。建物群の南東部には空地があり、屋敷内の生活で使用されたと考えられる土坑が分布する。井戸は建物群の西端に配置され、建物分布範囲の西端には区画溝の可能性ある溝跡が巡る。屋敷Bは、建物の重複関係から、7 時期以上の建物の変遷があったと想定される。その年代幅は、出土遺物や放射性炭素年代測定の結果から、12 世紀代～15 世紀後半または12 世紀代～17 世紀初頭頃の間におさまるとみられる。

「屋敷A」と「屋敷B」は、建物の規模・構造の類似性、出土遺物の年代観等から、ほぼ同じ時代に機能した屋敷とみられる。両者の想定される年代幅、建物の建替回数を考慮すると、屋敷A・Bで構成される北経塚遺跡の中世集落は、中世初期から江戸時代初期まで長期にわたり存続していた集落の可能性が考えられる。「屋敷A」と「屋敷B」には、同等規模の建物が配置されていたが、その敷地面積や立地、建物密度・構成建物の内容から、「屋敷A」は「屋敷B」よりも階層の高い居住者の屋敷地であったと推定される。

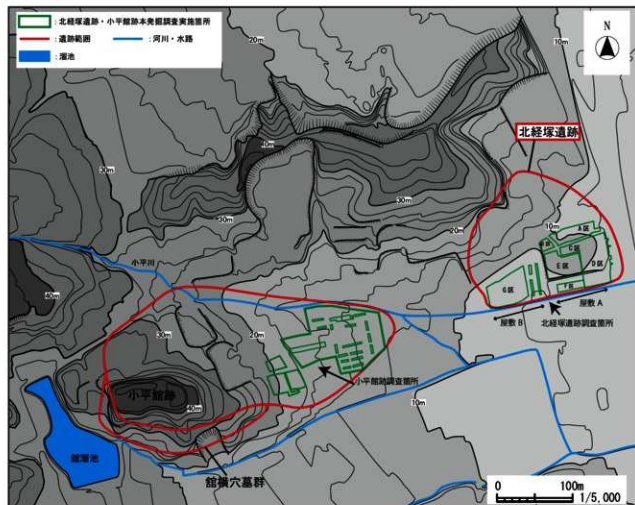
「屋敷A」・「屋敷B」からは、中世陶器、青磁、かわらけ、石臼、漆器が出土した。このうち、中世陶器の産地は、在地産（36点/白石窯・その他の在地）のものが大半を占め、搬入品（8点/渥美産2点、古瀬戸1点、常滑産2点、常滑産？3点）は少量という傾向が認められた。また、磁器は龍泉窯産の青磁が1点出土したのみである。

近年、互理郡南部にあたる山元町域では、谷原遺跡や日向遺跡といった中世の集落の調査が実施されている。周辺の調査事例をもとに、北経塚遺跡の中世集落の位置付けについて考えてみたい。谷原遺跡は、掘立柱建物跡150棟以上、占有面積が100㎡を超える主屋が確認された地域の拠点集落で、中世陶器、かわらけ、青磁、金属製品などが出土している（山田・藤田2016）。このうち、中世陶器については、大半が在地産のもので、常滑産な



どの搬入品はごくわずかしか出土していない。青磁についても、数点出土した程度である。日向遺跡は、掘立柱建物跡 40 棟、主屋となる建物の占有面積が 30~40 m<sup>2</sup>程度の小規模な中世屋敷跡で、中世陶器、かわらけ、漆器などが出土した（山田・藤田 2015）。その中世陶器の産地はすべて在地産のもので構成される。

これらの遺跡と北経塚遺跡を比較した場合、建物の内容・規模等においては、3者ともに大きな違いが認められるが、出土物の面では、地元産の中世陶器が卓越する点は共通する。こうした状況から、互理郡南部にあたる山元町域の中世集落では、集落規模に関わらず、使用された陶磁器類は、「地元産主体・搬入品は少量」という傾向があるといえる可能性がある。この傾向を前提に、北経塚遺跡の中世集落での土器組成を考えると、少量ではあるが青磁や渥美産・常滑産・古瀬戸産の搬入品が使用されている点から、本遺跡の屋敷は、一般よりもある程度有力な階層が居住した集落と判断しても差し支えないと考える。北経塚遺跡の西側約 500m の地点には小平館跡が所在する。近年、東日本大震災に伴う復興事業に伴い、小平館跡東側に広がる平坦地の発掘調査が 4 度にわたり実施されている。その調査箇所は、北経塚遺跡西側 200m の地点にあたり（第 58 図）、中世と考えられる掘立柱建物跡群が確認されている（山田 2015）。小平館跡東側で発見された中世集落の様相については、現在整理中のため、詳しい内容に触れることはできないが、北経塚遺跡の屋敷跡との関連性が十分想定できる位置関係にある。こうした遺構の分布状況、歴史的環境を踏まえると、北経塚遺跡で確認された屋敷跡は、小平館跡の東側一帯に広がっていた中世集落の一部であったとみられ、屋敷には小平館に関わりのある階層が居住していた可能性が考えられる。今後、小平館跡の発掘調査報告書刊行の際に、再度、小平館跡の中世集落の内容も踏まえ、北経塚遺跡周辺の中世の様相について、再度、検討していく予定である。



昭和 55 年山元町発行 1:2,500 国土基本図をもとに作成

第 58 図 北経塚遺跡の調査箇所と小平館跡の位置関係

### 第3節 まとめ

北経塚遺跡は、阿武隈山地から東に細長く延びる段丘先端部に位置する。遺跡の想定範囲は、段丘先端部にある南北に分断された2つの小丘陵とその周辺の緩斜面にあたる。北経塚遺跡において、これまで本格的な発掘調査(1～3次調査)が行われた箇所は、この分断された小丘陵のうち、南側に位置する小丘陵上の平坦面と北・東・西側緩斜面(A～F区)である。今回の調査箇所(G区)は、過去の調査区の西側に位置し、小丘陵西側の低地にあたる。今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡16棟、溝跡5条、井戸跡1基、土坑41基、柱穴・ピット568個(掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む)である。これらの遺構からは、縄文土器、土師器(非ロクロ成形・ロクロ成形)、須恵器、かわらけ、中世陶器、磁器、石器、漆器が出土した。以下、各時代の遺構・遺物について、その要点をまとめる。

1. 縄文時代の遺構には、SK176 落とし穴状遺構がある。SK176 からは遺物は出土していないが、堆積土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果や周辺の調査区の事例から、縄文時代前期頃の遺構と考えられる。
2. 古墳時代の遺構には、SK164 土坑がある。SK164 からは土師器 器台が出土した。その特徴から古墳時代前期の遺構とみられる。
3. 奈良・平安時代の遺構には、SK175 木炭焼成土坑がある。SK175 は、出土した炭化物片の放射性炭素年代測定の結果から、奈良時代末～平安時代前半頃(暦年較正年代 788～871cal AD)の遺構とみられる。
4. 中世の遺構には、掘立柱建物跡16棟(SB185～200)、柱穴・ピット377個(P746～1122)、溝跡5条(SD138～142)、井戸跡1基(SE143)、土坑14基(SK159・161・162・165～174・178)がある。これらは、中世の屋敷を構成する建物とそれに関連する遺構であると考えられる。建物は「L字状」に配置され、建物群の南東部には空地があり、屋敷内の生活で使用されたと考えられる土坑が分布する。井戸は建物群の西端に配置され、建物分布範囲の西端には区画溝の可能性ある溝跡が巡る。屋敷を構成する建物は7時期以上の変遷があったと想定され、その年代幅は12世紀代～15世紀後半または12世紀代～17世紀初頭頃の間におさまるとみられる。出土遺物は中世陶器、かわらけ、青磁、漆器が出土した。出土した中世陶器の大半は白石窯等の在地産であるが、渥美産・常滑産・古瀬戸産の中世陶器や中国龍泉窯産の青磁といった搬入品も少量確認された。今回確認した中世集落は、遺跡西側に位置する小平館跡と関連する階層が居住した屋敷跡であった可能性が考えられる。
5. この他、時期不明の遺構が多数残されているが、これらの多くは中世に属する可能性がある。

## 引用・参考文献

- 青山博樹ほか 2000 「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第2号
- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年-山元平野とその周辺」『北杜・辻秀人先生選評記念論集-』
- 青山博樹 2011 「土師器の編年 ①東北」『古墳時代の考古学Ⅰ 古墳時代史の枠組み』同成社
- 山田順徳・笠原俊哉 互理町教育委員会 1998 『文字館誌』互理町文化財調査報告書第6集
- 飯村均 2009 『中世奥羽のムラとマチ 考古学が描く列島史』東京大学出版会
- 飯村均 2015 『東北中世叢書8 中世奥羽の考古学』高志書院
- 石黒伸一 2005 「山元町の板碑と磯王塚の中世石塔」『宮城考古学』第7号
- 伊藤品文 2006 「山元平野における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57
- 宮見和泰・佐藤善幸 1991 「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第140集
- 氏家典典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
- 小川淳一 2000 『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書第249集
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
- 小山正忠・竹原秀雄編 1973 『新版標準土色帖』2010年版
- 鍛冶一郎 1971 「合戦原古墳址群」『山元町誌』
- 菊地謙二 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
- 菊地逸夫・早川英紀 1996 『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第172集
- 菊地逸夫 2003 「一本杉窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 窪田忍 1995 『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書
- 桑原滋郎 1976 「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 小井川和夫 1984 「いづゆる赤埴土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第10巻
- 佐藤洋 2003 「2陸奥のかわらけ (2) 陸奥南部2-宮城県」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 佐々木・志間泰治・氏家典典 1971 「井戸沢横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』
- 白鳥良一 1980 「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅳ』宮城県多賀城跡調査研究所
- 白鳥良一 1982 「土器」『多賀城跡考古学本文編』宮城県多賀城跡調査研究所
- 紫橋正隆 1974 『史料 山元町内古墳・館』第四巻
- 志間泰治 1956 「宮城県互理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
- 志間泰治 1975 『互理の古墳』
- 志間泰治 2007 『巻報1 歴史を掘り起こす』
- 関教司 2004 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第3集
- 仙臺書齋出版協会 1893 『仙台叢書 封内風土記 巻ノ九』
- 仙臺書齋刊行会 1923 『仙臺古城記』『仙台叢書』第4巻
- 千葉正康 1993 『狐塚遺跡』『狐塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第157集
- 辻山野 1992 「麻釜式土器の変遷とその位置づけ」『究研-理論文化財研究』15周年記念論文集-』
- 辻山野 1994 「東北南部の古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』山川出版社
- 辻山野 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年-その2-」『東北学院大学論集-歴史学・地理学』第27号
- 東北学院大学文化編 2001 『東北中世考古学叢書2 掘立と壱古 中世講義の課題』高志書院
- 丹羽茂 1983 『今原野遺跡』『朽木横穴古墳群・古宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第93集
- 丹羽茂・千葉孝秀 1992 『今原野遺跡』『今原野遺跡-一本杉窯跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集
- 初鹿野博之・山口淳・千葉直樹・大坂拓 2012 『西石山2013新発見考古学速報』文化庁
- 初鹿野博之 2013a 『漢沢遺跡』『発掘された日本列島2013新発見考古学速報』文化庁
- 初鹿野博之 2013b 『宮城県山元町内手遺跡・上宮前北遺跡』『第39回古代城館官衙遺跡検討会資料集』
- 初鹿野博之 2014 『宮城県山元町部の作遺跡』『第40回古代城館官衙遺跡検討会資料集』
- 初鹿野博之 2015a 『熊の作遺跡と互理郡南部の遺跡群』『第41回古代城館官衙遺跡検討会資料集』
- 初鹿野博之 2015b 『熊の作遺跡と互理郡南部の遺跡群』『古代国家形成期の地域城址-山元町の調査から-』平成27年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
- 初鹿野博之 2015c 『熊の作遺跡』『発掘された日本列島2015新発見考古学速報』文化庁
- 初鹿野博之・三浦秋司 2015 『漢沢遺跡-常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ-』宮城県文化財調査報告書第239集
- 引地野行 2002 『館の内遺跡』『宮城県文化財調査報告書』第188集
- 平田信文 2003 「2陸奥のかわらけ (1) 陸奥南部1-福島県」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 福島県史学会中近世部会編 2000 『福島県考古学会中近世部会平成12年度研究セミナー-東北地方南部における中近世集落の諸問題』
- 藤田至昭・加納博・滝沢文敬・八島隆一 1988 『角田地域の地質』地質研究報告 地質研究
- 藤田至昭・千葉孝秀 1992 『宮城県の中世史』『東日本における古代・中世史の諸問題』
- 藤田至昭 2010 「水沼窟-伊豆沼窟-二本木窟-白石窟」『古陶の譜 中世のやきもの一六古窯とその周辺-』
- 藤田至昭・松本秀一 2007 『阿武隈川下流における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討』『人間情報学研究』第17巻
- 古川一明・鈴木貞一郎・大和幸生 1991 『館南開遺跡』『館南開遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第144集
- 文化庁文化財部記念物課編 2010 『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』
- 文化庁文化財部記念物課編 2010 『発掘調査の手引き-整理・報告編-』
- 松本秀一 1984 「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57
- 宮城県教育委員会 2014 「平成26年度東日本大震災事業関連遺跡調査報告Ⅰ」宮城県文化財調査報告書第233集
- 宮城県教育委員会 2015 「平成26年度東日本大震災事業関連遺跡調査報告Ⅱ」宮城県文化財調査報告書第236集
- 宮城県教育委員会 2016 「平成26年度東日本大震災事業関連遺跡調査報告Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第240集
- 宮城県考古学会編 2010 『平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2011 『平成23年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2012 『平成24年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2013 『平成25年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2014 『平成26年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2015 『平成27年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県企画部土地対策課編 1988 『土地分類基本調査 角田』
- 宮城県史編さん委員会 1970 「仙台古城書立之覚」『宮城県史』32 資料編9
- 村田晃一 1992 「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世史の諸問題』
- 村田晃一 1994 「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』
- 村田晃一 1995 「宮城県における10世紀前後の土器」『福島考古』第30号
- 柳澤有明 1994 「東北地方の磁輪陶器」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東3 磁輪陶器-』
- 山田順徳 2008 「企画展開録 互理郡の古墳時代」山元町歴史民俗資料館
- 山田順徳・村上裕次・山口淳 2013 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第4集
- 山田順徳・藤田至昭・佐伯宗司 2013 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第5集

- 山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2014『的場遺跡』山元町文化財調査報告書第6集
- 山田隆博・藤田祐 2014『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第7集
- 山田隆博・丹野修太 2014『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第8集
- 山田隆博・藤田祐 2015『日向遺跡』山元町文化財調査報告書第9集
- 山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2015『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第10集
- 山田隆博 2015a「山元町中筋遺跡の津波痕跡」『宮城考古学』第17号
- 山田隆博 2015b「山元町の復興調査と合戦原遺跡の横穴墓群」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から-』平成27年度宮城県考古学会  
総会・研究発表会資料
- 山田隆博 2015c『小平館跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第11集
- 山田隆博・藤田祐 2016『谷原遺跡Ⅱ』山元町文化財調査報告書第13集
- 山元町誌編纂委員会編 1971『山元町誌』
- 山元町誌編纂委員会編 1986「中島貝塚」『山元町誌 二巻』
- 吉野武 2015「熊の作遺跡出土の木簡と墨書土器」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 渡邊義昭 1917『瓦理郡史』

# 報告書抄録

ふりがな	きたきょうづか4いせき							
書名	北経塚遺跡 第5次発掘調査							
副書名	店舗建設事業に係る発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	山元町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	山田隆博、川口陽子							
編集機関	山元町教育委員会							
所在地	〒989-2203 宮城県亶理郡山元町浅生原字日向12-1 電話 0223-37-5116							
発行年月日	平成29(2017)年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
宮城県亶理郡山元町小平字北 北経塚遺跡	宮城県亶理郡山元町小平字北	043621	14010	37度 59分 4秒	140度 52分 4秒	2015.08.03 ～2015.10.05	1,925㎡	店舗建設事業に伴う本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
北経塚遺跡	散布地	縄文時代前期	落とし穴		縄文土器、石器	落とし穴1基		
	散布地	古墳時代前期	土坑		土師器	土坑1基		
	散布地	古代	木炭焼成土坑		土師器、須恵器	木炭焼成土坑1基		
	屋敷跡	中世	掘立柱建物跡、溝跡、井戸、土坑		中世陶器、かわらけ 青磁、漆器	掘立柱建物跡16棟、溝跡5条、井戸跡1基、土坑14基		
要約	<p>・北経塚遺跡は、宮城県南東部の亶理郡山元町小平字北地内に位置し、阿武隈山地から東に延びる丘陵上に位置する。調査の結果、掘立柱建物跡16棟、溝跡5条、井戸跡1基、土坑41基、柱穴・ピット568個を検出し、縄文土器、石器、土師器、須恵器、かわらけ、中世陶器、青磁、漆器が出土した。</p> <p>・縄文時代の遺構には、SK176 落とし穴状遺構がある。SK176 からは遺物は出土していないが、堆積土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果や周辺の調査区の事例から、縄文時代前期頃の遺構と考えられる。</p> <p>・古墳時代の遺構には、SK164 土坑がある。SK164 からは土師器 器台が出土し、その特徴から古墳時代前期の遺構とみられる。</p> <p>・奈良・平安時代の遺構には、SK175 木炭焼成土坑がある。SK175 は、出土した炭化物片の放射性炭素年代測定の結果から、奈良時代末～平安時代前半頃（暦年較正年代 788～871cal AD）の遺構とみられる。</p> <p>・中世の遺構には、掘立柱建物跡16棟（SB185～200）、柱穴・ピット377個（0746～1122）、溝跡5条（SD138～142）、井戸跡1基（SE143）、土坑14基（SK159・161・162・165～174・178）がある。これらは、中世の屋敷を構成する建物とそれに関連する遺構であると考えられる。建物は「L字状」に配置され、建物群の南東部には空地があり、屋敷内の生活で使用されたと考えられる土坑が分布する。井戸は建物群の西端に配置され、建物分布経理の西端には区画溝の可能性のある溝跡が巡る。屋敷を構成する建物は7時期以上の変遷があったと想定され、その年代幅は12世紀代～15世紀後半または12世紀代～17世紀初頭頃の間にのみまるとみられる。出土遺物は中世陶器、かわらけ、青磁、漆器が出土した。出土した中世陶器の大半は白石窯等の在産であるが、渥美産・常滑産・古瀬戸産の中世陶器や中国龍泉窯産の青磁といった搬入品も少量確認された。今回確認した中世集落は、遺跡西側に位置する小平館跡と関連する階層が居住した屋敷跡であった可能性が考えられる。</p> <p>・その他、時期不明の遺構が多数残されているが、これらの多くは中世に属する可能性がある。</p>							

---

山元町文化財調査報告書第14集

## 北経塚遺跡

第5次発掘調査

—店舗建設事業に係る発掘調査報告書—

平成29年1月31日 発行

発行 山元町教育委員会

宮城県北郷郡山元町茂生原字日向12-1

TEL0223-37-5116 / FAX0223-37-0119

印刷 株式会社 東北プリント

宮城県仙台市青葉区立町24-24

---